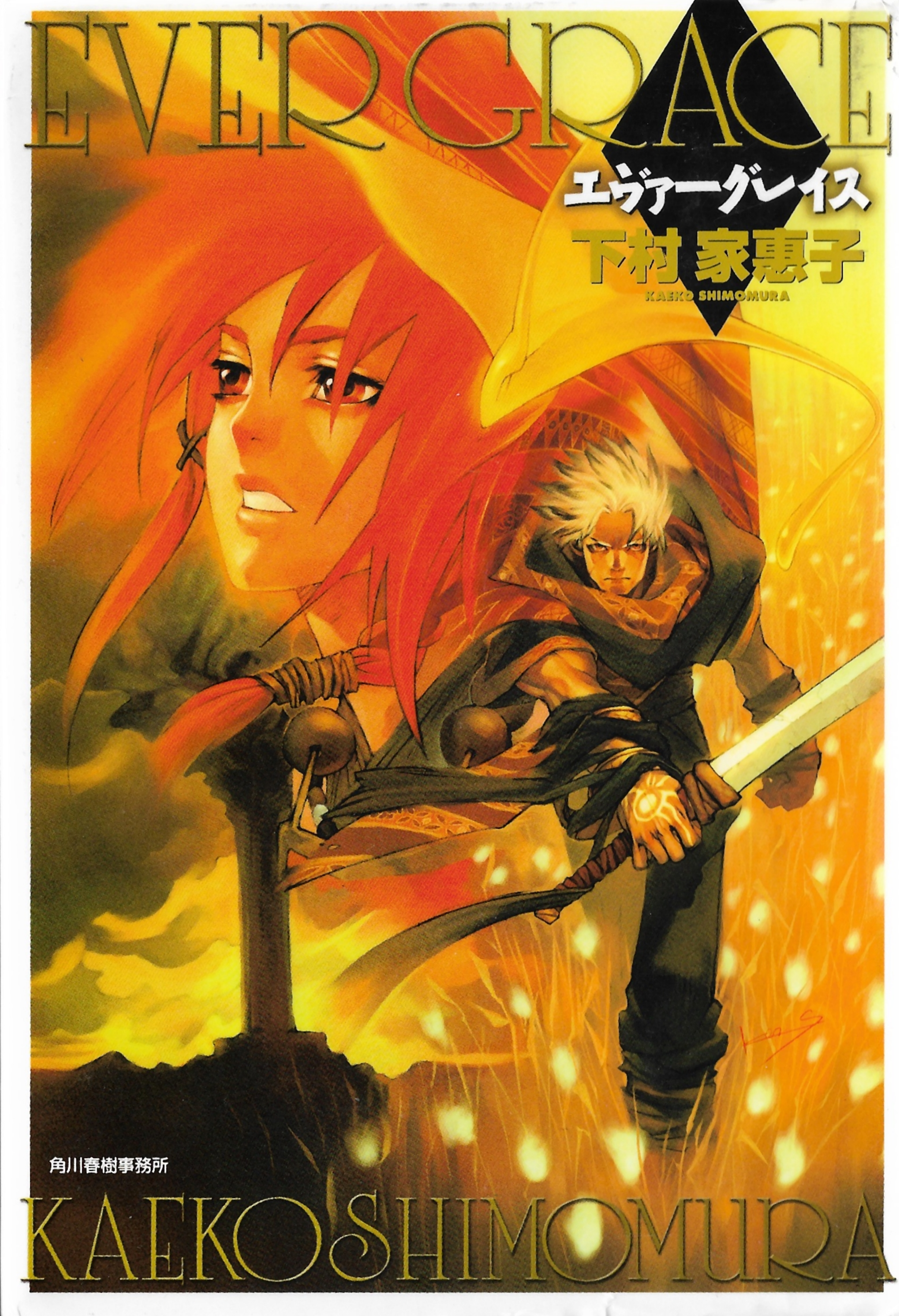
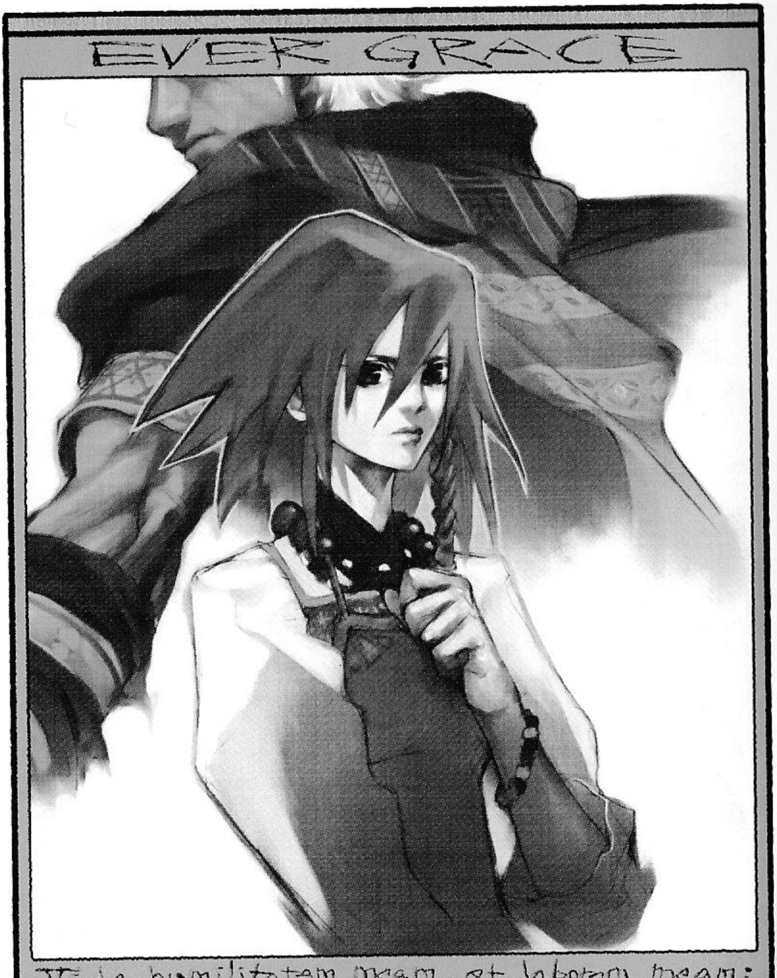

EVER GRACE
エヴァーグレイス
下村家恵子
KAEKO SHIMOMURA
角川春樹事務所
KAEKO SHIMOMURA

EVER GRACE
下村家恵子
KAEKOSHIMOMURA
エヴァーグレイス
角川春樹事務所


EVER GRACE
Vide humilitatem meam, et laborem meam:
Dimitte omnia peccata mea, deus meus.

エヴァーグレイス

下村 家恵子

EVERGRACE

【目次】

CONTENTS





【シャルアミ】
ユテラルドの幼馴染。幼少時のユテラルドが発動した<クレスト>の暴走により行方不明となる。

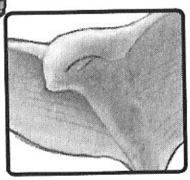






【フェルク】 **【アルフトアイン】** **【リヤナ】**

<ストルタ四剣主>
４つの村からなる同盟から選ばれた、優れた剣の使い手。
フェルク・アルフトアイン・リヤナ・ユテラルドから構成される。



【フォーリム】
消滅帝国リューベーンで、ユテラルドが出会った不思議な生き物。行く先々で帝国の謎を示唆する。

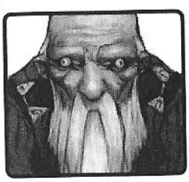


【ナファトⅢ世】
消滅帝国リューベーンの最後の皇。<パルミラ>という魔法の力を込めた武器で、大陸統一を目指していたのだが……。



【オブリッド】
ナファトⅢ世の甥。帝国を襲った異変を解決すべく、ユテラルドとともにバグラゲラを倒すため、<塔>へと向かう。

【ユテラルド】
主人公。右手に呪われた者の印<クレスト>を持っているため、幼少時から迫害されてきた。<ストルタ四剣主>の一人として、<ビリヤナの樹>とモレアの民の討伐に参加したことから、消滅帝国リューベーンを巡る冒険へ至ることとなる。



【バグラゲラ】
<クレスト>と<パルミラ武具>を研究していた人秘学研究者。



【シエナ】
時空を越えて飛ばされてきたシャルアミを助けてくれた女性。バグラゲラに囚われる。

【リスムル】
消滅帝国リューベーンの皇女。



【神官メリダ】
消滅帝国リューベーンの神官。謎めいた言動ながら、ユテラルドの道を示してくれる。



【ビルホルゴ】
<クレスト>のコピー、<アルクレスト>を持つ少年。バグラゲラの手先として現われる。



【赤い疾風】
消滅帝国リューベーンで最強と言われた伝説の戦士。彼もまた<クレスト>を持っている。



【メディナ】
バグラゲラの孫娘。<アルクレスト>の力で生き延びている女性。

序章　追憶

燃えるような夕焼けの赤い光が周囲を染めている。

煉瓦造りの家も、痩せてこぶだらけの木々も、わずかに数匹が肩を寄せ合っている家畜の群れも、家畜に食べつくされて丸裸になった平原も、それらを見下ろす岩だらけの丘も、そして、岩の陰で身を縮こまらせてしゃくりあげている少年の姿も。

少年は大きな岩へすがりつくように身をよせて、あふれでてくる涙を小さな手でぬぐい続けている。柔らかな銀の髪は泥に汚れ、質素なシャツとズボンにも泥がこびりつき、掻き傷がほつれ目になって糸をひきずっている。

涙を流し、小さな肩を大きく震わせながら、少年は懸命に泣き声を喉の奥に押し込めようとしていた。

真っ赤に腫れ上がった目が、涙をこすりとった右手の甲をにらみつける。丸く小さな手の甲には、不思議な模様のアザがくっきりと浮かび上がっている。

少年の左手がアザをこする。手のひらや指で皮膚が真っ赤になるぐらい強くこする。

だが、そんなことでアザが消えるわけがない。

少年はアザを岩の表にこすりつけはじめた。にぎりしめた右手を力いっぱい岩へ擦りつける。

少年の口から泣き声とは別の苦痛の呻きがもれ、岩に血の筋が走る。
痛みにひるんだ少年は、しかし、すぐに幼い顔を憎しみにゆがませて、再び右手を岩へ押しつけた。
「なにしてるの⁉」
大きな人影が、少年と岩の上に落ちる。
夕焼け空よりももっと紅い髪をした女の人が立っていた。
あでやかな長衣を身につけた女性は少年へ駆けより、血を流す手をつかんだ。
「こんなことしちゃだめじゃない」
少年は口を堅く閉じ、凍りついた目で女性をみあげている。
紅い髪の女性は少年のそばへしゃがみこむと、優しく微笑みかけながら、腰にさげた袋から布を出して少年の傷を押さえた。
「さぁ、一緒に帰りましょ。この間の雛鳥が飛べるようになったって言ってたじゃない。見せてくれる?」
「帰らない……。僕なんかいない方がいいんだ」
かすれるような少年の声に女性は驚きの目をあげる。少年の琥珀色の瞳から再び涙があふれでていた。
「みんな、《クレスト》を持ってる僕なんかに生きていて欲しくないんだ」
「誰がそんなことを言ったの?」

少年の顔が涙に誘われるように下をむき、くぐもった声が怒りをこめて訴える。

「村のみんなが言ってるよ。僕がいるから不作が続いたり、家畜が死んだりするんだって！　父さんがえらい人じゃなかったら、村になんか置いておかない、さっさと追い出せるのにって……、僕みたいな疫病神がいるから、父さんも母さんもひどいこと言われてるんだ。シャルアミも僕のせいで、狩場から追い出されちゃったんでしょ？」

シャルアミと呼ばれた女性の顔に、驚きと怒りと悲しみが入り混じった苦しみの表情が浮かぶ。少年が手を振り払おうとするのを引きとめて、泥だらけの髪にそっと触れる。

「そんな言葉を気にしちゃだめよ。作物がうまく育たないのは、このあたりの土地のせいで、ずっと昔からのことだし、家畜が病気になったのだって飼ってた人の世話が悪かっただけ。私が……狩りに行けなくなったのは、狩猟頭と大喧嘩したのが原因よ。ユテラルドとはなんの関係もないわ」

「……でも、僕がいてクレストがある限り、嫌なことは続くんでしょ？」

少年は何かの重みに耐えるかのように、両肩を落し頭を深くたれてうなだれている。

シャルアミはおだやかに首をふった。

「そんなことないわ。もちろん、これからもいろんなことがあると思うけど、それはやった人が原因。このアザになにができるというの？　毎晩毎晩、ユテラルドの手から抜け出して、誰かの枕もとで踊ってるのかしら？　ばかばかしい」

シャルアミは笑顔を見せると、少年の髪から泥のかたまりを元気良くはね落とした。

「今度、そんなことを言う人がいたら、すぐに私へ知らせて。二度と言いたくなくなるぐらいやっつけてあげるから」
「そんなことしたら、シャルアミまで……」
「気にしないの！」
シャルアミの両手が、ユテラルドの顔をはさんで上を向かせる。少年の泣き顔へ彼女は元気な笑顔をみせた。
「ユテラルド、私は村の誰よりもあなたのことが一番好きなの。だから誰がなんて言ったって、私があなたを守ってあげるわ。安心して」
驚きの目で見上げたユテラルドを、シャルアミの両手がやさしくまねき寄せた。
よろめいてもたれかかった少年は、とくとくと血が脈打つ白い喉に顔をうずめた。両肩と背中にまわった彼女の腕が、強く自分を抱きしめる。
温かい……。
血の繋がった肉親以外の者からの、初めての抱擁。
少年の中で怯えてちぢこまっていた何かが、温もりにふれて熱く喉の奥をつまらせる。シャルアミの手が背をさするやさしい動きに、喉の奥から声がこぼれ出る。
堰を切ったように大声で泣き出した少年を、紅い髪の女性はやさしく抱きしめていた。

第一章　クレスト　その呪わしきもの

　その大地は百年もの年月の間、一度たりと命を宿したことがなかった。

　草一本、苔の一片すら見当たらない、赤茶けて土ぼこりが舞い飛ぶくぼ地は、小さな村なら十ヶは納まるだろう広さを持っていたが、見えるものと言えば大小の岩と痩せた土地、動くものは天高く通りすぎる鳥と陽炎だけ。

　住む人も通う獣もいない広大な土地は、かつてはリューベーンと呼ばれた大帝国の首都があった場所だった。

　リューベーン。

　圧倒的な武力を誇り、エディンベリー大陸の全土を掌握しようとしていた大帝国。

　小山の頂上に立つ城を中心に、整然と建てられた城下町と石畳の街道が四方へ広がる美しい都だったと言われている。だが、その都市は周辺の村なども道連れに、ある日こつぜんと消えうせてしまい、後には不毛の大地だけが残ったのだ。

　政治や生活の中心であった都を失った辺境の集落は、自立の方法を模索するしかなかった。

　だが、帝国が消えた日を境にして大地から恵みの力が失われてしまい、どれだけたがやそうとも麦などは、穂の半分も実が入らず、野菜も痩せて筋ばかりが固くなってしまう。家畜も野の

動物も数を大きく減らし、飢饉が多くの人々の命を奪った。
力のある村は略奪などの方法で生きのびようと周辺の集落を襲うようになり、荒れた苦しい戦乱の時代が始まった。争いは飢えと共に人々を疲れ弱らせる結果となり、危機感を持った人々によって、村々の間で同盟が結ばれることとなった。
同盟に加わり生き残った村は「ストルタ」「モレア」「セクルエ」「リカルテ」のたった四つ。同盟国は《フォントレール》と名づけられ、四村から選ばれた代表が集まる議会によって取りまとめられた。
形式上では一つの国になった《フォントレール》だったが、荒廃した世の中で互いに自分の利益を優先させようとすることが多く、小競り合いが絶えることがなかった。
その中でも最大の争いが起こったのは、ある学者が「ビリヤナの木が土地の生命力を奪っている可能性がある」と言ったためだった。
ビリヤナとは、フォントレール内の一村「モレア」が、信仰の対象としている樹木。
特にモレアが守る森の奥深くに生える巨大なビリヤナの樹木は、天地創造の時、最初に現れた生命であると言われ、万物の始祖であり、すべての生きとし生けるものの母とされている。
美しい銀色の幹を持ち、光り輝く白い花を咲かせるビリヤナには、謎めいた能力があった。
ビリヤナには果実はあるが種はなく、そもそもビリヤナの若木というものが存在していなかった。森を形作るビリヤナの全ては、ある日、成長した樹木の姿でこつぜんと現れたのだ。
モレアの民はビリヤナの不可思議な力を神聖なものとして崇め守り、一生を森へ仕えること

に捧げてきた。

　ビリヤナを悪とする意見に、当然のごとくモレアは反発し、モレアの村にあるビリヤナの周辺では荒廃は進んでいないことを主張したが、残りの三村、特に不毛の地に近い「ストルタ」は帝国消滅時の文献から「帝国のあった地はビリヤナの木に覆いつくされ、ビリヤナが消えると共に何もかもが失われた」との一文をあげて、全土が荒廃する中、ビリヤナの回りだけ無事なのは全てを奪って我が物にしているからだと責めたてた。

　モレアはフォントレールから離脱し、両者の間で激しい争いが起こった。

　フォントレールの三村は数では勝っていたが、モレアの民のほとんどは、ビリヤナの森を守る戦士であり、特に《報復者》の優れた剣技は名高く、守りの立場であることも働いて優位に立っていた。

　だが、繰り返される襲撃によって徐々に領土を奪われたモレアは、ビリヤナ伐採の先頭に立つストルタの指導者を暗殺することで事態を解決しようとした。事実、その事件で伐採のための追撃は中断されたが、フォントレールの人々に深い憎しみを植えつける結果となり、数年の空白の後には、さらに激しく容赦のない攻撃が始まった。

　フォントレールの兵はモレアの土地を踏み荒らし、モレアの人々は聖地であるビリヤナの森へ立てこもって森の地の利を生かしての鉄壁の守りで応じた。

　モレアの抵抗の前に、フォントレールは決め手を欠いたまま、戦いは十年の長き年月に及んだ。

フォントレールは正攻法ではらちがあかないと考え、続く戦いの中で名をあげ、その勇猛果敢さから《四剣主》と呼ばれるようになった四名の若者を呼び集め、軍による攻撃の際にモレアへ潜入し、ビリヤナを伐採するよう命じた。
《四剣主》の一人は、それを心良しとせず立ち去ったが、三人はフォントレールを離れ、荒廃した今の世では、他で見ることができないうっそうと繁った森の中へと忍び込んだ。

鋼の刃が顔面に迫る。
ユテラルドは素早く身をかがめて、致命的な一撃を指一本の隙間でかわすと、力強く長剣を振り上げた。
重い衝撃と共に剣先が革鎧に食い込み、えぐりながら切り裂く。おおきくのけぞった敵が、跳びすさろうとするよりも早く、体の重みを乗せて剣を突き出した。
柔らかなものを引き裂く感触が柄を握りしめた手に伝わる。剣の切っ先は敵の草色の鎧の中に食い込み、剣身が吸い込まれていく。苦痛に敵の目が大きく見開かれ、薄く開いた口から鮮血があふれる。苦しまぎれに放たれた敵の力ない一振りを軽く受け流すと、とどめを刺すためさらに深く剣をねじり込む。
下生えを踏みしだく音にふりかえると、薄暗い木立の影から、黒と赤で彩られた鎧の男が飛びだしてきた。装飾のない額当てと、縁に赤い模様が彩られている黒い革鎧を身につけた男は、ずっしりと重たげな戦鎚を振りかぶって迫ってくる。

黒と赤の鎧。

つかのま、眼前の光景が炎に赤く染まった村へ変わった。

我が家を焼く赤い……炎。父と母が倒れた地面を、ゆるゆると這う赤い……血。

両親の胸に突き刺さった斧を、黒と赤の鎧の男が引き抜き、もう一度大きく振りかぶる。

岩のような無表情な顔。頬に走る大きな傷跡。

肉と骨を絶つ音と共に、父の首が地面を転がる。

赤い血の筋を引きながら、こちらへ。

「でやぁぁぁ！」

男の雄叫びが赤い幻を打ち消す。ユテラルドは身構えようとしたが、剣は瀕死の敵の体に食い込んだままだ。

剣を手放して、軽業師のように地面を転がると、寸前までユテラルドがいた場所を、戦鎚が風を切って通りすぎる。

二撃目を森の木の影でかわしつつ、ベルトにさしたナイフを抜くと、目の前に構えて敵の隙をうかがう。敵も戦鎚を振り上げたまま、油断無く身構える。男の顔に傷は無かった。

間髪逃さず男が踏み込む。ユテラルドは退がる。

ナイフと戦鎚では間合いがちがいすぎる。残してきた剣へ目をやると、眼前の敵がそれをさえぎるように、じりじりと動いて割り込んだ。

どうにかして剣を取り戻すか、それともナイフで勝負するか。どちらにしても、敵の構えを

崩さなくては話にならない。だが、目の前の敵は隙を見せるどころか、一歩一歩と押してくる。少しずつ後ずさったユテラルドは、何か固いものに足をとられて小さくよろめいた。

敵が迫る。舌打ちしてユテラルドも飛び出す。敵の一撃はかわせないだろう。だが、こちらも外すつもりはない。ナイフが力いっぱい引かれ、振り下ろされる戦鎚が唸る。

何かが風を切って飛び込んでくる。敵の体が小さく跳ねて戦鎚が力を失ったのを見計らって、ふらつく戦鎚を手甲で受け流したユテラルドはナイフを敵の顔に突きたて、さらに空いた左手で杭を打つように叩きつけた。

敵の体はそのまま仰向けに倒れ込む。男の首筋には見なれた模様の羽がついた矢が刺さっていた。

「ユテラルド、大丈夫か？」

「はっ、先走って死にかけてちゃ、ザマァねぇな」

背の低い木と草の茂みをかきわけて、二つの人影が姿を現した。

一人は長い栗色の髪を一つに束ねて後ろへ流した小柄な青年で、冬の青空を思わせる淡くすんだ青い軽鎧に短弓を手にしている。もう一人は黒い髪を短く刈りそろえた、ひょろりと背の高い青年で、よく磨きこまれたブレストプレートが鈍い銀色の光を放ち、ゆるやかに湾曲した剣を二本、背と腰に下げている。

栗色の髪の青年はユテラルドへ駆け寄ると、クルクルと周囲をまわりながら頭の先からつま先まで目をやった。

「こいつらの村の場所はわかったんだから、そんなに焦る必要はないんだよ。ユテラルドの気持ちはわかるけど、無茶をして大ケガしたらどうするんだよ？」
「………」
「さっきだって、ホント、寿命が縮んだよ。ケガはこれだけ？」
栗色の髪の青年はユテラルドの右手を取る。戦鎚をはねのけた時の衝撃でだろうか、手甲はひしゃげて留め紐が千切れている。ユテラルドは慌てて手の甲を押さえた。
青年は、そんなユテラルドを見上げて人懐っこい笑顔を見せる。
「隠すことないだろ？　兄弟みたいなもんなんだからさ」
青年はユテラルドの手をどけて、壊れた手甲を確かめる。
「あーあ、ずいぶんゆがんでるね。さっさと直しちゃおう。ほら、外して」
「……どれぐらいかかる？」
「ん、三時間ぐらいかな？　フェルクが手伝ってくれたら二時間」
「おい、力仕事ばっかり俺にふるんじゃねぇよ」
敵の死体を覗きこんでいた黒髪の男が、振りかえって顔をしかめる。
「ったく、なんだって俺がこいつの尻拭いばっか、やんなきゃなんねぇんだよ」
「そりゃ、ユテラルドに尻拭いをやってもらったお礼でしょ？」
「い、いつ、やってもらったってんだよ！」
「ラトーヤの戦役で頭カチ割られそうになった時だろ、グロンゴで堀に落ちて上がれなくなっ

た時だろ、銀の射手に呪いの矢を射かけられた時だろ、それに……」
「もういい、もういい！　リヤナ！　それ以上言うなっ、くっそぉ、人の古傷えぐりやがって……」
「何だったら、俺の貸し分も上乗せするけど？」
「く……っ、堅物のアルフトアインが居なくなって、ほっとしてたらこれだ」
　フェルクと呼ばれた男は頭を抱える。
「……二時間もかける余裕はない」
　えっ、と見上げるリヤナの手を払ったユテラルドは、ゆがんでぶら下がっている手甲を引きちぎる。リヤナの目は手甲に隠されていた手の甲へ吸い寄せられた。
　十数年、剣を握り続けた、がっしりと肉厚な手の甲に、奇妙なアザが浮かんでいる。
奇怪な目のような、異国の華のようにも見える模様。
　クレスト。
　――呪われた者の烙印。
　それを持つ者のまわりでは不吉なことが起こり、やがては死を呼び込むと言われている。
　そして、実際にユテラルドの両親と幼なじみは非業の死をとげ、生まれ故郷の村からも離れざるをえなくなった。
　呪いの紋章。
　ユテラルドが身を引き、リヤナの目からアザを隠す。見上げたユテラルドの顔は暗く沈んで

いる。リヤナはつとめて明るく微笑んだ。

「あーあ、壊しちゃった。また鍛冶屋のおやじさんに叱られるぞ」

「………」

ユテラルドは黙ったまま、さらけ出された右手の甲を落ちつかなげにさする。と、黒い塊が弧を描いて飛んでくる。受け止めたユテラルドの手の中で、塊はほぐれて薄い革のベルトになった。

「貸しといてやらぁ。滑り止めぐらいにゃなるだろよ」

ぶっきらぼうに言ったフェルクは、ユテラルドとリヤナの視線に気づくと、バツが悪そうにそっぽを向く。友人の照れ隠しのポーズに、リヤナはクスクスと肩を震わせながら、ユテラルドの右手にベルトを巻いた。

指のつけねから手首まで広がっているクレストを、それだけで全て隠すことはできなかったが、巻き終わった右手を見るユテラルドは、あきらかに安堵していた。

「光ってるぜ。あのおっさんの言ったとおりだな」

フェルクが行く手に広がる森の一角を指す。日が傾きつつあるとはいえ、まだ青い空の下、フェルクが言う光を見つけるのは難しいが、風にゆらゆら揺れる木々の間から、かすかなきらめきが目を打った。

厳しい表情で光を見つめていたユテラルドは、死体に刺さったままだった長剣を取ると、足早に森へ入って行く。

「ユテラルド⁉」
「ったく、トサカに血ィ上らせやがって」
「大事な人の仇（かたき）……だもんな」
「だからって、あのバカ、正面から突っ込みかねねぇぞ」
「急ごう」
ユテラルドの姿は、深い森の奥に消えようとしている。リヤナとフェルクは駆け足で後を追った。

その村は、深い森の中にひっそりとたたずんでいた。
森と共に生きる、森の守（も）り人《モレア》の集落。
樹齢（じゅれい）数百年と言われる木々の根元や梢（こずえ）に粗末（そまつ）な家を作り、ビリヤナの樹（き）を神とあがめている隠者（いんじゃ）たちの村だ。
うっそうと繁る木の根元には陽（ひ）の光がとどかず、苔やわずかな草しか生えていない。ユテラルドたち三人は、大きく張り出した木の根を影に、質素な村を見下ろしていた。
「しみったれた村だぜ」
フェルクが顔をしかめる。
「……でも、荒れ果ててる様子はないね。やっぱり森の中は大丈夫なんだ」
周囲をうかがったリヤナがささやく。

「けっ、あいつら、自分とこの領土は平気だからって、ビリヤナの木をかばいだてしてやがるんだぜ。ふんじばって、外の村がどれだけ飢えて苦しんでるか、見せつけてやりてぇぜ」

「……本当に、ビリヤナが原因なのかな？」

「おいおい、なに言ってんだよ？　あの木がそこら中の土地を枯らしてるんだって、お偉いさんも学者野郎もそろって認めてるんだ。そもそも、あのモレアの連中もリューベーンにビリヤナが現れた後、帝国が消えていたって話を否定しちゃいない。疑う理由なんてないはずだぜ」

「それはそうだけどさ」

フェルクは大げさにため息をつくと、村の向こう、なだらかな丘の上で白く淡い光を放つ、不思議な木々の一団を指差した。

「俺たちは、あれを燃やして、これ以上の害を食い止めるために、こんなところまで来たんだろうが。踏ん切りつかなくてノコノコ帰ったりしたら《四剣主》の名が泣いちまう」

リヤナは光を放つ木々を見つめた。

美しい木だ。普通の木にありがちなゆがみやコブはなく、すがすがしいまでに真っ直ぐ伸びている。枝もしかり。大きく天へさし伸ばされた枝には緑あざやかな葉が生い茂り、その間から白く柔らかな光の粒が、天の星のように輝いている。

おだやかな風が梢をゆらすたび、光はサラサラと舞い踊り、ゆるやかに降り積もる。モレアの民は、あの木を《万物の母が宿る神聖な樹》として崇めたてている。その気持ちは判らなくない。できることなら、あの大木の下へ行き、飽きるまでずっと光の乱舞を眺めていたいと思

う。しかし……。
「気が進まないのならここにいろ。俺がやる」
ユテラルドが進み出る。村を見下ろす目は冷たく凍っている。
「俺ならできる」
右手が固く握りしめられる。
——それは、死をもたらす災厄の印。
リヤナは銀色の髪をした友人を見上げ、その肩を軽く叩いた。
「俺の役目をとらないで欲しいな。それでなくったって、腕が落ちたんじゃないか、もっとしっかりしろって父さんに絞られてるんだしさ」
「そうそう。しっかりしねぇと、俺とユテラルドだけが英雄になっちまうぜ」
フェルクはニタニタと歯を見せて笑ったが、すぐに表情を引きしめた。
「で、どっちを先にやる？」
「そりゃ、もちろんビリヤナが先だよ。村を迂回してビリヤナの森に入って火を放ち、すぐに村にも火を放つ」
「で、モレアの連中がビリヤナに近づくのを邪魔するだけ邪魔して退却って寸法か」
「……俺は逃げない。最後まで残る」
リヤナとフェルクはそろってユテラルドを見つめる。
「なっ、なにバカ言ってんだ？　いくら俺たちの腕が立つったって、《森の報復者》って呼ば

れるモレアの村だぜ。どんなヤツがどれだけ出てくるか判んねぇんだぞ!?」
「お前たちは逃げればいい」
「なんだと!」
ユテラルドの襟首をつかみ上げたフェルクの拳を、リヤナがしがみついて押さえる。
「やめろって、二人とも場所をわきまえろよ!」
「俺は誓ったんだ。仇は一人残らず滅ぼすと」
襟首をつかむ手を振りほどいたユテラルドは、張り出した木の根が迷路のように入り組む斜面を下って行く。フェルクは歯噛みして拳を振りまわす。
「そんなに死にたきゃ勝手にしやがれ!」
「フェルク、ごめん、許してやってくれよ。あれでも俺たちのことを、心配して言ってるんだからさ」
「どこがだぁ？　おまえ、よくそれだけ良い方に考えられるな」
「あはは、だってもう十年以上一緒に暮らしてる家族だしね。ほら、早く行かないと置いてかれるよ」
「ったく、世話のやける野郎だぜ」
リヤナとフェルクはユテラルドに追いつくと、村の外周に沿ってビリヤナの森へ回り込んだ。
近づくにつれ、ビリヤナの光は幻想的な美しさを増して行く。光の粒が舞う下を三人は這うように近づく。二度ほどリヤナが鳴子の罠を見つけ出し、慎重に外したが、ありがたいことに、

モレアの村には犬などの動物の見張りはおらず、あちこち歩き回る家畜は、三人には無関心で、ひたすらエサを探しまわっていた。
ただ一度だけ、すぐ目の前の家から女が現れた時は、あまりの近さに三人は身をすくませた。女は眉をひそめて周囲をみまわすと、まっすぐ三人が隠れている木の影へ近づいたが、別の木の上から子供の声が聞こえると、なにやら大声で叱りながら、その方へ立ち去った。
「命拾いしやがったな、あの女」
細い縄を両手に絡めたまま、フェルクがつぶやく。
「うん、こっちもね」リヤナは弓を下ろす。
ユテラルドもナイフを鞘に収めようとしたが、かすかな気配に振り返った。
ほんの少し離れた木の影に、十歳ぐらいの男の子と、成人を迎えようとしている歳の、しかしまだあどけなさの残る少女が恐怖の表情でユテラルドたちを見ている。
見つかった！　大声を出されるわけにはいかない。その前に口を封じなくてはならない。
しかし、少女の赤い髪を見たまま、ユテラルドはその場から動けなかった。
「お姉ちゃん、変な人がいるよ」
少年が唖然とつぶやく。それがきっかけになって、少女は甲高い悲鳴をあげた。
「子供？」身構えたリヤナの矢じりが揺れる。
「ユテラルド、なにボーッとしてやがんだ！」
フェルクが飛び出すが、それよりも早く子供たちは村の中へ駆け込み、よそ者がいると大声

で叫びたてた。

「ちっ、ビリヤナの森に入るぞ！」

フェルクは身をひるがえして輝く森へ走り出す。ユテラルドは自分の失態に唇をかみしめつつ、後を追って丘を駆けあがった。

ビリヤナが生える丘の上は、光の粒に照らされて白く輝いている。ユテラルドたちは森の中央にある、ひときわ大きなビリヤナの木へ駆け寄った。

「ユテラルド、火だねを！」

リヤナはベルトの袋から油を染み込ませた布を取り出し、フェルクも小さな壺を手に身構えている。ユテラルドはベルトにつけた陶器の筒から、火種の縄を引き出した。

「待たれよ！　今一度考え直してはくださらぬか？」

丘の下から深緑のローブをなびかせながら、息をきらせ血の色を失った老人が駆け上がってくる。一緒に来た少女へ待つように手振りすると、老人は痩せた両手を広げて大樹をかばって真っ向からユテラルドたちを見つめた。

「じいさん、たった一人で時間稼ぎとは立派だねぇ。さっさとどかねぇと焼け死ぬぜ」

フェルクはニタリと笑うと、一本のビリヤナの木へ油の入った壺を叩きつけた。乾いた音をたてて壺の破片と油が飛び散る。老人は真っ青になった。

「なんと言うことを！　ビリヤナ様が死ぬとこの世も終わるというのに……」

「残念だけど、そういうたわごとにはつきあえないんでね」

フェルクは別の木にも壺を投げる。その様子をみつめながら老人は怒りにガタガタと体を震わせている。
「村から武器を持った男たちが来る。ユテラルド、火を！」丘の下を見ていたリヤナが鋭く告げる。
「待て！　村の者には手出しはさせん。わしのこの命もくれてやろう。ただ、ビリヤナの木だけは見逃してくれ」
「はっ、信用できるわけねぇだろ？」
「……カイーナ、皆を止めるのだ」
老人は振り帰ることなく声をかける。丘の途中に取り残されていた少女は大きくかぶりを振り、悲痛な叫びを返す。
「そんな！　このようなよそ者など……」
「わしの命でも、村人の命のためでもない！　わからぬのか!?」
少女は打たれたように身を強ばらせると、すすり泣きの声をもらしながら、丘を登る村人たちの方へ駆け出した。
「……俺たち、すっかり悪人だね」疲れた声でリヤナがつぶやく。
「しかたねぇだろ。こっちだって外の町や村の人間の命がかかってんだからよ」
しらけた顔でフェルクが答える。
「ならば、なおのことだ。ビリヤナ様が枯れれば大地も死ぬ。それは伝えたはずだ」

老人は食い下がる。「外の地が痩せているのは、ビリヤナ様の力が弱くなったためなのだ。時がたち、ビリヤナ様の力が蘇れば、大地も蘇るのじゃ」

「村人の動きが止まった。登ってくる様子はないけど、丘を取り囲むみたいだね」

村人を見下ろしていたリヤナがささやく。ビリヤナの放つ光の輪にそって、モレアの村人がユテラルドたちを見つめている。モレア独特の深い草色に染めた革鎧の男たちの先頭には、黒い鎧の《報復者》たちがいる。リヤナは油断なくそちらへ矢を向ける。

老人はしぼり出すように言葉を続ける。

「《万物の母》に誓って、わしはお前たちの町や村を救うために言っておるのだ。たのむ、時をくれぬか？　そのためなら……われらモレアの民は全て……お前たちの主に仕えてもよい」

「一族そろって……奴隷になってもいいって言うのか？」

思いがけない言葉に、フェルクとリヤナは顔を見合わせる。老人は苦悶の表情をうかべつつも、はっきりとうなずいた。

「その通りだ」

リヤナは、のろのろと首を振った。

「フェルク、ユテラルド……、ダメだ判らなくなってきた」

「……俺には関係ない」

ユテラルドはフェルクの手から壺を取り上げると、次々とビリヤナの根元に放り投げる。

「大地が枯れようが知ったことか。俺の望みは俺の両親を殺し、村を滅ぼそうとしたモレアへ

の復讐。ただそれだけだ」

感情のうせた仮面のような顔でユテラルドは種火をかかげる。老人は愕然とユテラルドをみつめると、震える声で問いかけた。

「おまえは……ストルタの者か？」

「そうだ」

老人は、がくりと肩を落とし、取り囲むモレアの人々の間に重苦しいささやき声が起こった。

「おお……、なんということだ。やはり、こうなったか……。おまえ、クレストを持つ者であろう？」

「そうだ！　俺も殺すか!?　父や母、そしてシャルアミと同じように！」

怒りに声を荒げたユテラルドは、火種をギラギラ光る油の池へと放り込む。ぼっと音を立てて炎が涌きあがった。

「おまえたちは俺の家族を殺した。俺はあの日のことを忘れはしない」

炎はまたたくまに、すべての油溜まりへ燃え広がり、チリチリと音を立てながらビリヤナの幹へ這いあがって行く。怒りに顔をゆがませたユテラルドを、炎の照り返しが赤く染め上げ鬼神のように見せる。

モレアの人々の間から「早く消せ！」「水だ！」とのどよめきがあがり、右往左往しながら四方へと散って行く。そのうちの何人かが武器を手に自分へ向かってくるのを見たユテラルドは笑いながらそれを迎え撃った。

「あの時、俺は子供だった。何もできないただの子供だった。目の前で両親が殺された時も、シャルアミが俺をかばってくれた時も何もできなかった。おびえた俺は祈った。なにもかも消えてくれれと。そうだ、消えたんだ。両親を殺した男も、シャルアミも！　俺が生き残ったのは、ただ、このクレストの呪わしい力のせいだったんだ！」

棍棒を振りかぶる敵の腕に切りつけ、槍の柄を叩き折り、風を切ってなぎはらってくるナイフをかわすと、よろめきでた相手に剣の刃を沈める。血にまみれた剣をふりかざしてユテラルドは叫んだ。

「俺は呪った、クレストを、そしてお前たちを！　俺の大切な人々を奪ったものを決してゆるしはしないと!!」

炎は風を巻き起こし、まるでユテラルドの怒りのように吹き荒れる。ビリヤナの葉と光の粒が渦巻きながら空へ舞い上がった。

「やべぇぞ、ユテラルドのやつ、キレやがった」

なんとか敵の輪から抜け出したフェルクが、リヤナの背後につく。

「アイツ、本気でここで討ち死にする気かぁ」

「そんなこと……させてたまるか！」

リヤナは邪魔をする村人を叩き伏せ、ユテラルドを取りかこむ人々の輪へ駆け寄った。

「ユテラルド！　潮時だ、引き上げるぞ！」

「行け、俺にかまうな！」

目の前の敵を倒したユテラルドは、新たな敵を求めて周囲に目をやる。返り血を浴びた壮絶な彼の気迫に、モレアの剣士たちは踏み込めずにいる。
「バカなことを言うな、ユテラルド！」
「リヤナ、言ったはずだ。俺はこいつらを許さない。そしてこのクレストも許さないと」
「死ぬなんて止めろ！」
彼の言葉の意味を飲み込んだリヤナはユテラルドを取り囲む敵の輪へ飛び込もうとするが、フェルクが慌てて引き戻す。
「離せ、フェルク、離してくれっ！」
「バカ野郎、てめぇまで死ぬ気か⁉」
「ユテラルド！　ユテラルドを連れ出さないと！」
もがくリヤナとフェルクにも、容赦なくモレアの剣士が襲いかかってくる。フェルクは片手でリヤナを捕まえたまま、もう片手で敵の攻撃をしのぐ。
「くそぉ、俺まで死んじまうだろっ！」
炎が起こす風のうなりの中、ユテラルドはつぶやく。
「俺はここで死ぬ。それが……シャルアミへの償いなんだ」
『シャルアミ』
だれかが繰り返した。
『シャルアミ』

『シャルアミ』

『シャルアミ』

炎に焼かれるビリヤナの木々の間を、風と光の粒とささやき声が渡る。

『シャルアミ』

『シャルアミ』

『シャルアミ』

そして

『……ユテラルド?』

名を呼ばれて、ユテラルドはハッと顔をあげた。火の粉と光とがきらめく大樹のこずえに、ひときわ輝くものがあった。

丸い……実。

キラキラと輝く木の実の表面は、まるで水のようにゆらめき、波打っている。

波打つ向こうにあるのは、空。そして、黄金色の森。

見たことのない景色。

その中にたたずむ人影があった。

陽の光に紅く輝く髪。左耳のそばの一本だけの三つ編みは《彼女》が好きだった髪形。ストルタの女狩人たちが着ていたのと同じ服を身につけ。片手には羽根飾りのついた白い弓。

少女はふりかえり、不思議そうに小首をかしげる。

「シャル……アミ？　……ッッ！」
　鈍い痛みに右手を見ると、革ベルトを透かしてクレストが白く浮かび上がっていた。模様は脈打ちながら見る見る光を強めていく。ユテラルドは苦痛と怒りにわめいた。
「今度は何をする気だ？　止めろ！　止めろ！　止めろぉぉっ！」
　クレストとビリヤナの木々が一斉に光を放つ。目を焼く白い光が消えた後、ユテラルドの姿は忽然と消えうせていた。

第二章　リューベーン　おごりの果て、消えた帝国都市

サラサラ……、

乾いたものがこすれあう、かすかな音に気がついた。

風が頬や腕、むきだしの肌の上をすべって行く。

少し……寒い。

深いところに沈んでいた意識が、少しずつ浮かび上がる。

俺……何をしてたんだ？

俺は……俺は確か……、

ばさっ！　ごわごわしたものが顔におおいかぶさり、ユテラルドは慌てて跳ね起きると、顔に貼りついた何かを払いのける。それはあっけなく手の中で崩れ去った。

こげ茶色の枯葉。

辺りを見まわす。黄金色の……枯れた草むらが広がり、所々に崩れた石組みがのぞいている。

見上げると大きく枝を広げた木から枯葉が舞い落ち、ユテラルドの上に降りかかる。

「ここは……どこだ？　俺は……」

ユテラルドの脳裏に、燃えあがるビリヤナの森と、モレアの剣士たちに取り囲まれているリ

ヤナとフェルクの姿が蘇る。枯葉を蹴立ててユテラルドは立ち上がった。
「リヤナ！　フェルク！　どこだ⁉」
繰り返し呼びかけるが、聞こえるものはただ、枯葉が風にこすれるかすかな音だけ。
ぼんやりと右手を見る。リヤナが巻いてくれた革は、しっかりとユテラルドの手を包み込み、クレストを隠している。あの時のように透けて浮かび上がってはいない。
「あ、起きたんだね」
突然、頭上から声をかけられて、ユテラルドは驚いて飛びすさった。見上げると木のこずえに金色の奇妙な物が浮かんでいる。鳥のように羽ばたいているが、羽毛や嘴はなく、金色の水が鳥の形になって浮かんでいるように見える。そいつが喋った。
「こんなところで倒れてるから、てっきり死んでるんだと思ったよ」
「きさま……何なんだ？　鳥……なのか？」ユテラルドはナイフを抜いて身構える。
そいつは顔とおぼしき部分を大きく振ると、ふわりとユテラルドの前まで降りてきた。
「鳥なんかじゃないよ！　ボクは……えっと……何だっけ？　あれ？　あれ？　あれ？」
鳥もどきは首をかしげながら、その場でグルグルと回り始める。ユテラルドはしばらくそいつを観察していたが、少なくとも敵意はなさそうだと判断して背を向けた。
「あ、思い出した！　ボクの名前はフォーリム……って、ねぇねぇ、どこ行くの？」
フォーリムと名乗った鳥もどきは、ユテラルドのそばへ滑空すると、顔の前へ回り込む。
「モレアの村はどこにある？」

「モレア？　なんだか昔に聞いたことがあるような……無いような……」
「知らんのなら、どけ」
顔の前に浮かぶフォーリムを、ユテラルドは乱暴に払いのける。バランスを崩して地面すれすれまで落ちたフォーリムは、勢い良くユテラルドの前へ飛びあがった。
「あぶないじゃないか！　ひどいなぁ、せっかく思い出そうとしてたのにぃ」
「ここはどこだ？」
ユテラルドは、石組みの表面に文字が刻まれているのに気づいて、覆っている枯れたつる草を剝ぎ取った。
文字は百年ほど昔に使われていた古いものだが、ユテラルドはかろうじて読むことができた。
『ナファトⅡ世、凱旋の記念として……』
ナファト王？　それは百数十年前に諸国を統一した国の王の名前だ。その国の名は……、
「ここはね、リューベーンだよ」
リューベーン帝国!?
「いいかげんな事を言うな。リューベーンは百年以上も昔に滅んだ国だぞ」
「そ、そんなこと言われたって、ここはリューベーンなんだから仕方ないよ」
ユテラルドの剣幕におびえたのか、フォーリムは遥か頭上へと舞い上がった。
「そうそう、モレアって《外》の場所だよね？　だったら出られないよ」
「出られない？」

「そう。ここは閉じた世界なんだ。だから、外に出ることはできないんだよ」
「おい、冗談じゃないぞ！　俺は戻らなきゃならないんだ。モレアには仲間が……俺の友人がいるんだ、俺のせいで……、敵の中に残してきた友人が！」
ユテラルドの上で輪を描いていたフォーリムが、動きを止めてユテラルドを見下ろす。
「へぇ、そう……なんだ」
「モレアへ戻る方法はないのか？　どんな方法でもいい！」
「……あるよ。でも、そのためにはバグラゲラの……あっ？」
ふいに、フォーリムは体をこわばらせ、溶けるように消えうせた。
「消えた？　おい、出て来い、どこへ行ったんだ！」
ユテラルドは声をあげ、緑がかった空を探しまわったが、フォーリムの姿は見つからなかった。
「緑の空だと？　一体どうなってるんだ、誰かいないのか？」
ユテラルドは石組みの上へのぼって周囲をみまわした。黄金色の草むらの向こうに小さな丘があり、細い踏みわけ道が続いている。道があるなら誰か人がいるはずだ。
丘を登ると眼下に海が広がった。道は海を見下ろす切り立った崖にそって続き、やがて中央に噴水がある広場に出た。噴水は勢いよく透き通った水をふきあげ、なみなみと水をたたえた水盤には小さな魚や水草がゆらいでいる。ユテラルドは喉を潤すと噴水にもたれて座りこんだ。
ここはどこなんだ？　ユテラルドはリューベーン帝国について、知っていることを思い出そ

うとした。

リューベーン帝国は三代続いたナファト王の統治の下、エディンベリー大陸のほとんどを配下に納めた大帝国だ。リューベーンが諸国を統一した切り札はパルミラと呼ばれる魔法が込められた特別な武器で、それを身につけたリューベーンの兵は無敵と言われた。

しかし、そんな繁栄の中、突如、リューベーンの首都は消滅し、その跡地は荒れ果てた不毛の大地となっている。

そのリューベーンだと言うのか、ここが？

「バカバカしい。俺は……」

まさか、俺は……死んだのか？

ユテラルドは立ち上がると、水の中に顔を突っ込んで乱暴にこすった。痛さに肌がひりつき、夢なら覚めるぐらい乱暴に。

だが、顔を上げても風景は変わっていない。水面を見下ろすと、ぽたぽたと落ちるしずくと波紋のむこうから、不安そうな自分の顔が見返している。

夢じゃない。これもクレストが引き起こしたことなのか？

呆然としていたユテラルドの耳に、狼狽した男の悲鳴と、金属が打ち鳴らされる音、そして人とも獣ともつかない吠え声が響いてくる。

「人がいるのか？」

ユテラルドは音のする方へむかって走り出した。石造りの背の高い門をくぐり、岩山に挟ま

れた細い道をぬける。道はそのさきで小さな広場へ通じていた。
広場には朽ちた石畳と石像があり、うつろに宙をみつめている巨大な石像の頭のむこうで、人の形をした、しかし人とは思えない巨大な影が動いていた。
「ウウゥ……、ニンゲン……コロス」
紫色の肌と、同じ色の鎧を身につけた巨人は、手にした巨大な棒をふりまわし、石像の破片や土ぼこりをまきあげている。
「コ……コロス、オマエ……コロス！」
「ひぃぃ、だれか、おらぬのか!? わしを……わしを助けよ!!」
巨人の足元から、痩せこけた老人が髪を振り乱しながら転げ出る。巨人を振り返って手にした剣を突きつけるが、腕のふるえのせいで刃先は酔ったようにフラフラと踊っている。ユテラルドは飛び出した。
「じいさん、借りるぞ」
老人の剣をとりあげて背後にかばう。巨人に正面から向き合って、その姿をまじまじと見たユテラルドは、得体の知れない恐怖に低い呻きをかみ殺した。
身の丈がユテラルドの倍はある巨人には頭が無かった。頭も首もなく、ただ、やたらと発達した胸の筋肉の中に顔があって、血走った目がギロリとユテラルドをねめつける。鼻は切り落とされたみたいに二つの穴だけが開いており、その下にぽってりと分厚い唇が突き出ていて、端からは唾液がポタポタと滴っている。

「ニンゲン……ノコラズ……コロス」
筋肉が不気味にふくれあがった腕を振り上げた巨人は、丸太棒のような金属の筒を振りかぶる。筒の動きをにらんでいたユテラルドは、ほんの半歩だけ体をずらした。
重い塊が唸りをあげて、ユテラルドの肩のすぐそばを通り過ぎると、腹の底に響くような音と振動、そして土ぼこりをあげて地面に食い込む。それとほぼ同時に、ユテラルドは大きく振りかぶっていた剣を、巨人の顔に叩きつけた。
岩を殴ったような衝撃に剣が弾かれる。ユテラルドは飛び退って間合いをとった。
巨人の顔に、ユテラルドがつけた一筋の傷が走っている。巨人は断末魔の悲鳴のような絶叫をあげて、顔を覆ってもがくと、怒りの唸りをあげて棍棒を振りかぶった。
大地に立つものをなぎ払うように棍棒は左右に大きく振りぬける。飛び出そうとしたユテラルドを老人の声が止めた。
「いかん、まだ来るぞ！」
足を止めたユテラルドを、先刻とは逆の向きへ振り戻された棍棒が襲う。脇腹に激しい衝撃を受けてユテラルドは大きく吹き飛ばされ、乾いた地面へ叩きつけられた。
痛みにもがく。直撃はまぬがれたが、かすめただけなのに鎧はひしゃげてめくれあがっている。地響きをたてて巨人が近づいてくる。ユテラルドは立ちあがった。
巨人はまた棍棒を左右にふりまわす。ユテラルドは相手をじっくりと観察した。巨人は思いきり棍棒を振り回した後で、目でも回しているのか少しよろめく。上半身に比べて貧弱な足腰

に問題があるのかも知れない。ユテラルドはゆっくりと巨人に近づいた。
怒りの声をあげて、巨人は棍棒を振りまわす。ユテラルドは二度、棍棒が目の前を通り過ぎるのを待って、敵の前へ飛び込むと、体をひねって踊るように剣を巨人の腰へ叩きつけた。剣の刃は紫色の肉の奥深くへ食い込み、毒々しい紫の血が噴き出る。叫びをあげてのけぞる巨人のみぞおちへ、ユテラルドはとどめの一撃を突きたてた。
よろめいて崩れ落ちた巨人の体が陽炎のように揺らめくと、小さな光の破片を散らして消えうせる。ユテラルドは驚いてあとずさった。
「消えた？」
巨人が倒れていた場所へ用心深く手をのばすが、そこには何もない。ユテラルドは首を振ると老人の姿を探して向き直った。
老人は広場の片隅にある粗末な墓標の前にひざまずいていた。頭をたれ、背をまるめて墓へむかってつぶやいている。その隣りにも、古ぼけた墓標と盛り土がいくつも並んでいる。
「……また生き延びてしまった……」
「生きたくて助けを呼んだのだろ？」
ユテラルドは振りかえった老人へ剣を差し出したが、老人はそれに気づかないまま、呆けた表情で墓のかたわらに落ちている小さな紅い花を拾い上げた。花は踏まれたのか、平たくつぶれて泥だらけになっている。老人はそれを墓の上に置いた。
「死が恐ろしいだけじゃ。……国のために立つこともできぬ、臆病者にすぎん」

老人は痩せこけた手で、まとっているボロ布をさする。薄汚れた布は、よく見ると布目が整っており、込み入った模様や刺繍の様子からすると、元は高級な物のようだ。
「ここは何という場所だ？」
　ユテラルドの問いかけに、老人はまじまじと彼を見上げた。
「……なんと、またその問いを聞くことになるとはな。では、おまえもあのストルタから来たと言う娘の仲間か？」
「ストルタから来た娘？」
「ちがうのか？　そうだろうな。外からこの国へ入ることなどできん」
「外……？　では、ここがリューベーンだと言うのは本当なのか？」
　リューベーンと聞いたとたん、老人は立ち上がると、背筋を正し威厳すら感じさせる口調で答えた。
「そうだ。ここはリューベーンの王都。そしてわしがナファトⅢ世じゃ」
　ユテラルドは言葉を失ったまま、目の前に立つ、痩せ老いさらばえて浮浪者同然の姿をした男をみつめた。内心の思いが顔に出たのだろう、ナファト王と名乗った老人は目をむいてつめよった。
「信じんのか、この無礼ものが！　わしは帝国の支配者だぞ！」
「従者のいない王か？」
「残った従者は皇子と共に城へ戻った。……他はここにおる。みな、バグラゲラの手下に殺さ

れたんじゃ！」老人は目を伏せて粗末な墓へ手を振る。
「バグラゲラ？」
「そうじゃ。わしがここにおるのも、帝国がこのようになったのも、すべてはバグラゲラのせいじゃ！　わしの友でありながら、あやつは……！」
老人はツバを飛ばしながら天の一角を指差した。ゴツゴツとした岩山の向こうに、緑色の空にかすれるほど高い塔とおぼしきものが建っている。塔は地上から頂上付近まではまっすぐ同じ太さのまま伸びているが、頂上は何年にもわたって切られ続けた木のようにゴツゴツとこぶが不規則にふくれあがり、枝に見える細い突起がいくつも突き出している。空の色と同じように緑色に染まった塔の岩肌を、雲がまとわりつきながら円を描いて流れている。
「……妙な塔だな。人の手でつくったようには見えないが？」
「この国がバグラゲラによって閉ざされた時に、突然現れたものじゃ。どうやって造ったなど知らん」
「バグラゲラと言うのは何者なんだ？」
「わしの下で呪術を研究しておった学者だ。異端と言われて研究の場も手段も失っていたあやつを、わしが直々に引き立ててやったと言うのに……！」
「呪術？」
「パルミラじゃ！　あやつはビリヤナからパルミラを取り出し、わが兵を無敵とした。それでよかったのだ。しかし、あやつはわしにそむいて、あやしげな研究を続けたために、この国は

閉ざされてしもうた。異形の化け物どもが現れ、民はみな殺された。わしの目の前でな……」
「出る方法はないのか？　俺はモレアへ戻りたいんだ」
「知らぬ。ただ、バグラゲラならば知っておるだろう。あやつが仕出かしたことなのだからな」
「……あの塔へはどうやって行けばいい？」
老人はじっとユテラルドの目をみつめる。
「わしには判らぬ。しかしオブリッドならば知っておるやもしれぬ」
「オブリッド？」
「わが甥の一人じゃ。わしと共に生き延びることができた数少ない一人……おまえ、何も知らんのか？　本当に《外》から来たようじゃな」
老人はしょぼしょぼと目をしばたたかせる。
「あやつはバグラゲラの居場所への道を探すため、残った兵を率いて城へ戻った。だが、バグラゲラめは怪しげな化け物どもを操る。死にに行くようなものじゃぞ」
「ここから出られないのなら、死んだもおなじだ」
「ほぅほぅほぅ！」老人は目を細めて体をゆする。「オブリッドと同じことを言うか？　ではあやつに会ってみればよかろう。オブリッドもバグラゲラを探しておる。ついてこい。道を教えよう」
そう言うと老人は、とぼとぼと岩山へ向かって歩き出す。ユテラルドはもう一度墓にそなえ

られた紅い花へ目をやった。
「ストルタから来た娘はどこへ行った？」
老人は振りかえると首をふった。
「知らぬな。ただ、バグラゲラに囚われた恩人を探すと言っておった」
「娘の名前は？」
「聞いてはおらぬ。わしが知ったところで意味はない。……そういえば、探している相手の名は《シエナ》じゃと言っておったか」
「シエナ……」
「どうする、来るのか？　来んのか？」
老人は眉をひそめ、いらだたしげに体をゆする。ユテラルドは丸く迫り出した老人の背を追って、狭い谷へ入っていった。
谷の道はやがて山肌に埋め込まれた大きな門へと行きつく。美しい彫刻に彩られた門の中央には、羽ばたく鳥の姿をかたどった一つの紋章が刻み込まれている。老人は感慨深げにその紋章に触れていたが、懐から大きな指輪を取り出すと、紋章の中心にあるくぼみへ押し当てた。
金属がこすれあうかすかな軋みを響かせて、門はゆっくりと開く。老人は門の奥の暗がりを指ししめした。
「この先の洞窟を抜ければ城へたどりつく。死んでおらねばオブリッドに会えるじゃろう」
「そうか」

ユテラルドは門をくぐり、洞窟の奥へ目をこらした。細い通路の先から、ほのかな明かりがさしている。

「城にはバグラゲラが差し向けた怪物がおる。わしの妻も娘も殺された……。オブリッドは皇女は生きていると言い張っておったが、そんなわけが……、なにっ!?」

ぼそぼそとつぶやいていた老人の言葉が突然途切れる。何事かと振りかえったユテラルドの前で、門が激しい音をたてて閉ざされた。門の向こうに残った老人は、あわてふためいて離れると、ユテラルドの手を指さした。

「《クレスト》！　おまえもバグラゲラの手下だったか！」

驚くユテラルドを睨みつけて、老人はじりじりと後ずさる。

「おのれ、わしを殺しに来たのか？　そうはいかんぞ。わしは死なぬ、死にはせんぞ！　わしを騙そうとしとるのは判っておる！　おまえのようなバグラゲラの操り人形は、とっとと研究所へ戻れ！　災いの運び手め！」

「操り人形？　どういう意味だ？」

「ええい、寄るな！　クレストなどバグラゲラと共に滅びてしまうがよい！」

老人はまくしたてながらツバを吐きかけ、それでもあき足らずに土や石を投げつけると、一目散に走り去った。両手で力いっぱい門を押してみたが、かすかに揺れるだけで開く様子はない。見下ろすと、ユテラルドの右手を覆っている革ベルトがずれてクレストが覗いている。

「災いか……、どこでも同じだな」

唇の端をゆがませてベルトを元通りに直したユテラルドは、きびすを返して洞窟の奥へと歩き出した。

薄暗く狭い通路を抜けると青白い光に包まれた、巨大な地底湖が眼前に広がった。光は湖から放たれており、白い光に満たされた水の中を、ゆらゆらと巨大な魚影が通りすぎる。道は壁に沿ってゆるやかな登り坂になると、湖を取り巻いて対岸へと続いている。その坂道の途中に、奇妙な生き物がうろついていた。

鳥のように見えるが、翼はとても小さく片方しかない。ずんぐりとした体ははでな模様におおわれ、翼の代わりに発達した二本の足でひょこひょこと歩きまわっている。近づいたユテラルドは、そいつが金属でできていることに気づいた。と、そいつは軋むような奇妙な音をたてながら、ゆっくりとユテラルドへ向き直る。嘴の先が紫色の光に包まれたのを見て、ユテラルドはとっさに横へ飛びのいた。

そいつが頭を振ると、紫色の光の塊が矢のように飛び出して、ユテラルドがいた場所で弾けとぶ。金属の鳥は、ギリギリと音を立ててユテラルドの方へ向き直ろうとする。

道幅は狭く、よけるにも限界がある。ユテラルドはそいつが狙いを定めるよりも早く、脇を駆けぬけた。

坂の上から見下ろすと、鳥はユテラルドを追ってふりかえろうとしている。ユテラルドはさっさと坂を登りきり、木製の立派な造りのかけ橋を渡って、切り出した石のブロックが整然と組み上げられた通路へ入っていった。

地底の滝から伝わる重い水音が、石組みの壁で幾重にも重なって響き渡る。その通路の片隅に、折れた槍の柄が転がっている。折れ口をみるとさほど古くはない。通路の先は部屋になっているようで、地底湖の青白い光とはちがって温かみのある光で照らされているが、なぜか床は不規則な凹凸で埋め尽くされ、折れた槍の穂先や剣の破片が転がっていた。

危険の印だ。だが地底湖へ戻っても他に道はない。

ユテラルドはゆっくりと部屋へ近づき、そっと中をうかがった。

部屋は円筒形になっており、天井からは空が見えている。だが吹き抜けになっているわけではなく、透明のなにかがはめ込んであるらしく、枯れ葉や枝、土や雑草が積もっている。部屋にはユテラルドがいる通路のほかに、おなじような通路への入り口が一つと、閉ざされた扉が一枚ある。だが、その扉の前には額に紅い石がはめ込まれた石像が立ちはだかっていた。ユテラルドは部屋の中へ折れた槍の柄を投げ込んだ。……だが、何も異変は起こらない。耳をすましても、聞こえるのは遠くの滝の水音だけだ。

意を決してゆっくりと部屋へ踏み込む。何も起こらない。そのまま、もう一つの通路へ近づく。

突然、堅い物がぶつかり合う鈍い音をたてながら、石像が動き始める。ユテラルドの身の丈よりもはるかに背が高く、胴回りは子牛を横にしたほどあって、腕は大樽のようだ。そいつが地響きをたてながら、ユテラルドへ向かって襲いかかってくる。

ユテラルドは床から伝わる重い振動に追われるようにして、通路へ飛び込んだ。そのとたん、

ぴたりと音が止んだ。用心深く部屋をうかがうと、石像は何事もなかったかのように、もとの場所に立っている。
冷や汗をぬぐいつつ、ユテラルドはひとりごちた。
「……まるっきり、おとぎ話だな」
「おとぎ話って？」
驚いてふりかえったユテラルドの前で、金色の鳥もどき……フォーリムが大きくはばたいた。
「えへへ、探したよ。でも、こんなところにいるなんて、どうしたの？」
「それはこっちの台詞だ。おまえこそ、どうしてここにいる？」
「探してたって言ったじゃないか。ここってお城の地下だけど、お城に用があるの？」
「城……。あの爺さんの言ってたことは本当だったのか」
「ねぇねぇ、おとぎ話って何？」
「おまえみたいな奇妙なヤツがいて、石の像が動き出すような、ありえないことが起こったんで、呆れただけだ」
「そうか……《外》じゃ、そんなにパルミラは活性してないもんね」
「パルミラ？」
「知らないの？　ビリヤナの木や実から取ることができる、呪術の力の源になるものだよ」
「呪術？　では、リューベーンの武器に込められたって言うパルミラか？」
「うん、『主に武器に使われた』んだけど、ほかにもいろいろ使い道があるみたい」

「あの石像もそうなのか？」
「よくわかんないけど、そうじゃないかな？」
　ユテラルドは肩をすくめた。「やりきれないな。さっさと城へ辿りつきたいもんだ」
「だったら、この道じゃダメだよ。行き止まりだから」
　無視して通路の奥へ向かうユテラルドの頭上で、フォーリムはバタバタと暴れる。
「信じてないの？　ひどいよ、本当だってば！　うそなんかじゃないって」
「俺は自分の目で見るまで、信用しないことにしている」
「本当だってばぁー！」
　フォーリムの声を無視して、ユテラルドは暗い通路を進んで行く。通路の先に光が見え、ほどなく明るい部屋にたどりつく……が、
「ほらぁ、言ったとおりでしょ？」
　道は小さな部屋で袋小路になっており、きっちりと積み上げられた石組みの壁には、抜け出せそうな場所は見当たらない。部屋の奥まった壁の前には、兵士らしい干からびた死体が横たわっている。死体の片足は無残に押しつぶされていた。
「ねぇ、せっかく来たんだから、この武器、持っていった方がいいよ」
　死体の上へ滑空したフォーリムは、干物になった手が握り締めている戦鎚の上で輪を描く。
「武器なら、この剣で十分だ」
「そんなことないって。パルミラの武器は、それぞれ使える技がちがうんだから」

「その戦鎚がパルミラ武器だって言うのか?」
「そうだよ。たぶん、ユテラルドが持ってる剣も、そうだと思うけど」
ユテラルドは驚いて、老人から借りうけたままになってしまった、古ぼけて刃こぼれしている剣を見つめた。
「使ってみたら?」
「どう……すればいいんだ?」
「剣の中に封じられているパルミラを《感じる》んだ」
「感じる?」
「やってみてよ。できるはずだから!」
ユテラルドは納得できないまま、剣を顔の前にかかげて目を閉じた。剣に意識を集中してみる。閉じたまぶたの向こうに、うすぼんやりと剣の形をした光が浮き上がる。
「うわっ!」叫び声をあげて、ユテラルドは目を開いた。
「わかった?」
楽しそうなフォーリムの声に、ユテラルドは呆然とうなずく。
「剣の中に、熱い芯のようなものがある。それが……手と一体になってる感じだ」
「使える?」
ユテラルドは剣の力を探った。自然と体が動く。左手をかかげて何もない空間へ力を放つ。
赤い炎のかたまりが、ユテラルドの左手の前から飛び出し、壁にぶつかって火の粉をちらした。

「やったぁ！」歓声をあげて宙返りしたフォーリムが、戦鎚の上へ飛んで行く。
「じゃあ、こっちの武器の力もわかるはずだよ。ほら、取ってごらんよ」
どこか呆然としたまま、ユテラルドは死者の手から戦鎚を拾い上げた。目を閉じて集中するまでもなく、固い金属の塊、大岩をも打ち砕く強い力が伝わってきた。
「これは《砕く》力だ」
そう告げたユテラルドは、足早に通路をもどる。フォーリムが慌てて追いかける。
「ちょっと、急にどうしたの？」
「こいつを試してみたい」
円筒形の部屋へ踏み込んだユテラルドは、石像へと近づいて行く。部屋の中ほどまで進んだ時、ゴリゴリと重い音を響かせて石像が動き出した。
『王の許しなき者は立ち去れ』
石像から重々しい声が響く。ユテラルドは戦鎚を握りなおすと、気合と共に打ちかかった。岩というよりも、金属を殴ったような、堅く甲高い音をひびかせて戦鎚が弾かれ、石像の巨大な拳が左右から迫る。ユテラルドは床の上を転がって逃れると、笑みを浮かべて立ちあがった。
「なるほど。並の武器じゃ通用しないってわけか」
石像は、ユテラルドへ向き直り、開いた手で上から押さえ込もうとする。ユテラルドの手の中で戦鎚がほのかに光を放つ。

「砕け散れぇっ!!」
叫びとともに振り上げられた戦鎚が石像の掌を打つ。石像の腕にいくつもの光の筋が走ると、次の瞬間、黒々としたひび割れが口を開き、腕は無数の岩の破片になって床へなだれ落ちた。
腕を失った石像が後ずさる。ユテラルドは石像へ駆けより、容赦なく岩の体に戦鎚を打ち込む。そのたびに、光の筋と黒いひび割れが石像の体を走り、噛み砕く。
ユテラルドが戦鎚をおろした時には、床には砕け散った岩の山があるだけだった。
「やった！　ユテラルドってば、すごいよ！」
勢いよく飛んできたフォーリムが、ユテラルドの頭上ではしゃぐ。
「これで城へ行けるよ！　……でも、城は変な化け物がいるおっかない場所だよ」
「……おまえ、どうして俺の名前を知っている？」
「えっ？　や、やだなぁ。最初に会った時に教えてくれたじゃない」
一瞬、身を引いたフォーリムは、ゆっくりとユテラルドの顔の前へ近づくと、小さく首をうなずかせる。だが、ユテラルドは冷たい表情を崩そうとしない。
「俺は、ここへ来てから誰にも名のったおぼえはない」
「……そんなことないよ。だって、だったらどうしてボクがユテラルドって知ってるの？」
「それを聞いているのは俺だ。おまえはどうして俺の前に現れる？　探していただと？　何故だ？　どうして俺を助けるようなことをする？」
フォーリムの体の色が薄くなる。小さく羽ばたいてユテラルドから離れた。

「……ボクを助けて欲しいからだよ。ボクは……人間だったんだ」
ユテラルドの表情がさらに険しくなる。フォーリムは激しく首を振った。
「本当だよ！　ボクの本当の体は《魔人》に捕まっていて、この姿は仮のものなんだ。だから、あんまり長い間いられないいんだ……。今も……もう……」
そう語るフォーリムの姿が、さらに色あせて行く。
「お……ねがい、……ボクを助けて欲しいんだ。《魔人》を倒せば……ユテラルドも……外へ……戻れ……る」
「《魔人》？　なんだそれは？」
「ユテラルドを……ここに……つ……てきた……、……お……ねがい……」
「おい、待て!!」
「……テ……ラル……ド……」
言葉を搾り出していたフォーリムの姿が、かすかにゆらめいて消える。フォーリムが浮かんでいた空間を手探りするが、何も感じられない。ユテラルドは唇を噛んだ。
「《魔人》？　バグラゲラと言うやつのことなのか？」
フォーリムがいた虚空を見つめていたユテラルドは、大きく首をふると視線を、石像が守っていた扉へ向けた。

第三章　リューベーン城　死と狂気が支配する場所

長い縦穴につけられた、螺旋階段を登りつめたところに、がっしりとした鉄の扉が待ちうけていた。重い一枚扉を押し上げると、螺旋階段の暗がりよりは、まだましな薄明かりと、土の匂いが混じった風が流れ込んでくる。顔を出して周囲をうかがう。

うっそうと生えた、しかしすっかり枯れ果てている雑草のむこうに、石柱と花壇、女性や動物の彫像が見える。周りは背の高い石壁で囲まれており、一ヶ所に大きな両開きの扉があるだけで、他に出入り口らしいものは見当たらない。這い出したユテラルドは気配をうかがったが、どこかで鳥がしわがれた声で鳴いている以外は何も聞き取れない。

老人やフォーリムの言葉が正しければ、ここは城で、おそらくは中庭だろう。

庭を囲んでいる城の壁は高く、ユテラルドが見たどんな城よりも大きく感じられた。この規模からすると、ずいぶん多くの人々が暮らしていたように見受けられるが……。

両開きの扉を開いて建物の中へ滑り込む。廊下のようだ。天井は高く、壁や柱、天井の梁は絵と彫刻で美しく飾り立てられている。しかし明かりは天井近くにある小さな窓から指し込む薄明かりだけで、すべてはどんよりと重苦しい闇に浸されている。カビとホコリ、そして得体の知れない生臭さが鼻をつき、ユテラルドは顔をしかめた。

こんな所に人がいるのだろうか？
迷っていても仕方がない。ユテラルドは足のむくまま歩き出した。目標になる場所も物もない状態では、自分のカンに従うしかない。歩くうちに、この建物の造りものみこめるだろうし、何か手がかりになりそうな物も見つかるだろう。

暗い廊下を進むとほどなく、がっしりとした柱が立ち並ぶ広間へ出た。闇を透かして見ると、上へむかう幅広の階段があり、上り口には警護するように槍をたずさえた鎧が立っている。ユテラルドは戦鎚を握り締め、そっと鎧へと近づくと拳でごく軽く鎧を叩く。動き出すわけでもなく、ごく当たり前のがらんどうの音がして、ユテラルドはほっと息をついた。

階段の反対側には大きな扉。両脇の壁には長いタペストリーが掲げられている。タペストリーには、王の偉業が絵物語の形で織りこまれていて、絵のあちらこちらに老人に閉じ込められた門に刻まれていた羽ばたく鳥の紋章が登場し、王とおぼしき人物の頭上には《ナファト帝王》と書かれている。まちがいなく、ここはリューベーンの城だ。

ユテラルドにとって、リューベーンは昔語りの中の伝説の王国だった。覇王とたたえられるナファト王は、魔法を操る無敵の騎士をしたがえ、列強の国々を苦もなく打ち破る英雄であり、その城は王と呼ばれるもの全ての羨望の地だったはずだ。

しかし、目の前にあるのは、うちひしがれ、朽ち果てるのを待つだけの抜け殻のような場所だ。

物思いにふけっていたユテラルドは、かすかな物音に身を固くした。

　階段の奥に見える細い通路で何かの影（かげ）が動く。ユテラルドは足音をしのばせて、すばやく通路の脇（わき）へと走りよると、息を殺して気配をうかがう。通路の奥、さほど離（はな）れていない場所から足音が聞こえてくる。それが近づくにつれて、金属がこすれる音も混じる。ユテラルドは通路から少しさがって、出てくる者を待ち構えた。

　現れたのはプレートアーマーを身につけた男だった。男は足を止めて、薄暗（うすぐら）い広間をみまわす。ユテラルドに気がつくと、ぎょっと目を見開き、剣（けん）を抜き放った。

「待ってくれ。争う気はない」ユテラルドは武器を納めると、空になった両手を男に見せた。男の鎧は、地下で見た死体が身につけていたものと同じだ。「リューベーン城の兵と見うけるが？」

　男の表情が少しゆるむが、油断なく剣を突（つ）き出したままユテラルドの様子をうかがっている。ややあって、男が口を開いた。

「そうだ。我（わ）が王の城で何をしている？　おまえは何者だ！」

　ユテラルドは、老人が話していた言葉を思い返しながら、ゆっくりと答えた。

「俺はユテラルド。ナファト王と名のる老人に教えられ、ここまでやってきた」

「ナファト王？　王はご無事か？」

「供の者をうしない、気落ちされているが無事だ。彼からオブリッドの手助けをしろと命じられたのだ」

「どうやってここへ来た？」

「地下を通って庭に出た。石像の門番には肝を冷やしたよ」
兵士はうなずいて剣を降ろした。
「あの道を無事に通れるのは、王家の者の許しを得たものだけだ。よく来てくれた。今は一人でも多くの手助けが必要なのだ」
「名を教えてくれないか?」
「これはすまない。私はフェイング。オブリッド皇子の護衛の者だ」
兵士はついてくるよう合図すると、先に立って歩き始めた。広場にある幅広の階段をあがると、正面にある広い廊下ではなく、脇にある細い廊下へ入って行く。上の階も暗闇と異様な臭気に占領されており人の気配はない。
「ここは……ずいぶんとひどいありさまだな」
ユテラルドの問いかけに、兵士は重苦しい声で答えた。
「バグラゲラが化け物を送り込んで以来、城はこのようになってしまった。大勢いた兵士や従者も、ほとんどが殺され、わずかに逃げ延びた者たちの行方もわからない。オブリッド皇子は、姫君は人質として生き残っているとおっしゃるが……」
「姫君?」
「皇女リスムル様だ。……知らんのか?」
歩みをゆるめた兵士が不審そうにふりかえる。ユテラルドは正直に答えた。
「この国に来て間がないうちに巻き込まれた。残念だが、あまり詳しいことは知らない。ここ

にいるのも、ナファト王を助けた縁でしかない」
「そうだったのか、災難だったな」
兵士は、神妙な顔でうなずくと再び歩き出した。
どこからか、風の唸りのような、もしくは女性のすすり泣きのような音が聞こえてくる。フェイングは一つの扉の前で立ち止まると、中へ呼びかけた。
「フェイングです。今戻りました」
重いものが動く音と、かんぬきが外れる軽い音につづいて、扉が細く開くと、その向こうに誰かの目が現れた。
「後ろは誰だ？」
「ナファト王からの使いだ。地下通路を通ってきた」
フェイングは、中の人間がユテラルドを見ることができるように脇へずれる。ユテラルドは敵意が無いことを示すために両手を開いて見せた。扉は一度閉ざされたが、すぐに大きく開かれた。
「早く入れ」
戸口で質問してきたのと同じ声が急かす。ユテラルドは部屋の中へ滑り込んだ。
客間らしく、四方の壁は落ちついた緑に塗られ、金で細密な模様が散りばめられている。そして奥には天蓋つきのベッドと、テーブルとイス、いくつかの豪華な家具が並んでいる。テーブルには金で縁どられている青みを帯びた銀の鎧をまとい、腰に長剣をさげた金髪の若い男が

座っており、その前後にはフェイングと同じ鎧を身につけた男が二人、きびしい表情でユテラルドを見つめている。
ユテラルドと同じぐらいの歳（とし）に見える金髪の男は、テーブルに肘（ひじ）をついたまま、けだるそうに口を開いた。
「王の使いだと？」
兵士たちの無言の圧力を感じながら、ユテラルドは王と名のる老人に会い洞窟（どうくつ）まで案内された顛末（てんまつ）を語ったが、クレストの一件については口をつぐんだ。金髪の男はじっとユテラルドの話をきいていたが、「そうか……」とつぶやいて目を伏（ふ）せた。
テーブルの上に置かれたろうそくの明かりに照らされた顔は、青ざめ、やつれている。兵士たちの表情も暗く、隠（かく）しきれない疲（つか）れがにじみ出ている。
「外の兵は残っておらんわけか？　では、栄光のリューベーン近衛兵（このえへい）も、わずか三人になったと言うわけだな」
唇（くちびる）の端（はし）をゆがめて、若者は疲れた笑いを浮（う）かべる。
「いや、ユテラルドと言ったか？　おまえが加われば四人か」
「リューベーンの者は、問われねば名のらないのが流儀（りゅうぎ）か？」
金髪の若者は鋭（するど）い目でユテラルドを見る。張りつめた空気に兵士が一歩踏（ふ）み出すが、すぐに若者はくつろいで手を振（ふ）った。
「ははは！　礼を失したな。俺（おれ）はオブリッド。皇子は皇子だが、継承権（けいしょうけん）は五位でしかない。

もっとも、今は二位までのし上がっているはずだ」
「バグラゲラを探していると聞いたが？　やつは何者だ？」
「知らずにここへ来たのか？」
「異変を起こした人物だと教わった」
「そうだ。やつは俺が生まれる以前からパルミラを研究し、パルミラ武具を創り出した学者だった。だが、その結果、手に入れた力を悪用し、大災害を起こしたばかりか、止めようとした者へは奇怪な化け物を差し向け、つぎつぎと抹殺して行った。この城も、俺やナファト王がやつの研究所へ進軍している隙に、こんなありさまになったのだ」
オブリッドはため息をつき、片手で顔をぬぐった。
「やつは我々が来るのをみはからって研究所を水没させた。……兵の大多数は海に呑まれ、かろうじて、王と俺は一握りの兵と共に逃れたものの、その惨状と城のありさまを見た王は……すべてを捨ててしまった」
「俺は城を奪回しようと兵を伴って探索を繰りかえした。かなりの化け物を退治したはずだが……。結果は今の状態だ」
「姫君というのは？」
「ナファト王の娘、リスムルだ。謁見の間の奥に囚われているのを、この目で見た」
「……落ちた城に人質？　なんのためだ？」
オブリッドは口を閉ざすと、暗く沈んだ目でユテラルドを見つめる。

「……俺や王への切り札として生かしているのだろう」
「おかしな話だ。おまえも納得していないようだが？」
「きさま！　いいかげんにしろ、無礼にもほどがあるぞ！」
オブリッドの前に立っていた兵が、声を荒げてつめよったが、皇子は鋭い声でいさめる。
「かまわん！　確かにその通りだ。今のバグラゲラにとって、脅しのための人質など意味がない。……だが、どんな思惑があろうとも……リスムルが生きているのなら、助けてやりたい」
「では、なぜここでのんびりしている？」
ユテラルドの傍若無人な物言いに兵士たちが殺気立つ。ユテラルドのすぐ脇で身を強ばらせていたフェイングが口を開いた。
「謁見の間へ通じる広間に、蔦のような、得体のしれない化け物がいるのだ。突破しようとしたが、犠牲を増やしただけで戻るしかなかった」
オブリッドは自虐的な笑い声をあげる。「パルミラ武具を扱える者も死んだ。今はいかにして安全にリスムルの居場所へ行くかを考えていたわけだ。フェイング、どうだった？」
「階下にも同じ蔦があり、抜けられそうにはありません」
「バルド？」
「外はいまだに深い霧におおわれたままです。屋上には氷の息を吐く虫がうろついており、今の装備と人数では無理かと……」
オブリッドの後ろに控えていた兵士がうつむき加減で答える。オブリッドは目を閉じた。

「パルミラ兵が一隊いれば、なにも問題はなかっただろうが……」
重苦しい沈黙の中、ユテラルドは迷いつつも口を開いた。
「パルミラ武器なら扱える」
オブリッドと兵士は身じろぎした。疑いの眼差しの中、ユテラルドは剣を手にして、手の上で炎の塊を踊らせた。
「きさま、まさかバグラゲラの！」
三人の兵士が武器を抜き放つ。オブリッドが立ちあがった。
「待て！　早まるな！　バグラゲラの手の者が、こんな形で我々の前に来ると思うのか？
……そうだとしても、招き入れねばならないのが現実だ」
オブリッドはユテラルドの前に立つと、胸をはって正面から目を見る。ユテラルドも臆することなく見返す。皇子はかすかに微笑んだ。
「誇りをもった戦士の目だな。今の俺には地位も金も約束できない。それでも力を貸してくれるか？」
「俺が欲しいのは、バグラゲラの居場所への道だ」
「心当たりがある。皇女を救い出した後で教えよう。一緒に来るがいい」
深くうなずいたオブリッドは兵士たちへ目をやると、先頭に立って部屋を出た。
謁見の間へ通じる広い通路は、地震にみまわれたかの惨状をさらしていた。

職人達が精魂込めて作り上げただろう豪華な柱や彫像は、磨き上げられた床の上で砕け散り、その床も所々に深い亀裂が走っている。オブリッドは、上半身がなくなっている彫像の陰に身をよせると、横倒しになって通路をふさいでいる柱の一群を指差した。

「床の亀裂を見ろ。蔦が這っているだろう?」

確かに、亀裂からは黒い物が枝分かれしながら、瓦礫や壁へ延びている。しかし、蔦と呼ぶにはあまりにも太い。細いところでも子供の手首ぐらいはあり、太いものは大人の胴回りだ。

オブリッドは瓦礫のかけらを拾い上げると、床の上を這っている蔦めがけて放り投げた。

ビクッと蔦がふるえ、のたうちながら床の上を探る。

「のんびりしていると、くびり殺される。しかし突っ切ろうにも柱が邪魔をしている」蔦の動きを見ていたオブリッドが横目でユテラルドを見る。銀髪の戦士は戦鎚を抜いた。

「では、まずは柱を砕こう。ただし、音をたてることになる」

「かまわん。道が開いたなら奥へと走りぬける」

オブリッドは三人の兵士へ目をやる。兵士たちは一様にうなずいた。

「うおおおおおっ!」

光を放つ戦鎚を振りかぶり、ユテラルドは倒れた柱へと駆け寄る。戦鎚の一撃で太い石柱は砕け散ったが、行く手を阻む柱は一本だけではない。次の柱めがけて戦鎚を振り上げるユテラルドの足下で、黒い蔦が鎌首をもたげた。

周囲の蔦がザワザワとうごめき、思いがけない早さでユテラルドへ迫り寄せる。そこへオブ

リッドと兵士たちが飛び込むと、からみつこうとするものを片端から切り払う。二本目の柱を砕いたユテラルドは、折り重なって一塊になっている二本の柱へ狙いをさだめた。

黒い影がユテラルドの頭上からのしかかる。とっさに戦鎚で叩きつけると、ユテラルドと変わらない大きさの蔦が、黒い汁を飛び散らせながら弾けた。せっかくの集中をむだに使わさせられたユテラルドは、荒い息をついて、もう一度パルミラ武器の力を呼び起こした。

「ユテラルド、まだか!?」

背後から焦りを帯びたオブリッドの声と、蔦と格闘する物音が伝わってくる。ユテラルドは戦鎚を柱の塊へと叩きつけて一気に吹き飛ばした。土煙の向こうに、両開きの大扉が見える。

「開いたぞ！」

ユテラルドの合図に、オブリッドたちは一斉に通路の奥、両開きの扉へ向かって走り出す。戦鎚を剣へ持ちかえたユテラルドは、追いすがる蔦を切り払いつつ、押し開かれた扉の向こうへ駆け込んだ。

「この奥だ」

息を整える間もなく、オブリッドは玉座の奥に見える扉へと走りよる。

扉を開けると、甘い香りが鼻をついた。

広い部屋にはつややかな葉を生い茂らせた植物がしげり、赤や黄色の花が咲き乱れていた。大理石の床や彫像が立っている柱、金で彩られた家具などは、旺盛な緑の中にうずもれている。そんな部屋の中ほどには、美しい庭園を描いた大きなついたてが置かれていたが、その向こう

側から小鳥を思い起こさせる、女性の明るい声が聞こえた。
「うふふっ、きれいね。もっとないのかしら？　たくさん遊びたいもの」
「リスムル！」
　オブリッドが駆け寄る。追いかけたユテラルドは、ついたての向こうに置かれていた天蓋つきのベッドの上に、薄紅色のドレスをまとったうら若い女性と、地味で質素な服の幼い少年が腰掛けているのを見つけた。
　女性の年齢はオブリッドと同じぐらいだろうか。長い金色の髪が細い両肩を輝く滝になって流れ落ちて、真紅のビロードのクッションの上で散っている。こぢんまりとした顔立ちの中で、青い瞳がぼんやりと並んで座る少年を見つめている。
　少年は、ほんの五歳ぐらいで、隣にいるドレス姿の女性や豪華な部屋には不釣合いな、藍色をした素朴でずいぶん着古した服をまとっている。耳の上の長さに切りそろえられた淡い亜麻色の髪は、手入れしていないのかところどころ跳ねていて、飾りらしいものは胸の前に下げた、褐色の鳥の羽根だけだ。少年は何一つ表情が読み取れない、人形のように強ばった顔を女性へ向けている。
「う……うわあっ!?」二人を見たフェイングが、恐怖の呻きをあげて後ずさる。
「リスムル？」
　オブリッドが呼びかけるが、女性はぼんやりと虚空をみつめたままなにも答えない。隣にいる子供も、感情のない仮面のような顔で侵入者をふりかえる。ユテラルドは得体の知れない不

安にうなじの毛が逆立つのを感じた。
「あ、あ、あ……、《トレド》の……子供!?」
「どうした、フェイング?」
フェイングは見開いた目を少年に据(す)えたまま、心配する仲間の手を振り払って、あわてふためいて逃げようとする。それを見ていた少年の体が、ふわりと宙に浮かび上がった。
身構えたユテラルドの右手の甲(こう)がチリチリと痛む。
「こいつも化け物か!?　リスムル、そいつから離れろ!」
剣を手に、少年をにらみつけたオブリッドは、空いている手を女へ差し出す。しかし女は白いものを手の中でもてあそびながら、空(うつ)ろな笑いを浮かべるだけで動こうとはしない。
「リスムル、どうしたんだ?　俺がわからないのか?　俺だ、オブリッドだ!」
「オブ……リッ……ド?」
「そうだ、迎(むか)えにきたぞ!」
夢見るようだった女の顔が不審にゆがむ。
「うそ。オブリッドもお父様(とうさま)も、私を置き去りにしたのよ」
「リスムル?」
「怖(こわ)かったのに……お父様もオブリッドも逃げてしまったから、お母様(かあさま)も、侍女(じじょ)も、みんな殺されたわ」
「ちがう!　王も俺もバグラゲラを倒すため……」

「逃げたのよ！　化け物がたくさんやってきたのに、自分たちだけ逃げたのよ！　城のみんなを、私を捨てて逃げたのよ！　裏切り者！」

髪を振り乱して絶叫した彼女の体が、真紅のクッションごと跳ねあがる。オブリッド、ユテラルド、そして三人の兵士はそろって後ずさった。

皇女リスムルの体の下には、黒い根がからみあいながら延びており、大蛇のようにうねっている。真紅のクッションだと思っていたものが大きく広がって花びらに変った。血の色をした花びらの中央で、皇女は身をよじって泣き叫んだ。

「ひどい！　ひどいわ！　どうして私を見捨てたの？　どうして？　どうして！」

衣ずれの音をひびかせて、巨大な花がにじりよる。

「リ……、リスムル、おまえ……バグラゲラに……？」

浮き足立った兵士は恐怖の叫びをあげて皇女から遠ざかったが、オブリッドは呆然とその場へ立ちつくしている。ユテラルドはオブリッドの肩をつかんで乱暴に引き離した。

「逃げるの？　オブリッド、また私を見捨てるの？　ねぇ？　ねぇ？　ねぇ？」

狂気の笑みを顔にはりつかせて、皇女だったものがズルズルと這いよる。その上を少年が空ろな顔で漂っていたが、ゆっくりと右手をユテラルドたちへ差し出した。小さな手の先に、まばゆい光が現れてぱちぱちと弾ける。その手の甲に、目に似たアザをみつけて、ユテラルドは息をのんだ。

「クレスト？」

ユテラルドのクレストとは少し形が違うが、まちがいない《呪われし者の印》が、少年の小さな手の甲にくっきりと浮かび上がっていた。

光の塊がユテラルドへ襲いかかる。とっさに剣で受け止めたが、剣の脇をすり抜けた光が両肩を打ちつけ、ユテラルドは衝撃で大きく後ろへはね飛ばされて、植物のしげみへ投げ出される。苦痛にうめく彼を包みこんだ葉が生き物のように波打ち、葉の間から這い出してきた黒い蔓が体をからめとろうとする。かけつけた兵士の一人が蔦を踏みにじり、ユテラルドを助け起こした。

見ると部屋中の植物がざわめき、黒い蔦を伸ばしている。ユテラルドは剣の炎を呼び起こした。

「花の化け物は俺がやる！　あの子供をひきつけてくれ！」

オブリッドと兵士へ呼びかける。しかし兵士の一人フェイングは、頭を抱えてわけのわからない言葉をくりかえすばかりで役に立ちそうにない。そしてオブリッドはユテラルドを見ると叫び声をあげて立ちふさがった。

「やめろ！　リスムルを傷つけるな！」

「死にたいのか!?」

オブリッドに邪魔されて攻撃できないユテラルドへ、蔦と光の球が襲いかかる。どうにかかわしながら、後ずさっていくユテラルドたちを、無表情な少年と、打ちひしがれた声で問いつづける皇女が追い詰める。

「オブリッド、ここは寒いのよ、置いて行かないで、私とても寂しいの……」
「オブリッド、どけ！」
「だめだ！　リスムルはバグラゲラの呪いであんな姿にされたんだ。俺は……リスムルを助けたい！　ここは一度退いてくれ！　退けっ！」
言い争ううちにも、花の化け物は太い根を引きずりながらにじりより、少年の魔法と黒い蔦がしつこくつけねらう。
「ゆるしてくれ……、ゆるしてくれ！　たのむ、助けてくれっ！」
頭を抱えて逃げ回っていたフェイングが、耐えきれなくなって部屋を飛び出す。残った二人の兵士も浮き足立ち、狼狽するのが見て取れた。これでは勝機はない。ユテラルドは身をひるがえすと、謁見の間へ飛び出した。
「置いて行かないで……、私を見捨てないで……」
か細い声と根が床を這う重い音が、背後から追いかけてくる。先を走るフェイングを追うようにユテラルドとオブリッド、兵士二人は謁見の間を駆けぬけ、蔦が待ちうける通路へ飛び込む。
「フェイング！」
先に踏み込んだ兵士は、蔦に足をとられ、身動きできないまま闇雲に剣をふるっている。ユテラルドは剣の炎を蔦の海へ叩き込み、兵士の周囲を切り払った。オブリッドと残りの兵士も加わり、取りつかれたように、湧き出してくる蔦を引きちぎる。気配に顔を上げると、天井近

くに少年が浮かび、大きな光をかかげていた。
「走れ！　走りぬけるんだ!!」
ユテラルドの叫びと同時に、少年は光の塊を投げ下ろす。ユテラルドは剣に残っている力の全てを光の塊と少年へ向けて振るった。
炎が渦巻いて光の球を食い止め、少年をひるませる。が、乾いた音をたてて剣の刃に亀裂が走ると、炎の力がかき消えた。ユテラルドは脱兎のごとく通路を駆けぬけ、階下へ降りる階段へ向かった。
階段を下りた先に兵士が待っている。
「こっちだ。皇子が外への扉を開いておられる。いそげ！」
駆け出そうとしたユテラルドたちの目の前を光の球がよぎり、足元ではじけて床を焼く。見上げると、相変わらずの無表情のまま少年が二人を見下ろしていた。さっきの攻撃も、少年にはほとんど傷をおわせられなかったようだ。ユテラルドはもう一つの武器である戦鎚に手をやったが、それに秘められたパルミラの力は、空中には効果がない。
「……パルミラ武器か、飛び道具はないか？」
ユテラルドの問いかけに兵士は首をふったが、すぐにささやきかえした。
「階段脇の甲冑に槍が」
悩む間もなく、少年が手をかざすのを見たユテラルドは甲冑へ駆けより、立てかけられていた長槍をもぎ取った。パルミラの力は感じられなかったが、どちらにしろ、ユテラルドにでき

ることは限られていた。少年をにらみすえ、大きく槍を引いて全身の力で投げつける。
「ひやっ!」
小さな声をあげて少年の姿はかき消え、槍は天井に当たって固い音をたてた後、傾きながら落ちる。
顔をかがやかせ、なにか言いたそうな兵士をうながして、ユテラルドはオブリッドたちがいる城門へ向かって走る。天井の高い通路を、重いものを引きずる湿った音と、皇女のすすり泣きが追いかけてくる。
「戻ってきて……、お願いよ……オブリッド……お願い……」
オブリッドは王家の紋章が刻まれた木と鉄でできている大扉の前で待っていた。ユテラルドたちが追いつくと、扉を押し開く。白い霧がのろのろと流れ込んできた。
「待って……行かないで……一人にしないで……オブリッド……」
オブリッドは悲痛な面持ちで声の方を振りむいたが、歯を食いしばり、扉の外へ踏み出た。全員が外の霧の中に立つと、オブリッドは扉を閉じ、紋章の中心にあるくぼみへ大きな指輪を押し当てた。
「証し持つ者が現れるまで、未来永劫、開くことなかれ」
オブリッドの声とともに、扉の合わせ目が溶けると、きれいに消えうせた。
「オブリッドォ!」
扉の向こうから皇女の悲鳴が聞こえた。

「どうして？　どうしてなの？　置いて行かないで！　迎えに来てくれたのでしょう？　一人にしないで、お願い、オブリッド、オブリッド、オブリッド！　オブリッド！　私を置き去りにしないでっ！」

声は甲高く涙声になると、悲痛にオブリッドの名をくりかえす。

「……リスムル、俺は必ず戻る。だから……待っていてくれ……たのむ」

オブリッドはうなだれ、耳を押さえると足早に城門から離れる。

「オブリッド！　私よ、リスムルよ。どこにいるの？　寂しい……こわい……お願い……助けて……！　私を捨てて行かないで！」

弱々しい泣き声は、いつまでも背後からユテラルドたちを追いかけ、まとわりついた。

あちらこちらが崩れ落ちている山道をおりるにつれて、あたりを覆い隠していた霧が晴れて、整然とならんだ家並みが眼下に広がった。赤や茶色の瓦や木の屋根が平地を埋め、細い煙突が林立しているが、どれ一つとして煙を吐いているものはなく、石畳の街路にも動くものはない。建物の合間に生えている木々は、どれも葉を落として幹だけが寒々とした姿で立っている。

無人の市街に踏み込んだ皇子は、荒れ果てた周囲には目もくれずに通りを抜けると、はずれにぽつんと建っている、他の家々とは違う重厚な面持ちの建物へと足を向けた。

「どこへ行くつもりだ？」

ユテラルドの問いに、オブリッドは行く手を見すえたまま答える。

「神殿だ。神官に会い助言をもらう」
「神だのみか」
「パルミラはビリヤナの樹木から得られた力だ。ビリヤナの《母》に通ずる神官なら、なにかわかるだろう」
「ビリヤナ……。あの呪いというのも、パルミラの力なのか?」
「少年の手に《アルクレスト》があった。おそらくリスムルにも……。アルクレストはパルミラの力をひきだす印。バグラゲラがリスムルをあんな姿に……!」
「《アルクレスト》? 《クレスト》……ではないのか?」
「クレストを模して、バグラゲラが造ったものがアルクレストだ」
オブリッドは暗い顔をユテラルドへ向ける。「おまえも……そうではないのか?」
ユテラルドは言葉が出ず、顔をそむけて近づいてきた荘厳な神殿を見あげる。オブリッドも視線を外した。
「アルクレストを刻むことで、人はパルミラの力を取り込み、人を超えた力を得ることができる。だが、その能力はあまりにも微妙で繊細なため、大多数の者は人外の存在になりはてた。パルミラ兵一人を生み出すために、数多くの兵が消耗されたわけだ」
「……その犠牲の上で、帝国は諸国を圧倒した」
「ああ。世界を統一した我が帝国は国としての頂点へのぼりつめたわけだ。だが、結局はこうなった」立ち止まったオブリッドは、後ろに残してきた無人の市街を振りかえった。「今、こ

の国にどれだけの人間が生き残っているのか……そしていつまで生き延びられるのか、誰にもわからん」口を閉ざしたオブリッドは市街をみつめていたが、ちいさく頭をふって神殿へ歩き出した。

第四章　神殿　万物の母と盲目の女神官

　神殿は遠目で見ていた時に予想していたよりも大きく、ビリヤナとおぼしい樹木をかたどった柱や彫刻でかざられている。しかし、巨大な鎚でなぐられたみたいに天井近くは大きくえぐれ、破片が近くの岩山に散乱している。枝と木の葉が入り組んだ様を意匠した、美しい扉は細く開かれており、ユテラルドたちを招いているようだ。

　オブリッドと兵士たちは警戒することなく戸口をくぐって中へ入る。ユテラルドも続いた。

「皇子、おけがはありませんか？」

　穏やかな声に目をむけると、がらんとした石造りの広間の中央、欠けてなくなった天井と割れたステンドグラスから差し込む光の中に、ほっそりとした黒衣の女性がたたずんでいた。だが、女性の顔の前には黄金の円盤が下がっていて、目鼻だちを覆い隠している。

　オブリッドは足音高く女性の前へ進み出ると、いらだちを隠そうともせず声を荒げた。

「神官メリダ、リスムルがどうなっているのか知っていたな！　なぜ言わん！」

　メリダは黄金色の円盤を皇子へむける。その影に隠れていた目は堅く閉ざされている。

「私はなにも知りません。私はただ、大いなる母の言葉をお伝えするのみ。私には……それ以外の術はないのです」

詫びるように深々と頭をさげる神官に、オブリッドは荒々しく言葉を続けようとしたが、結局なにも言えないまま、いらだたしげに腕をふって顔をそむけた。

皇子の前から身を引いたメリダは、ユテラルドへ向き直るとまっすぐ歩み寄った。その動きは目を閉じているとは思えない自信に満ちた動きだ。ユテラルドの前で立ち止まったメリダは、かるく頭をさげた。

「お待ちしていました」

「……初対面のはずだが」

「そうです」円盤の下からのぞく唇がかすかに微笑む。「お会いするのは初めてですが、あの少女が塔へ向かった時、あなたの来訪がわかりました」

「少女?」

「塔へ向かっただと? まさか一人で行かせたのか!?」

所在なさげに歩き回っていたオブリッドが激しい剣幕で神官につめよった。

「私が戻るまでひきとめておけと言ったはずだ!」

「あの少女にも、一刻も早く助け出したい人がいたのです。皇子とおなじように」

「だからと言って、一人では殺されに行くようなものだ!」

「……それでも、私には止めることができませんでした。皇子、バグラゲラに捕らえられた《シエナ》は、私の知人でもあります。俗世を捨てたとは言え、友を思う心は捨てきれません」

「……しかし!」

「まさか、その娘と言うのはストルタから来た娘か?」
不思議そうにユテラルドへ目をやったオブリッドが口を開く。
「どこから来たのか尋ねなかったが、あの赤い革鎧と白く染められた弓はストルタかも知れん。知人なのか?」
「……わからん。だがストルタは俺の故郷だ。後を追う。道を教えてくれ」
「わかっています。こちらです」
メリダは神殿の奥へと歩き出す。ユテラルドとオブリッドの後を、暗い顔の兵士たちが続く。下へくだる古めかしい階段を降り、三人の女神のレリーフが飾られた、小さな部屋へ招き入れられる。レリーフの前に立ったメリダが小さく息をのんだ。
「そんな……」
「どうしたと言うのだ?」
オブリッドの問いかけには答えないまま、メリダは自分の首から銀色の首飾りを外すと、中央の女神の首にくぐらせた。
かすかに何かが動く音がしたが、それは途切れ途切れになり、何かが割れる音とともに途絶えてしまう。メリダはレリーフへよりかかると顔をふせた。
「……壊されています」
「どういうことだ?」
オブリッドの問いかけにメリダは力なく首をふる。オブリッドはレリーフに手をかけた。

「この向こうに通路があるのか？　ならばどかせば良いだろう。衛兵、手を貸せ！」
「無理です。この仕掛(しか)けは初代王の時代のもの。多少のことでは壊せないことは、皇子もご存知でしょう？」
「パルミラの武器ならある」
ユテラルドは戦鎚(せんつい)を抜(ぬ)き出したが、メリダは顔をふせたまま、
「このレリーフを壊したところで、その先にあるゴンドラが動くとは思えません」
「では追えないではないか！　俺には誰(だれ)一人救えないと言うことか！」
拳(こぶし)を振(ふ)り上げたオブリッドは、レリーフを打ちすえたが、重々しい石の彫刻はびくともしない。
「他(ほか)の道は？」
ユテラルドの問いかけにメリダとオブリッドはそろって首をふる。兵士たちへ目をやるが、やはり戸惑(とまど)った表情で視線をそらす。だが、オブリッドがはっと顔をあげた。
「あるかもしれん。城の城門や壁(かべ)には破られた跡(あと)がないのに、化け物どもが徘徊(はいかい)していた。おそらく、侵入(しんにゅう)した時の通路があるはずだ」
兵士の一人が色めきたった。「では、あの地下からの風は……」
オブリッドは力のこもった目でユテラルドを見た。
「確信はないが、可能性はある。また、あの城へ戻らねばならないが、いいか？」
「俺よりも、おまえは大丈夫(だいじょうぶ)なのか？」

　ユテラルドの指摘にオブリッドは顔をゆがめてメリダへ視線をさまよわせる。
「……メリダ。リスムルを元の姿に戻す方法をしらんか？　バグラゲラめに、アルクレストを刻まれ、異形の姿にされたのだ」
「皇子、アルクレストを刻み、消す術は、バグラゲラしか知り得ないこと。私ではどうすることもできません。お許しを……」
　その答えを予測していたのか、オブリッドは表情を変えることなく、ユテラルドへ向き直った。
「目的は一つになった。では、城へもどろう」
「お待ち下さい。そのようにお疲れになったまま行かせるわけにはまいりません。ひととき、ここでお休みください」
「俺は疲れてはいない」
「皇女への思いが皇子の力となっていることはわかっております。しかし、供の者のこともお気づかいください」
　兵を振りかえったオブリッドは、彼らのやつれた顔と生気を失った眼差しに気づき、しぶしぶうなずいた。
「そうしよう。部屋を借りるぞ」
「では、こちらへ」

ストルタの少女。
天井に染みついた雨漏りの跡をながめながら、ユテラルドは心の中でくりかえした。最後に見たシャルアミの姿……脳裏に焼きついて離れない姿は、自分をやさしく抱きかかえ、モレアの兵からかばってくれていた。あれは……もう十三年も昔の出来事。
シャルアミは村でも指折りの弓の名手で、同じ年頃の男たちにも負けることがなかった。クレストがあるため村人から疎まれていたユテラルドを、彼女だけは弟のように可愛がり、何かと守ってくれた。
守ってくれた……、あの時もそうだった。
モレアの《報復者》が父と母を殺し、血に汚れた斧を手にユテラルドへ向かってきた時。たった一人、彼の前へ飛び出してかばってくれたのがシャルアミだった。
シャルアミはユテラルドへ勇気づけるように微笑みかけ、殺人者の斧の前に自分の身を置いた。ユテラルドは恐怖に泣き叫んだ。シャルアミへ、ユテラルド自身へ振りかぶられた斧の刃を恐れ、苦痛と恐怖を遠ざけたいと願った。
願いに応えるようにクレストが光を放った。
目に突き刺さる白い光は、殺人者だけでなくシャルアミまでも呑み込んだ。
光が消えた後、ユテラルドの前にあったものは、えぐれた地面と、両親の死体だけ。
ユテラルドは守ってくれるものを全て失って、ただ一人とりのこされた。
「……だれだ？」

戸口の向こうに人の気配を感じて、ユテラルドは体を起こす。黒衣の神官が静かに姿を現した。

「ユテラルド……ですね？　皇子よりうかがいました。パルミラを使いこなすことも。武器や防具について、お力添えできると思います」

神官は戸口の外へ手を差し出し、ついてくるよう身振りする。つかみどころのない神官の行動に落ちつかないものを感じながらも、ユテラルドは彼女に従い、神殿の裏へとまわりこんだ。

「あなたにでしたらわかるはずです。あちらに何か見えませんか？」

枯葉が降り積もったバルコニーに出たメリダは、荒れ果てた庭の片隅をしめす。そこには霧の柱のようなものが渦巻いている。見るうちに、それは人の背たけほどもある、水晶の結晶ににた乳白色の石の柱に変った。

「なんだ、あれは？」

「帝国が兵士たちに、武器や鎧、戦いに必要な品々を送り届けるために置いた《界晶柱》です。あれにふれれば、武具を用立ててくれる者のところへ行くことができるそうです」

「あんたは行ったことがあるのか？」

「いえ、私はパルミラを使うことができません。そのため触れることができないのです。かすかに、あの場所になにかがあると感じることはできますが」

「心配することはない。俺の部下も使っていた」

声に振りかえると、目を覚ましたばかりなのか、腫れぼったい目をしたオブリッドが出てく

る。
「行くのならこれをもって行け」オブリッドが革袋を放ってよこした。
「パルミラ片だ。あっちで貨幣の代わりに使える。それで傷薬を手に入れてきてくれ。必要になると思うからな」
革袋の中には、黄色や白の透きとおった小さな石の板が入っている。
「私からも、これを」メリダは鍾乳石のような筍形の石を差し出した。
ユテラルドは石の柱へ近づいてそっと手を近づけた。乳白色の表面が波打ち、触れると薄い布を押しのけるような感触がある。思いきって一歩踏み出したとたん、景色がいきなり変わった。
「オヤ？　まだ、ご利用シテいただけるヒトがいたとは」
そこは武器や防具が山積みにされた、ちいさな部屋だった。
部屋の奥には、さっき触れた柱と同じ乳白色のカウンターがあり、その向こうに奇妙な生き物が鎮座している。人間のように服を着込み、背筋をのばして座っているが、顔はごわごわとした灰色の皮膚に覆われ、脹れ上がった鼻の両脇に、小さな目が黒曜石の輝きを放っている。
そいつは犬のように垂れ下がった耳をふるわせて、愛想よくユテラルドへ話しかけた。
「オオヤ、アナタ、クレストを持ってますネ！　アルクレスト持ちも、めったに訪れなくなったというのに、クレストとは！　ワタシ運がいい。何がホシイですかね？　好きなものをえらんでチョウダイませ」

「傷薬はあるか？」
「生命のエキスね。もちろんョ。他にも解毒、脱痺、解封、破呪の品もある。オヤァ？」
　そいつは小さな目をしばたたかせて身を乗り出した。
「お客サン、いけませんねぇ、その剣、壊れてるじゃないですか。パルミラ力を使い果たす前に、持ち込んでくださらなきゃ」
「治るのか？」
「当然ですとも。ワタシはパルミラ武具を扱うために生まれたんデスからねぇ。修理するのも強化するのも、ホント、お手のもの」
　短い指を握り締め、ぽんと胸を叩いてみせると、ユテラルドから裂けた剣を受け取って、頭上にかかげた。そして片手で懐をさぐると、オレンジ色の石を取り出した。
「母ノ血ぱるみらヨ、火ニ変ジ、鋼ト交ワリ剣トナレ」
　オレンジ色の石が火の柱になって吹きあがる。そいつは炎の柱の中に剣を差し入れた。剣は刃を下にしたまま、そいつの手の上……炎の柱の中に浮かんでいる。徐々に剣の刃が赤く輝きはじめ、大きく開いていた亀裂が消えて行く。パシンと小さな音をたてて、炎の柱が剣の中に吸い込まれた。
「では、パルミラ片、白三枚いただけますかな？」
　鍛冶場から打ちあがったばかりのような光り輝く美しい剣を差し出して、そいつは自慢げに鼻をひくつかせる。代価を払ったユテラルドは、刃こぼれがしてボロボロだったはずの剣を驚

きの目でながめた。
「お客サン、せっかくですから鎧も新調されてはイカガですか？　そんな、力のないタダの鎧なんか、着るだけソンですよ。パルミラ武具は特殊な攻撃ができるだけでなく、身につけている者の力も強くするんです。このログガーブはいかがです？　いやいや、お客サンならガルダンガーダーの方がお似合いですネ。ワタシ、こう見えてもコーディネートにはうるさいんですよ。兵士の中には、強ければいいなんて、鎧も兜もブーツもチグハグの見るに耐えない装備をする輩がおりますケド、そう言うのは美への冒瀆でしかありませンね。中には何を考えたのか、何もなかったからって鍋とかカボチャをかぶってる者もいましたが……まぁ、奇抜なセンスというのも悪くはありませんョ。ゼンエイ的なゲイジュツと申しましょうか。ただし、なによりも着こなしが大事なワケでして。そうそう、装備品なら、こちらにあるアクセサリーも忘れちゃいけませんネ、傷を早く癒やしたり、不運を遠ざけるコトもできる優れもの！　久しぶりのお客サンですから、オマケしますよ、いかがです？」
「そ……そうだな、この石でも買えるのか？」
やや気圧されながら、メリダから渡された筍形の石を差し出すと、店主は大きくうなずいた。
「パルミラ原晶ですな。よし、わかりました。ワタシが一通りみつくろってさしあげまショウ」
「そう……してもらえると助かる。ところで、あんたは何者なんだ？」
「ワタシは界晶界の主でございます。名前？　固有名詞は持っておりませんので、《店主》と

でも呼んでくださいマセ」
そう言って、店主は目を細めた。

ユテラルドの姿が乳白色の光に包まれて消えるのを見送ったオブリッドは、頭を振って眠気を払った。体が疲れて、眠りを求めていることは判っていたが、目を閉じると耳の奥で、自分をなじるリスムルの声が響くのだ。とても眠ることはできなかった。

オブリッド？

彼女は、いつも少し甘えた声で呼びかける。

王族の中に六人いた皇子、そして五人の皇女の中で、なぜかリスムルはオブリッドと一緒にいることを好んでいた。六歳になって社交界へ引っ張り出された頃からずっと、それは変わらなかった。堅苦しい社交辞令や儀式の合間に、目を盗んでは城の隠し通路へ逃げ込んでいたオブリッドを、リスムルだけは簡単に見つけ出し、ほとんどの場合はそのまま一緒に隠れ潜んだ。

「私とオブリッド、逆に生まれていたら良かったのに」

王のただ一人の愛娘は寂しそうにそう言っていた。九歳になったとき、リスムルは婚約した。エディンベリー大陸の東を治める王家の男が相手だと聞いたが、それ以上のことは聞かなかった。……いや、聞きたくなかったのだ。

リスムルがそれを知ったのは十四の時だった。

「王の子供でも、女に生まれた私にはなんの力もないのね」

城の中庭、女神の像を見上げるリスムルの目から、涙がこぼれ落ちていた。オブリッドはそれを見ながら、棒を呑んだように立ち尽くしていた。

幼い頃のように、その肩を抱き寄せ、金の糸のような髪をなでて慰めてやりたかった。青い宝石のような瞳から涙をぬぐってやりたかった。幾つものかけるべき言葉が口からあふれそうになっていた。

だが……王族とは言え継承権が低く地位の劣るオブリッドには、もはや皇女に触れる権利はなかった。あと五年早く生まれていれば、リューベーンの大陸統一の戦いの中、武勲をあげる可能性もあっただろう。だが、統一がほぼ果たされた時点で、その道も閉ざされてしまった。

幼い頃からかたわらにいることが当然だと思っていた存在。年月の中で可憐な華のように美しく育ったリスムルを前に、オブリッドはただ、下の者がかける型にはまった言葉を口にするしかなかった。

「王が選んだ相手だ。なにも心配することはない」

それがあなたの答え？　問いかける青い瞳を見返すことができなかった。皇女の前では顔をあげることすらできなくなった。

そんな時に起こった《大災厄》が、リスムルをこの国につなぎとめた。バグラゲラが放ったと言う化け物がリューベーンの街と、周辺の村を襲い、王はやっきになって国を守ろうとした。武勲をあげる機会をオブリッドは逃さなかった。手勢を集め、王と共に戦い続け、バグラゲラの拠点であった研究所へも向かった。

だが……、その結果は……。
謁見(えっけん)の間の奥、花に囲まれた部屋で会ったリスムルは、城が落ちる前と変わらないように見えた。しかし、彼女の目は何も見ておらず、体は異形の者に成り果てている。
「リスムル……、こんなことになると判っていれば！」
やりきれない思いに、オブリッドは拳を壁に叩きつけ、それでも足りずに額を固い石壁に打ちつけた。一瞬(いっしゅん)の痛みが、その刹那(せつな)だけ心の痛みを消してくれる。
オブリッドの足下(あしもと)にメリダの影(かげ)が重なる。
「皇子、ご自分を責めてはいけません。城が落ちるとは誰一人予想できなかったのですから」
「メリダ、おまえにも判らなかったのか？　大いなる母からの声はなかったのか？　城が落ちると言う大事にもかかわらず？」
メリダは答えない。
もう一度、壁に拳をうちつけて、オブリッドは女神官に背を向けると、兵士たちのいる大広間へ足を向けた。
ビリヤナの木をかたどった大きな柱のそばで、三人の兵士は眠っているはずだった……が、聞こえてきたのは言い争いの声だった。
「残ってなんになるっていうんだ？」
「……だめだ、城へは戻れない……」
「オレだって、もう一度、姫(ひめ)の姿を見たいとは思わない。しかし、忠義を守るためなら、耐え

るのが当然だろう?」
「……ちがう、姫様じゃない」
「じゃあ、なにがそんなに恐ろしいんだ?」
「俺は……思い出したくないんだ……あの日のことは……」
「……あの日……?」
「何の騒ぎだ?」
広間に入ってきたオブリッドに気づいて、二人の兵士は立ちあがって居ずまいを正したが、一人、フェイングだけは子供のようにうなだれている。フェイングが配下に加わったのは、大異変が起こった後からだが、命令に忠実で熱意のある朴訥な人柄をオブリッドは高くかっていた。それだけに、皇子の前だと言うのに立ち上がろうともせず、うなだれている彼の姿にただならぬものを感じていた。
「フェイング、体調でも崩したか?」
「……いいえ」
兵士の声は重くかすれている。立っている二人に目をやると、二人は苦い顔で首をふる。オブリッドは深く息をついた。
「何があったかは知らんが、城を抜けるためには手勢が必要だ。しかし、ここにいるのはユテラルドを加えて五人。一人たりとも欠けるわけには行かない。判っているな?」
フェイングの頭が小さくゆれる。

「なら、支度をしろ。あいつが戻りしだい出発する」
二人の兵士はうなずいたが、フェイングは凍りついたように身動きしなかった。
生命のエキスが入った小箱を差し出したユテラルドは、オブリッドの視線を受けて、落ちつかない気分で新しい鎧を見下ろした。
「頼まれていたものだ」
四剣主の一人としていくつもの戦場で戦ってきたが、いつも目立たない質実剛健を形にしたような武具を身につけてきた。しかし、界晶界の《店主》が選んだ防具は、その対極にあるような派手がましいものだった。
真紅の仮面に、炎をかたどった羽のような飾りのついた赤い鎧などを持ち出され、さんざん言い争った結果、黒の鎧に金の模様がひかえめに入った物と額当て、リューベーンの兵士が一般的に使っているブーツで折り合いがついたのだ。
それでも、ユテラルドの尺度から言えば貴族趣味としか思えず、モゾモゾと身じろぎする。
それを知ってか知らずか、オブリッドはじっくりと視線を走らせた。
「ふむ、王つきの近衛兵のような貫禄だ。以前のゆがんだ軽鎧にくらべて、ずいぶんと頼もしくなったたな」
鎧と剣の腕は関係ないと反論したいところだったが、《店主》が言ったとおり、パルミラの武具を身につけると、重装備にもかかわらず、身が軽くなり腕力も増したのだ。

（リューベーンが無敵を誇った理由がわかったな）

重い鎧を着込んでも、まったく疲れを感じないことに驚きながら、ユテラルドは大陸を統一した国の力を実感していた。

「兵士たちのためにも、鼓舞する対象がいてくれるとありがたい。すぐに出発するが何かあるか？」

「俺はかまわない。そっちこそ、そんな顔色で大丈夫なのか？」

「ああ。のんびりするほど、事態は悪くなりそうだからな。行くぞ」

神殿の外にはメリダと兵士の一人が待っていた。オブリッドは顔を曇らせる。

「バルドとフェイングは？」

「まだ、準備に手間取っていまして……」

「準備か？　ちがうだろう？」

オブリッドの厳しい声に、兵士は視線を落とした。

「はい」

「ユテラルド、すまないが先に行って城の様子を探っておいてくれ。すぐに追いつく」

「わかった」

オブリッドと兵士は神殿の中へ姿を消す。

「なにかあったのか？」

ユテラルドは問いかけたが、メリダは静かに首をふる。出かけようとした彼を神官は呼びと

めた。
「……ユテラルド、覚えていてください。いずれ、どこかであなたは《万物の母》の声を聞くでしょう。《母》の言葉に耳をかたむけてください。消えるものはないのです」
「……《万物の母》か？　モレアと同じことを言うんだな。俺は神など信じない。神なんてのがいるのなら、世の中はもうちょっとましなはずだからな」
薄笑いを浮かべてメリダをにらみつけたユテラルドは、彼女に背を向けて枯れた木々の中、街への道を下って行く。メリダはそっとつぶやいた。
「すべては、より良き道への苦難なのです……」

第五章　リューベーン城下町　大災厄、トレド、フォーリム

リューベーンの城下町には、やはり生き物の姿は見られない。
瓦や窓の破片、壊れた家財道具があちこちに散らばっている通りを、ユテラルドは渡って行く。風もなく、静まりかえった死の街。ユテラルドの足の下で踏み潰される枯葉の砕ける音ばかりが、やけに耳につく。
帝国の首都だけあって、建物は石やレンガでできており、二階建て三階建ての家並みが続いている。石畳には馬車のわだちが、二本の溝になってくっきりと残っている。どれほどの数の人間がここで暮らしていたのだろう。
家々には生活の跡は残されていたが、住人の消息を伝えるようなものは何も残っていない。死体さえも。
死者へ思いをはせていたユテラルドは、最初、淡い光を放ちつつ屋根の上で漂うそれを亡霊だと思ったが、すぐ正体に気づいた。それもユテラルドに気づいて舞い降りてきた。
「ユーテーラールードー」
フォーリムはユテラルドのそばまで降りてくると、小首をかしげながら彼の周りを回りはじめた。

「新しい鎧（よろい）なんだね。ユテラルドかどうか、ちょっと迷っちゃったよ。だいたい、どうしてこんなとこにいるのさ？　城の中にいると思ってたのに」

「………」

「どうしたの？」

「地下での質問の答えがまだだったな」

「えっ、なんのこ……と？」

自分を見返すユテラルドの目に怒（いか）りを感じて、フォーリムはゆっくりと後ずさる。

「質問って、なにかあったっけ？」

「とぼけるな。どうして俺（おれ）の名を知っていた？」

「だ、だからぁ、ユテラルドが教えてくれたじゃない！」

「言っていない」

「だって……だって……、ボクはそうとしか答えられないよぉ！」

バタバタと空中で右往左往したフォーリムは、ユテラルドの前へ進み出ると首をたれた。

「……ねぇ、どうしたら信じてくれるの？　ボクを殴（なぐ）ったら気がすむ？　だったらさ、その武器で叩（たた）いてもいいよ。あ、でも、あんまり強く叩かないでよね。ボク、死んじゃうからさ」

それだけ早口に言いきると、翼（つばさ）を縮め、首も小さく丸めて、じっと動きを止める。まるで、親に叱（しか）られた子供のようなしぐさだ。

何故（なぜ）か、どこかでよく似たしぐさを見たような気がするが、どこだったのか思い出せない。

しばらく見ていたユテラルドは、小さくため息をついて歩き出した。
「叩かないの？　あははっ、ユテラルドってやっぱ、いい人なんだね」
きゅっと首を伸ばしたフォーリムは、大きくはばたいてユテラルドの肩の上まで追いつく。
ユテラルドは渋い顔のまま、横目でフォーリムをにらむ。
「もう一つ。《魔人》というのは、バグラゲラのことなのか？」
「え？」
「この国の人間は、バグラゲラが異変を起こしたのだと言っている。しかし、おまえは《魔人》を倒せば物事は解決すると言った。どう言うことだ？」
フォーリムは黙り込む。ユテラルドは足をとめ、正面からフォーリムをにらむ。
「簡単な質問のはずだ。魔人とバグラゲラは同一なのか、違うのか？　答えろ」
「……そうかも知れないし、そうじゃないかも知れない……」
「はぐらかすな」
「あ、あのね、バグラゲラって人と、魔人はすごく近くにいて、どっちも強い力を持っているんだけど……、一緒かどうかは……ボクにはわからない」
「どうしてだ？」
「………あっ、ひょっとしたら、どっちかが、どっちかを操ってるのかもしれないよ。そう考えればスッキリするでしょ？」
「俺はおまえの考えを聞きたいわけじゃない。事実が……」

「う、うわぁぁぁぁぁ！」
突然の悲鳴に、ユテラルドとフォーリムは来た道を振りかえる。
「お、《黄金の鳥》！　助けてくれ！」
「フェイング？　しっかりしろ、どうしたんだ！」
通りの真ん中であばれているフェイングを残りの二人の兵士が抑えており、オブリッドは苦りきった顔でその様子をみている。恐怖に声を引きつらせながら、フェイングはフォーリムを指差した。
「皇子！　あれが災厄の鳥です！　お逃げください、また、あの時の災いが……！」
「あの、ユテラルドの肩でゆらゆらと浮かんでいるものが、トレドを壊滅させたと言うのか？」
「そ、そうです！　そして、あれこそが帝国を外界から閉ざした元凶です！」
オブリッドはフェイングとフォーリムを見比べる。
「あいつ……、裏切り……者？」
地の底から響くような重い声が聞こえ、ユテラルドは驚いてフォーリムを見つめる。黄金色の体の中心にまばゆい光が現れ、渦巻きはじめる。得体の知れない力を感じて、ユテラルドはフォーリムから離れて武器に手をかけた。
「おまえ……、なにをしたんだ？」
フォーリムはビクッと震えると、ユテラルドへ顔をむける。ふくれあがりつつあった光と力

は潮が引くように収まった。

「えっ……？　あ、やだなぁユテラルド、身構えちゃってどうかしたの？」

「おまえ、なにをしでかしたんだ？」

「あの人、何か勘違いしてるんだよ。こーんな小さなボクが、なにをやったって言うの？」

そう言うとフォーリムはオブリッドたちの方へ飛んで行くと、這いつくばりながら逃げようとするフェイングの頭上で止まった。

「ねぇ、おじさん。ヘンな濡れ衣はやめてよ。ボクがおじさんの言うようなのだったら、今、この時点で、おじさん、生きてないとおもうケド？」

フェイングがこわばったまま動かないのを見て、フォーリムはオブリッドの方を向いて問いかけた。

「ね、そう思うでしょ？」

「あ、ああ」奇妙な生き物に話しかけられたオブリッドは、うろたえつつもうなずく。

「このおじさん、疲れてるんじゃないかな？　それとも、最近すごい怖い目にあったとかさ。倒れちゃいそうな顔してるよ。寝かせてあげた方がいいんじゃない？」

フォーリムの言葉にうなずいていた兵士が、オブリッドを見上げる。

「オブリッド様、フェイングは神殿へ帰してやってはいただけませんか？　このままではとてもではありませんが……」

皇子はうんざりと言いたげにため息をつく。

「フェイング、神殿へ戻れるか？」
オブリッドの言葉に、フェイングは激しくうなずくと、押さえていた仲間の手が離れたとたんに悲鳴をあげて転がるように走り去った。
「なんだよ、ひどい臆病者だね」
通りを遠ざかる人影を見送りながらフォーリムは憮然とつぶやき、残った二人の兵士は不安そうに互いの顔を見合わせる。オブリッドは苦々しく吐き捨てた。
「あんな腰抜けではなかったはずだが……。行くぞ。バグラゲラへ一矢むくいてやる」
城の門はオブリッドの手でふたたび開かれ、四人と一羽は異臭のただよう城内へ踏み込んだ。耳をすましてみても、遠い風のうなり以外は何も聞こえない。オブリッドが振りかえると兵士の一人が前に立って先導する。フォーリムはユテラルドの肩に舞い降りた。
「ねぇ、どこ行くの？」
とたんに、乱暴に振り払われて転げ落ちる。
「もおぉ、ひっどいなぁ！　教えてくれたっていいじゃないか。ヒドイよ。ボクが一生懸命、手助けしようって頑張ってるのに」
「黙れ」
ユテラルドの射るような視線に、フォーリムは言葉を切ったが、すぐに小声でブツブツとつぶやく。そんなフォーリムを無視して、ユテラルドたちは足音をしのばせて、闇に覆われた城の奥へ向かう。謁見の間へ続く階段を迂回して、壁や床がひび割れて陥没している廊下を進み、

細いわき道の突き当たりにある、ほこりに覆われた扉をくぐりぬける。
しょげていたフォーリムが顔をあげた。
「あ、風が吹いてる」
兵士たちの控えの間だろうか、部屋の中には幅広のテーブルや、無骨なイスがならべられ、壁には武器や鎧を納める棚がずらりと並んでいる。しかし、入っていたはずの武器や鎧は持ち出されており、わずかに、壊れた破片だけが床に散っていた。
部屋の一部の壁はおおきくたわみ石組みが崩れかかっていて、人が通りぬけられるぐらいの大穴があいている。風はそこから吹き込んでいた。
オブリッドが身構える。向き直ったユテラルドと兵士の前を、白い小さな生き物が走りぬけた。
「キョーイか」
兵士がほっと肩を下ろす。チイチイと小さな鳴き声をあげながら、白い毛玉のようなネズミは、大きな尾を引きずりながら風が吹き込む穴の向こうへもぐりこんだ。
「ユテラルド……、あの向こうになにかいるよ」フォーリムがつぶやく。
「あのチビが入っていっただろ」
「ちがうよ。もっと……大きな気配がする。なんだろ?」
「あの向こうには地下へおりる穴が開いている。しかし以前に見た時はなにも居なかった」
オブリッドの言葉にうなずいたユテラルドは、不安の声をあげるフォーリムを無視して穴の

向こうをうかがった。

　がらんとして何もない部屋があった。片隅の床は下から叩き破られたように、床の石がめくれあがり、黒々とした口を開いている。穴の周囲には大きな石の破片が散らばっているが、その間に白いものが小山を築いていた。

　チイチイ、チリチリと声をたてながら、山はざわざわとうごめく。その真上から白い房が赤い筋をひきながら落ちてくると、小山がうねってたちまちのうちに覆い隠してしまい、バリバリと骨を噛み砕く音が響き渡った。

　白い山はキョーイの群れだ。落ちてきたのもキョーイ。

　白いネズミたちが、赤い目を光らせ、ふさふさとした尾を振りながら群がり、互いの体によじ登りつつ小山を築いている。ざわめく山から一匹が宙へ浮かび上がり、もがきながら上へ上へと昇っていく。昇っていく先を目で追ったユテラルドは、剣を抜いて身構えた。

　天井近くに、皇女と一緒にいた少年が浮かび、昇ってきた白い毛玉をつかまえると、首をつかんでひねる。ネズミは必死にもがいて悲鳴をあげるが、少年は醒めた目で、手に力を込めながら、断末魔の声をあげる生き物を見つめている。

　悲鳴が消えてネズミは動きを止める。少年の手から滑り落ちた死骸に仲間がむらがる。

　その様子をながめていた少年が顔をあげてこちらを見る。ユテラルドは飛び出すと同時に大きく剣を振るった。

　剣から滑り出た風が刃になって少年めがけて走る。腕で受け止めた少年は大きくのけぞって

よろめく。天井がゆれ、石の破片と一緒に黒い蔦（つた）が這い出てくると、床までたれさがり、もぞもぞと動き回る。

キョーイが白い波になって襲（おそ）いかかってくる。空（うつ）ろな目をしたネズミたちは、ユテラルドが作り出した炎（ほのお）の壁へなだれよせ、次々と炎に包まれていく。

「ユテラルド！」

オブリッドと兵士たちが蔦を切り払うが、それが居場所を教える結果になってしまい、次から次へと現れる蔦がむらがる。少年は蔦の間に浮かんだまま、苦戦するユテラルドたちを無表情に見下ろしている。黒いうねりの中を金色の鳥がすり抜けた。

「ビルホルゴ！」

そう叫（さけ）びながらフォーリムは、少年へ向かって飛び上がる。

「ビルホルゴ、無事だったのね」

フォーリムは少年の周囲をとびまわり懸命（けんめい）に話しかける。しかし、少年はフォーリムを無視して、ユテラルドへ光の槍（やり）をなげつけた。すんでの所で鎧に封（ふう）じられたパルミラで打ち消すと、剣から引き出した火球を叩きつけたが、少年もそれを打ち消した。間をおかず続けざまに剣で切りかかるが、すばやく空中へ逃げられてしまい、雷（かみなり）の雨で反撃（はんげき）される。

回り込みながら逃げるユテラルドを容赦（ようしゃ）なく雷が追う。光の雨の中へフォーリムが飛び込み、二人の間ではばたいた。

「ビルホルゴ、ダメ！　いけない！」

「フォーリム、なんのつもりだ、どけ！」
雷を、あたふたとかわしながら、フォーリムは少年へ近づこうとする。
「ビルホルゴ、やめて！　聞こえないの？　わからないの？　ビルホルゴ!?」
少年の顔がいらだちにゆがむ。目の前まで迫ったフォーリムへ手のひらを突き出し、光の塊をぶつける。まばゆい輝きの中、フォーリムの悲鳴が響いた。
フォーリムの体は小さく引き裂かれ、甲高い叫びをのこして魔法の光の中に溶ける。
「フォーリムッ！」
光が消えた後には、かすかな粒子がただようだけだった。
「う……？　ああ……」
少年は目を見開いて、フォーリムがいた虚空と自分の両手をみつめていたが、泣き出しそうな顔で頭を抱えこみ、呻き声をあげて身をよじった。
「あ……うぅ、……ま……ぁ……」
身を縮めた少年の体に、白い光の粒がより集まってくる。白い輝きにかき消されるように、小さな体は薄れて消えた。
「ユテラルド！　こっちだ、急げ！」
床に開いた穴のふちでオブリッドと兵士が待っている。ユテラルドのために道をつけようとした兵士の腕に一本の蔦がからみつくと、たちまち、周囲の蔦がすべて押し寄せてくる。もう一人の兵士が皇子をかばう。

捕らえられた兵士の体に次々と蔦が巻きついて固く締め上げる。炎で焼き払い、何度切り払っても、天井からは滝のように蔦があふれ出てきてキリがない。

「ユテラルド、来い！」

ついてくるよう身振りをして、オブリッドは床に開いた穴へ飛び込む。護衛をしていた兵士も、仲間に目をやってとまどいつつも穴の中へ姿を消す。

空中に吊り下げられた兵士が苦悶の呻き声をあげ、巻きついた蔦の間から、ゆるゆると血が流れる。ユテラルドは押し寄せてくる蔦を切り払いながら床の穴へ駆け寄った。

穴の下にも通路があり、なだらかな下り坂が闇の中へと続いている。オブリッドと兵士が待っている。ユテラルドは飛び降りた。

背後からざわざわと音をたてて蔦が追ってくる。

「皇子、敵が！」

暗い通路の奥、先行していたオブリッドと兵士が、ぼんやりと青黒い人影と向きあっている。追いつこうとしたユテラルドの足下から黒い塊がせりあがり、足をつかもうと触手を伸ばす。かわしたユテラルドの前で、触手は鉤爪をもった腕に、塊は青黒い人影になって立ちふさがった。人影は片足で踊るように跳ねながら間合いを詰めると、握りしめた棍棒でなぐりかかってくる。鈍い音をたてて剣と棍棒がぶつかりあい、そのまま力比べになった。

人影には頭がなく、肩から盛りあがった膨らみが、顔のある辺りでギザギザの割れ目にふちどられた口のようになっている。口の中はにごった赤い色がべったりと貼りついていて、中央

にはまばたきしない黄色い目が一つだけ、こちらをねめつけている。
その赤い皮膚が不気味に波打ち、腐臭が顔に吹きつける。ユテラルドは気合と共に敵を押し返し、腹に蹴りを入れる。そしてよろめいたところを剣で横になぎはらい、続けて肩から足へ切り下ろすと、人影は倒れつつ姿を消した。
すぐ背後で蔦のざわめきが聞こえる。振りかえりざま火球を投げつけると、押し寄せていた蔦が燃えあがり、怯えたように引き下がっていった。
オブリッドと兵士も、人影を倒して武器をおろす。
たった一人になってしまった兵士が、小さなランタンをかかげる。ろうそくや油とはちがう青白い光が通路を照らし出した。
「これは、初代王時代のものだな」通路をながめていたオブリッドが沈んだ声で言う。「こんなところにも抜け道があったとはな……バグラゲラめ、めざといヤツだ」
「この道の先に、そのバグラゲラと言うやつがいるんだな?」
「そのはずだ。だがこの方角だと《塔》からは外れる……、かなり歩くことになりそうだ」
来た道をふりかえったオブリッドは、悲しげに城があるはずの暗闇をみつめた。
「……犠牲は多く、何もかも手遅れかも知れない。しかし……、いや、だからこそ、俺はバグラゲラを倒さなくてはならない」
犠牲。
フォーリムの悲鳴が耳の奥に残っている。

「あの鳥が、子供の化け物を倒してくれたのか？」
オブリッドの問いに首を振る。
「いや、あいつはフォーリムを吹き飛ばした後で、勝手に消えただけだ」
「じゃあ、また出くわすかも知れないってことか。……いや、バグラゲラに近づけば、必ず出くわすだろう。あいつが作った化け物だからな」
あの少年は、なぜ消えたのだろう？
まるで、フォーリムを消してしまった自分に驚き、恐れて逃げ出したように見えた。そして何より、フォーリムはあの少年を知っていた。
ビルホルゴ？
少年の名前か？　フォーリムと少年の関係は何なのだ？
ふと思いついて、ユテラルドはオブリッドと兵士に向き直った。
「フェイングが言っていた、《黄金の鳥》、《あの時の災い》ってのは何なんだ？」
オブリッドの顔がこわばる。
「《災い》とは、この国を閉ざした《大災厄》のことだ。フェイングは、バグラゲラの命令でトレドの村を襲ったことが、大災厄を引き起こしたのだと言いはっていた」
オブリッドは視線を落として黙り込む。兵士が口を開いた。
「フェイングは、バグラゲラの下でクレストを持つ者を探す役目についていました。その探索の中でトレドの村を訪れたのでしょう」

「クレストを持つ者を探す？　何のために？」
オブリッドは黙ったまま、通路を奥へと歩き出す。ややあって、ゆっくりと喋り出した。
「……俺やバルドがパルミラ武具を使わないのはなぜか、わかるか？」
「いや……、よくは判らん」
「パルミラ武具は非常に不安定で、うかつに使おうとすると、まったく力が発揮されないか、突然すべての力が放たれて、けし飛んでしまう。ごくまれに、自由に使うことのできる者がいたらしいが、千人に一人と言われるほどめずらしい上、ちょっとしたことで能力を失ってしまったらしい。II世王の頃は、パルミラ武具は命をすてる覚悟で使うものだったそうだ」
「しかし、III世王……、いまの王の時代に、クレストを持つ者なら安全に使いこなすことができると判ったのだ。《赤い疾風》と言う傭兵について聞いたことはないか？」
「赤い疾風……、一人で百人の兵を倒した、不死身の伝説の傭兵のことか？」
「そうだ。ヤツはリューベーンのパルミラ武具を自在に使いこなした。バグラゲラはヤツがクレストを持っていると聞き、各地からクレストを持つ者を集めて、その全てがパルミラ武具を使いこなすことができると知った。だが、クレストを持つ者の数もわずかだ。そこで作り上げたのがアルクレストだ」
「アルクレストの力で、帝国は諸国統一をなしとげた。……だが、なぜかバグラゲラはパルミラとクレストの研究を執拗に続け、研究のためにクレストをもつ人間を狩り集めようとした」
「忠義に厚い兵がクレストを持つ者を探すために数多く全国に派遣され、やがて、トレド村に

クレストを持つ女が見つかった。だが、女の夫が抵抗したため、兵が力ずくで連れ出そうとした時、なにかが起こって兵のほとんどが失われた。ほぼ同時期にリューベーンは、今のように閉ざされた国になったのだ」

古くカビくさい通路に三人の足音が響き、かすかな風が前方から流れてくる。

「トレドから女を連れ出そうとしたとき、黄金の巨大な鳥があらわれて、帝国を罰するために大地を切り取り、行方知れずになった兵はそれに巻き込まれたのだ……とフェイングは言っていた」オブリッドは渋い顔で首をふる。

「クレストを持つ者の周囲では、不可解なことが起こると言う。兵が行方知れずになったのは、それが原因だろう。だが、この国が閉ざされたのは、他の理由だ。執拗に研究を続けていたバグラゲラが、なにかとてつもないことをしでかしたのだ」

通路の暗がりが重苦しさを増したような気がする。下り坂だった通路が平坦になり、ゆっくりとカーブしている。一度、天井から落ちてきたドロリとした液体が、うねりながら襲ってきたが、ユテラルドが火球をぶつけると、あっさり溶けてしまった。

「おまえがいなかったら、ずいぶん苦労しただろうな」

オブリッドはユテラルドへ親しみのこもった笑顔をみせた。

通路の先から吹き込んでくる風が強くなり、出口とおぼしい広い空間が現れる。通路の先は目のくらむような断崖になっており、眼下に巨大な建造物が横たわっていた。

第六章　コロシアム　時を越え、めぐりあいし者

　切り立った崖の下に、井戸の口を思い起こさせる、丸く巨大な建造物が横たわっている。見下ろしたオブリッドが声をあげた。

「そうか、ここは初代王のコロシアムだ。初代王の死と共に破棄されたと聞いていたが、こんな所にあったのか」

「あそこへはどうやって降りるんだ?」

「おそらく、このあたりにゴンドラがあるはずだ」

　オブリッドは崖からベランダ状に突き出した足場へ向かうと、四角い囲いを指差した。

「これだ。ここに乗るんだ」

　十人は乗れるだろう、広い囲いの一ヶ所にレバーのついた低い柱がある。オブリッドがレバーに触れると、囲いはまっすぐ下へ沈み込んだ。足場を突きぬけ、深々と口を開いた漆黒の谷の上へ降りると、コロシアムから真っ直ぐ伸びている道へ向かって、斜めに滑空をはじめる。

　吊るしているロープも、支える車輪も見当たらないのに、囲いは谷の上をすべっていく。いつ、落ちるかも知れず、不安で強ばっているユテラルドにくらべて、オブリッドと兵士は慣れているのか、たいして何も感じていないらしく、ゆっくりと近づいてくるコロシアムをみつめ

ている。
　ゴンドラは突然落下したり、動きが止まるようなこともないまま、眼下に見えていた通路の端、円形の広場の中央へ滑り降りた。動かない大地に降り立ったユテラルドは、ただの石の台にしか見えないゴンドラを振りかえった。
「……変わった乗り物だな」
「そうか？　ああ、外ではめずらしいだろうな。初代王が気に入っていたようで、城にもいくつか同じ仕掛けがあるが、城があんなに荒れている中でもしっかり動いている。これも、コロシアムへだれも訪れなくなった後でも、ずっと動き続けるだろうな」
「皇子！」
　抑えた警告の声に顔をあげると、兵士が通路へ向き直り、武器を抜き放っている。
　底の見えない谷の上へ、桟橋のようにまっすぐコロシアムへ向かう通路の上に、黒い影が三つ、よどんでいる。見るうちに影は、先刻、通路で襲ってきた青黒い人影になると、肩を左右にゆらしながらフラフラと向かってくる。ユテラルドは戦鎚を抜いて兵士の隣にならんだ。
　棍棒を振り上げて、踊りながら踏み込んでくる影の一つへ戦鎚をふるう。戦鎚の放つ淡い光に触れたとたん、敵は大きく弾かれて通路の端から転げ落ちた。続けて兵士へにじりよる二つの影の一つを突き飛ばすが、力が足りず、敵はよろめいただけで向き直ると、低い呻き声をあげて鉤爪でつかみかかってくる。
　銀色の刃が迫ってくる腕を叩き伏せる。鈍い音と共に腕がひしゃげ、煙になって吹きちぎれ

る。抑えた気合の声と共にオブリッドはさらに剣をくりだし、力ののった剣先が青黒い胸元に食い込む。

ユテラルドは敵から間合いを置いて武器の力を引き出す。淡い光が戻って来た戦鎚をオブリッドに迫る敵へ振るった。

通路から投げ出された敵は、暗闇の中へ吸い込まれていく。ユテラルドは最後の敵を振りかえったが、そいつは兵士の一撃を受けて通路から滑り落ちた。

通路の上に、同じような影がポツリポツリと浮かび上がってくる。それに気づいたオブリッドが渋い顔でつぶやく。

「相手をしている余裕はない。走るぞ」

影が形を取るよりも早く、三人は通路をコロシアムの大扉へ向かって駆け出した。手をかけると、重々しい扉はあっさりと開く。走り込んできた三人の足音が、ドーム型になった天井に反響する。天井の中央には温かい光を放つ球体が浮かんでおり、その光が扇形になっている部屋全体に広がっている。部屋の壁には猛獣と戦う剣闘士の姿が刻まれたレリーフがあり、その両脇に青銅色の扉がある。

「オブリッド、どっちへ行けばいい?」

剣を手にしたまま、オブリッドは肩をすくめる。

「さて、ここには初めてきたからな」

剣先を左の扉へ向ける。

「《塔》の方角はこっちだ。上から見たときには何も見あたらなかったから、また地下に通路があるんだろう」
「探しまわるしかないか」
「そう言うことだな」
うなずいたユテラルドは、オブリッドが指し示した扉に手をかけた。扉の向こうにはなだらかな下り坂の廊下が、建物の外周にそって、ゆるやかに弧を描いている。
『……………ルド……』
見上げた天井近くで、金色のモヤがゆらいでいる。
『……ラ……ルド、……いで……』
モヤは何かの形をとろうとしていたが、強い風に吹かれているかのように、固まったと思うとすぐに散ってしまう。だが、その形には見覚えがあった。
「フォーリム？」
黄金色のモヤは、かろうじて鳥の姿になった。
『コ……ロシアム……中央……、バグラゲラ……いる……シャル……ミ……を……』
「シャル……？　シャルアミだと？」
途切れがちになる声を聞き取ろうと、ユテラルドはフォーリムへ向かって身を乗り出す。黄金色の鳥がうなずいたように見えた。
『今なら……間に……あう、急いで……』

目に見えない空間に引き込まれるように、モヤは渦を巻いて消える。ユテラルドは走り出した。慌てたオブリッドの声が追いかける。
「どうした!?」
「聞こえなかったのか？　コロシアムの中央にバグラゲラがいる」
「なにっ！　どうしてこんな所に？」
「知るか。だが、シャルアミの名が出た」
「シャルアミ？」
「ストルタの……俺の知人だ！」
「あの娘か！」
通路の脇から、黄金色の人影がのそりと歩み出てくると、竜のような顔をこちらへむけた。大きさはユテラルドより頭一つ大きい程度だが、全身は鎧のような堅い皮で覆われており、生き物とは思えない金色の光沢を浮かべている。
金色の化け物は、爬虫類の顔を突き出して薄く口を開く。ずらりと並んだ牙が濡れた光を放つ。筋肉が盛りあがった太い腕を振り上げ、にぎりしめた二股の剣を突き出す。ユテラルドはとっさに戦鎚で受け止めたが、剣と戦鎚が打ち合わさった場所から紫色の小さな雷が飛び散る。オブリッドが叫んだ。
「雷の属性……ドラボルトか？　パルミラ兵の訓練用につくられた化け物だと聞いたが……。ユテラルド、そいつは樹のパルミラ力に弱いぞ」

「樹のパルミラ力？」
「ランメルエッジはないのか？　樹属性がないのでは、まともに相手をするのは苦しいぞ」
「くっ！」
ユテラルドは戦鎚をふるい、出てきた小部屋へ叩き込む。だが、通路脇にならんでいる窪みのような小部屋から、ぞろぞろと同様の化け物が現れて行く手をふさごうとする。
「引っ込んでろっ！」
かかってきた化け物の丸太のような腕をかいくぐり、抜き放った剣を短い喉へ突きたて、後ろから摑みかかる手に戦鎚を叩きつける。よろめいた化け物に渾身の力を込めた蹴りを食らわせて、後ろに続く巨体へぶつけた。
化け物の腕をかわそうとしたオブリッドが、もう一体に殴りかかられる、かろうじて受け止めた剣が紫の光と共に甲高い音をたてて折れた。
「相手をするな、走れ！」
援護する兵士と共に、オブリッドは化け物の間から転げ出ると、すぐさま走り出す。傷だらけになりながらも駆け下りる三人は、角を曲がり、突き当たりの扉から飛び出した。
息を切らせた三人の前に、ずらりと石のベンチが並んでいる。左右の斜面にもびっしりと階段のように石のベンチがならんでおり、すり鉢状になって下の広場を取り囲んでいる。
はるか下、丸い広場に二組に分かれて対峙している、複数の人影が並んでいた。
一組は、さっきユテラルドたちが戦ったものと姿形は同じだが、さらに巨大な化け物の群れ。

向かい合っているのは、こげ茶色の長衣をまとい杖をついた一人の老人と、そのそばに浮かんでいる少年、そして後ろに控えているのは……紅い髪の少女。

同じように乗り出したオブリッドが老人を指差す。「あれがバグラゲラだ！」

「シャル……アミ!?」ユテラルドは身を乗り出したが、顔までは見分けられない。

ふいに少年が高く飛びあがって手をかかげる。彼の頭上に現れた光の球から無数の矢が飛び出して、目の前に迫りつつあった化け物どもにふりそそぐ。矢はやすやすと化け物どもの体を貫いて、たちまち打ち倒した。

化け物が消える様を見ていた老人は、少女をふりかえって歩み寄る。少女は頭を振って懸命に逃げようと身をよじっているが、腕を見えない何かでつながれているらしく、その場から動くことができない。

それを見た瞬間、ユテラルドは前へ飛び出していた。眼下の広場へ向かって階段状のベンチを駆け下りる。

翼が生えたような勢いで斜面を駆け下り、広場と客席を隔てている低い柵に手をかけて一気に広場へ飛び降りる。土煙をあげて地面に転がったユテラルドは、反動をつかって立ちあがると、バグラゲラへ剣を向けた。

「……なんじゃ、きさまは？」

まだ、ユテラルドからは離れているとはいえ、剣を向けられているとは思えない呑気な声で老人は問いかける。その横に彼女はいた。

紅い髪は短めに切りそろえられ、三つ編みが一本だけ左耳の後ろから肩へとながれている。今となっては懐かしく思える、見なれた青紫に染められたストルタの狩人の服と、貴石をつなげたネックレス。そして、忘れようがないその顔。金緑色の瞳。

「シャルアミッ！」

荒れた息の下から呼びかけると、彼女の顔に驚きが広がった。

「誰？　私のことを知っているの？」

老人は、シャルアミとユテラルドをかわるがわる眺めると、低い笑い声をあげて肩をふるわせた。

「なにやら知らんが、まぁよい。ビルホルゴ、仕上げと行こうかの？」

少年がふわりと老人とユテラルドの間に割り込む。シャルアミが叫んだ。

「だめよ！　誰だか知らないけど、逃げてっ、早く！」

ビルホルゴが両手をかかげ、光の球を生み出そうとする。ユテラルドは戦鎚を投げつけた。激しく回りながらぶつかった戦鎚と少年の間で白い爆発が起こり、少年は地面へ投げ出された。

「なにっ、パルミラ兵か！」

バグラゲラが杖をかかげる。ユテラルドは老人へむかって飛び出したが、目に見えない壁へ激しくぶつかり、もんどりうって倒れた。

「繋がらん……、ではクレストか」

めまいを振り払おうとするユテラルドに光の矢が襲いかかる。間一髪で飛びのくと、矢が来

た方へ剣をふるった。風が刃になって空中の少年へ切りかかったが、少年もそれをかわしてしまう。二人はにらみあった。

「バグラゲラッ！」

　思いがけない声に振りかえったバグラゲラの目に、剣を振りかぶったオブリッドがうつる。怒りの形相すさまじく駆けよった皇子の剣は、バグラゲラの前で見えない壁にぶつかり、食いとめられてしまう。しかし、それでもオブリッドはバグラゲラへ切りつけた。

「この逆賊めが！　国を滅ぼしただけではあきたらず、リスムルに異形の呪いをかけた大罪、許しはせんぞ！」

「なんですと？　国をほろぼした？　姫君に呪い？　預かり知らぬことですな」

「このごに及んで、しらを切るか？　この恥知らずめが！」

「皇子、いいがかりでワシの手を止めんでいただきたいですな。……王家には恩があるゆえに手だしせずにおりましたが、もはや、ここまで」

「やあっ！」

　女性の声と、堅いものが砕ける音にふりかえると、紅い髪の少女がユテラルドが投げた戦鎚を使って、バグラゲラの造った不可視の縛めを打ち砕いたところだった。よろめいた少女をリューベーンの兵士が助ける。その男が彼女に武器を手渡したのだろう。

　自由になった少女は一目散にバグラゲラ目指して駆け寄ると、白く光る戦鎚を振りかぶる。バグラゲラを守っていた見えない壁が、パルミラの力に打ち砕かれた。

「もらった！」
オブリッドの剣がバグラゲラをとらえた……に見えたが、その瞬間、老人の姿がかき消えた。身構えたまま、周囲をうかがっていたシャルアミが大きく跳ねて逃れる。彼女がいた場所のすぐ後ろに老人の姿が現れた。バグラゲラはシャルアミへ向かって鋼色の輪を投げつけるが、ことごとく戦鎚で弾かれた。
「ええい！　ビルホルゴ、サイクルを捕らえるのじゃ！」
小柄な人影がシャルアミの頭上へ滑空してくる。見上げたシャルアミは、戦鎚を身構えたものの、攻撃しようとはしない。仮面のように表情のない少年の顔を見つめて、ゆっくりと話しかけた。
「ビルホルゴ、しっかりして。あなたのお母さんが……シエナさんが心配してるわ。お母さんに会いたいでしょ？」
「…………」
少年は黙ったまま、シャルアミを見下ろしている。
「ムダじゃ、そいつは何も覚えちゃおらんよ。ほれ、ビルホルゴ、捕まえるんじゃ」
少年は淡い光に包まれた両手をゆっくり差し伸べる。が、光が高まるよりも早く、炎の渦が少年とバグラゲラを包み込んだ。
「シャルアミッ！」
銀髪の青年がシャルアミをかばって立ちふさがる。ビルホルゴが放った光は青年の前で弾か

れて消えた。

「オブリッド！　シャルアミを連れて逃げろ！」

「いや、ここでバグラゲラを倒す！」

　オブリッドはバグラゲラに切りかかる。老人の姿が消え、シャルアミの後ろに忽然(こつぜん)と現れたが、シャルアミの一撃に再び姿を消した。

「やれやれ……、ビルホルゴ、小うるさい輩(やから)を吹き飛ばせ」

　少年がくるりとオブリッドに向き直る。

「皇子！」

　紫色の光の柱がオブリッドを呑(の)み込もうとした時、飛び込んできた兵士が彼を突き飛ばした。紫の光に覆われた兵士の体が焼け爛(ただ)れ、鎧がひしゃげて食い込む。床(ゆか)に倒れた兵士は猛獣のような呻きをあげてのたうちまわった。

　少年は醒(さ)めた目で瀕死(ひんし)の男を見下ろしていたが、かすかに眉(まゆ)をしかめると小さな光球を投げつけた。白い光が弾けて消え去った後には、えぐれた床と得体の知れない破片が散っているだけで、兵士の姿は消えうせていた。

「バルド……、くそっ、バグラゲラ、どこだ！　どこにいる！」

　オブリッドは周囲を見まわして老人の姿をさがしたが、広場のどこにも老人の姿は見当たらず、人をくったような声だけが響(ひび)き渡(わた)った。

「ほ、ほ、リューベーンには王家なぞ必要なかろう。後はワシにまかせて往生するがいい」

「ふざけるな！」

「ワシは本気じゃ。さあ、ドラワイドよ、ビルホルゴの手助けをしてやれ」

広場の一角、大きな鉄格子がゆっくりと引きあがり、金色ののっぺりとした顔が突き出てくる。続いて筋肉が盛りあがった人間の肩と胸が明かりの中に現れ、鳥に似た足先の二俣に突き出た鉤爪が土煙をたてながら地面を蹴りたてる。

全員の目が新しく現れた化け物に吸い寄せられた瞬間、少年がシャルアミに触れようとした。すんでの所でユテラルドの剣が割り込み、少年の手を払いのけたが、少年はユテラルドへ対象を変えると、指先でユテラルドの腕に触れた。

激しい衝撃が走り、ユテラルドは大きく投げ出された。横たわった地面が重く震える。見上げると化け物が足を振り上げている。素早く転がった脇をうなりをあげて鉤爪がかすめ飛び、続けて幅広のだんびらが大地にめり込んだ。

片足立ちになっている化け物にオブリッドが切りかかる。ウロコに覆われた足に刃が滑ってかすかに跡をのこしたが、さほど効いたようには見えない。

シャルアミが、少年の名を呼びながら、じりじりと後ずさっている。ユテラルドは跳ね起きると少女へ向かって飛び出した。

「シャルアミ、オブリッドと一緒に逃げろ！」

近づいて来るユテラルドに気づいた少年が、光の矢をばら撒く。鎧の力で打ち消しながら、少年の足元まで駆け寄って少女を後ろへ押しのけたが、少女はとまどったように動こうとしな

い。

「だめよ。私はこの子を助けなきゃ」

「どうやってだ?」

「それは……」

「オブリッド！　俺が食い止める。シャルアミを連れて逃げろ！」

化け物の巨人のだんびらをかいくぐったオブリッドが駆け寄ってくる。少年と化け物の二体から後ずさりながら、三人はコロシアムの出口へとにじりよる。

三人からコロシアムの出口へ目を移した少年が、出口へ向かって光球を放った。轟音と共に石組みのアーチが大きくゆがむ。少年はさらに光球を放つ。

「オブリッド、早く行け！」

少年へ風の刃を投げつけて注意をこちらへむけようとするが、少し手を止めさせるだけで、少年は出口の破壊を続けようとする。

唸り声をあげながら化け物がだんびらでなぎはらう。ユテラルドはパルミラの力でそれを食い止めると、気合とともに丸太のような腕に切りつけた。鈍い衝撃が伝わり、どす黒い血が地面に滴り落ちる。苦痛と怒りの叫びをあげて化け物は剣を振りかぶった。

振り下ろされるだんびらを軽くかわして、火球を腹へ叩き込む。視界の端にオブリッドとシャルアミの姿がかすめた。

「なにをしている、早くしろ！」

「しかし、おまえ一人を……」
「足手まといだ！　さっさと消えろっ！」
　火球をくらってよろめいた巨体へ剣を叩きつける。鉤爪のついた足が目の前に迫ってくるのを、かろうじてかわしたが、勢いに押されて間合いから離れてしまう。腕と腹から血を流しながら、化け物は後ろに下がって肩をゆする。出口の石組みが崩れる重い音と、オブリッドたちの声が聞こえてきた。
「行くぞ！」
「でも……彼は……」
「あいつなら……大丈夫だ。行くぞ！」
　足音が二つ、出口へ向かって走り出す。少年が進み出ようとするところへ火球を放ち、駆け寄ろうとした背後から風の唸りが迫ってきたと思った瞬間、激しい衝撃が背を襲い、ユテラルドは地面の上に叩きつけられ転がった。
　目の前が真っ赤にそまり、息が詰まって苦しい。地響きに目をあげると、土煙を蹴立てながらだんびらを構えた化け物が迫ってくる。立ちあがろうとしたユテラルドの背後から紫の光が襲いかかる。前に投げ出された彼を、化け物の大きく振りかぶっただんびらが迎え撃つ。
　必殺の一撃を受けて吹き飛ばされたユテラルドは、コロシアムの壁に叩きつけられた。鎧の力で刃は通らなかったとはいえ、衝撃で全身がしびれてしまい、うまく動かない。もがく指先から剣が滑り落ちて、床の上で堅い音をたてる。

化け物が顎をのけぞらせて喜びの雄叫びをあげる。少年はあいかわらず無表情のまま、ユテラルドを見下ろしていた。

動こうとするが意識がもうろうとなり、視界がぼやける。

大口を叩いておいてここまでか？

シャルアミ……。彼女は十三年前の姿のままだった。何故なのかわからないが、それでも生きている彼女に出会えたのだ。そして、彼女を救い出すことができた。

……いや、救ってはいない。こんな、化け物だらけの滅びた国に置き去りにしただけだ。彼女を捕らえようとしている者がいる。

まだ、終わってなんかいない。

ユテラルドは歯をくいしばった。腹の底に力を入れて全身を奮い立たせる。目のかすみが消え去り、だんびらを突き込んでくる化け物の姿が浮かび上がる。

体をひねって、とどめの一撃になるはずだった剣をかわすと、大きな刃は岩を砕きながら深々と壁にめりこんだ。ユテラルドは落とした剣を拾い上げ、だんびらを引き抜こうと苦労している化け物の手首を切り下ろした。

パルミラの力を乗せた刃は太い腕をやすやすと切り裂き、化け物は片手を失って後ずさった。

少年が光の槍を振りかざす。だが、その前に怒りのあまり首に青筋を立て、口から泡を吹いた化け物が割り込むと、ユテラルドへ殴りかかってきた。

ゴツゴツとした拳が床にぶつかって破片を飛び散らす。ユテラルドはその腕を踏み台にして

化け物の頭めがけて飛びかかり、眉間に剣を突きたてた。
悲鳴をあげて化け物は大きくのけぞり、突き刺さった剣へ手を伸ばすが、途中で力尽きてぐったりと崩れ落ちると地響きをたてて倒れふした。
ユテラルドは床に膝をつき、息を整えながら空中の少年へ目をやる。剣は化け物の死体に突き刺さったままだ。だが、少年はユテラルドのことなど忘れたように、ぼんやりとどこか遠くを見つめているだけだ。やがて白い光の粒が少年の体を包み込んだかと思うと、溶けるように消えてしまった。
しばらく様子をうかがうが、少年が現れる様子も化け物が息を吹き返す様子もない。ユテラルドは大きくため息をついて、破片が飛び散りヒビが入った地面に横たわった。
血が大きな音をたてて脈打ち、ふいごのように息が胸を出入りする。全身が鈍い痛みとだるさに重くしびれて動かすのもおっくうだ。起きあがって、オブリッドたちを追わねばならないが、二人が逃げたアーチは巨大な石で埋められてしまっている上、戦鎚はシャルアミが持っていってしまった。他の方法でここから出るしかない。
化け物の剣が壁に刺さっている。これを使えば上のベンチが並ぶ階へ登ることができるかも知れない。のろのろと体を起こした時、けたたましい音をたてて石組みが吹き飛んで破片がバラバラと降り注いだ。とっさに化け物の死体の影にかくれて、音の源へ目をやる。
埋もれていた石組みがきれいに飛び散り、土ぼこりの向こうに暗い通路が透けてみえる。そのほこりの中に二つの人影が立っている。ユテラルドは唖然とした思いで死体の影から歩み出

た。

「無事だったのね？」紅い髪の少女がほっとした表情で駆け寄ってくる。

「どうして……ここにいるんだ？」

「そう言うな。おまえがいないまま先へ進めるとは思っていない。それに、いまさら逃げ帰るつもりは、俺も彼女にもない」

「ビルホルゴ……、あの子も……」

シャルアミは広場の中を見まわす。ユテラルドは首を振った。

「いや、あいつは消えた。また戻ってくるだろう」

「あの子を……殺さないで」

「むかってくるなら倒さねばならない」

「ダメよ、ビルホルゴはシエナさんの……、私の恩人の息子なの。それに、私はあの子を助けてあげたい」

「気持ちだけでは、どうすることもできない」

シャルアミは口を閉ざして視線を落とすが、すぐに強い目でユテラルドを見上げた。

「それでも、私は助けてあげたい」

がんこ者のシャルアミ。村の男たち相手にも一歩も退（ひ）かずに自分の意見を言ってのけ、モレアの兵に対しても凜（りん）として立ち向かった彼女が目の前にいる。

「何、笑ってるの？」

シャルアミは表情を険しくする。ユテラルドは微笑んでいた自分に驚いて口元を押さえた。
「言い争うのは後にしてくれ。まずは《塔》への道を探すのが先決だ」
オブリッドの言葉に二人はうなずいた。

バグラゲラが立ち去ったからなのか、コロシアムに入ったばかりの時には次々とわいて出てきた化け物はまったく現れない。静まりかえったコロシアムを歩きまわり、全ての部屋と通路を調べたが、外へ出られそうな通路は《塔》とは正反対の方角へ向かうものと、ユテラルドたちが使ったゴンドラのある道の二つだけだ。
剣闘士の控え室で、神殿で見たのと同じ界晶柱を見つけたので、三人はそこで体を休めることにした。
界晶界の店主にパルミラの力を使いすぎて壊れかかった武器と鎧を直してもらい、間合いの長い槍とオブリッドのための武器を選んで出てくると、テーブルに頬杖をついていたシャルアミが立ちあがった。
「鎧と武器一つ分なら、足りると思う」
ユテラルドはすっかり軽くなってしまった、パルミラ片のはいった革袋を彼女に手渡す。
殺風景な部屋にしつらえられた寝台の上では、オブリッドが浅い寝息をたてている。疲れた体を椅子に落ちつけたユテラルドは、シャルアミがじっと自分を見ていることに気づいた。
「どうした?」

「……あなた、ユテラルドって言うの？」ためらいがちにシャルアミが口を開く。「オブリッドに聞いたの。私の名前知ってたわね。それに初めて会ったときに、私の知っているユテラルドに似てるって思ったわ」

そっと近づいた彼女はユテラルドの右手を取って、すりきれた革のベルトの下にのぞくクレストへ手を重ねた。

「……ねぇ、あなたは誰なの？」

座っているユテラルドを、シャルアミが首をかしげてのぞきこむように見下ろしている。遠い昔に見た情景。だが、彼女にとってはいつの事なのだろう。

ユテラルドはシャルアミの手をどけて、彼女を界晶柱へ向き直らせた。

「俺が誰かなんてことは、おまえが決めることだ」

「えっ？」

「おまえが信じないのなら、俺が名のったところで意味はない」

シャルアミは何か言いたげに口を開いたが、結局、何も言わずに彼から離れて界晶柱へ歩み寄った。人が近づいたことに反応して、界晶柱の表面から白い霧(きり)のような光があふれ出る。シャルアミは足を止めた。

「私のことを、おまえなんて呼ばないで。シャルアミって名前があるのよ」

「……わかった」

「あなたのことは何て呼べばいいの？」

「俺の名前はユテラルドだ。気に入らないのなら、好きな名前で呼べばいい」

「……わかったわ」

シャルアミの姿が界晶柱の中へ吸いこまれていく。ユテラルドは目を閉じた。

あんな事を言うつもりじゃなかった。シャルアミとの再会を喜びたかった。だが、その一方でまったく変わっていない彼女と、十三年の年月の中で変わってしまった自分との違いが、ユテラルドの口を重く閉ざしていた。

シャルアミにしてみれば、自分は知人に似た男でしかない。そして……クレスト。

俺はまた、彼女を傷つけてしまうかもしれない。

ユテラルドは顔をおおった。

第七章　人秘学研究所　アルクレストが生まれた地

その地下道の壁や床には霜と氷がこびりつき、天井からは太いツララが尖った先端を向けてぶら下がっている。吐く息も目の前で白くけむり、うっかりキラキラと光る凍った床に踏み込んでしまうと、ブーツの底がすべってよろめいてしまう。

「この道を降りなくちゃいけないんだけど……」

崖ふちの細い道をのぞきこみながらシャルアミは首をふる。

「だめだわ。道が途切れている」

隣に立って首を伸ばして下をうかがったオブリッドは、すぐに崖から離れる。

「あれでは渡れないな。シャルアミが以前通った時は、どうやって登ったんだ？」

「少しの凹凸は、この剣の冷気で埋めて進んだのだけれど」

シャルアミは手にした銅の色に光る剣を指ししめす。オブリッドはかすかに眉をひそめた。

「やはり、パルミラを使いこなせるのか。では、クレスト……なのか？」

「いいえ。クレストが無いのにパルミラを使えるって言うのは、そんなに変なの？　バグラゲラも私がパルミラ武器を使っているのを見て驚いていたけれど」

「ごくまれに、クレストやアルクレストがなくとも、使いこなす者がいるらしいが、バグラゲ

ラが驚いていたのなら、なにか……特別なのだろうか？」
「《サイクル》に関係しているんじゃないか、って質問されたわ」
「《サイクル》か……」
「《サイクル》ってなに？」
シャルアミは真剣なまなざしでオブリッドを見上げる。金髪の青年は首を振った。
「全然、見当もつかないな」
「そう……」
シャルアミは視線を落とし、ぼんやりと欠け落ちた道をながめる。オブリッドも同じように道へ目をやった。
「あれだけの窪みを埋めるのは無理そうだな。どこか、緩やかな場所を探して滑り降りるしかないか」
ユテラルドも崖から凍りついた道を見下ろした。人が二人……しかし、滑りやすいことを考えれば一人しか歩けないだろう幅の道が、崖にそってゆるやかに下っているが、所々が大きく欠けてしまい、道が途切れている。何かないか周囲を見まわしていたが、ふと上を見上げて巨大なつららに目を止めた。
コロシアムから下りつづけて、この凍りついた洞窟へ出てきた時の道が、そのつららのそばに通じている。
「……試してみたいことがある。ここから離れた方がいい」

「どうしたんだ？」

オブリッドの声に背を向けて、ユテラルドは滑りやすい道を戻っていく。薄くなって割れやすくなっている色のちがう氷の床をかわしながら、つららのそばへにじりよると、通路の端にひざまずいて、シャルアミとオブリッドが立っている岩棚を見下ろした。

欠けてしまっている通路の場所を頭に叩き込み、ゆっくりと目をツララが林立する天井へ向けた。

「うまくいけばいいが……」

剣を抜いたユテラルドは、一つのつららに目をすえて炎の球を放った。

赤いうねりに呑み込まれたつららの胴がみるみる溶けて痩せていく。ピシリと裂ける音をたてたかと思うと、つららは道へ向かって落ちていった。

重いものが落ちる音と、氷が割れる音とが入り混じって聞こえてくる。もう一度、道の端から下をうかがうと、くだけたつららが欠けた道の窪みを埋めている。シャルアミとオブリッドがこちらを見上げている。表情は見えないが、目を丸くしているのは間違いないだろう。

ユテラルドは次の窪みの場所を確かめると、それに近いつららを探した。

くり返すうちに、まがりなりにも道のくぼみがふさがって通れるほどに修復できたのを見届けて、ユテラルドは二人の待つ場所まで下る。呆れ顔のオブリッドが待っていた。

「ずいぶん、むちゃをする。あんな脆そうな道だ。逆に崩れたらどうするんだ？」

「大量に落さないよう、気をつけたつもりだ」

シャルアミの姿が見えない。紅い人影が道の上にかがみこんでいた。
「シャルアミなら足場を固めている」
「では、通れるな」
歩き出そうとしたユテラルドの腕を、オブリッドは引き戻すと、困惑した表情でユテラルドの目をみつめた。
「おまえ、彼女と何があった？　以前会った時の彼女はもっと明るかったが、今は沈み込んで、おまえを避けている。……おまえは、彼女の知りあいだと言っていたが、本当か？」
「……知りあいがすべて、友人と言うわけじゃない」
オブリッドの目がけわしくなる。「敵なのか？」
「いや。ただの……疫病神だ」
眉をひそめたオブリッドが口を開こうとしたが、女性の声がそこに割り込んだ。
「もう大丈夫よ。早く降りましょう」
道の途中に立ったシャルアミが二人を見上げている。オブリッドはユテラルドへ軽く目をやったが、何も言わずに歩き出す。ユテラルドは氷の道を降りて行くシャルアミを見ていたが、すぐ後につづいた。
「この先に人秘学研究所って場所があるわ」
氷の階段を登りきったシャルアミは、奥へ行くほど氷が溶けて、石の肌がのぞき見えている狭い道を指差して二人を振りかえった。

「小さいけれど、しつこい金属の人形や、壺にひそんだ化け物とかがいるから気をつけて」
「ああ。バグラゲラが作ったやつが野放しになっているんだ。俺も見たことがある。兵士がずいぶんやられた」
「バグラゲラはどうしてそんな化け物を作ったんだ？」
　ユテラルドの問いかけにオブリッドは顔をしかめる。
「いくつかは、人間以外の新しい兵士をつくるため。いくつかはパルミラの実験中の失敗作。それ以外にも、脈絡もなくうろついている化け物もいるが……そいつらについてはバグラゲラに問い詰めてみなきゃ判らんだろう。まぁ、少なくともこの研究所に出てくるやつは、研究所の警備用に造られたものだろう。侵入者を見つけると、どこからともなく送り込まれてくる。何体でも限りなく……な」
　過去のできごとを思い返して顔を曇らせたオブリッドは、心配そうに見上げるシャルアミに気づいて笑顔を見せた。
「シャルアミ、君が見たと言う、中心に小さな円柱が立っている円陣の場所まで案内してくれないか？」
「ええ、でもあれが何か？」
「多分、転移装置だ。バグラゲラは研究に使った資材を《塔》へ移したはずだが、その時に使った装置かも知れない」
「じゃあ、それを使えばバグラゲラの居場所へ行けるわけね。……でも、私が調べた時には、

何も反応がなかったけれど」
「それについては心当たりがある。だが、まずはその場へ辿りつくのが先決だな」
「そうね、行きましょう」
シャルアミは二人の後ろで、氷の洞窟を跳ね回っているカエルのような生き物が追ってこないか見張っている、白銀の髪の青年へ目をやった。その視線に気づいたのか彼は目をあげる。琥珀色の瞳はよそよそしい。シャルアミは奇妙な胸騒ぎに顔をそむけた。
ユテラルド。右手の甲にクレストがあると言う理由だけで、いつも村の子供たちにいじめられていた男の子。瞳の色、目鼻だち、そして右手のクレスト……。目の前の若者とだぶる。しかし、ユテラルドは七歳の子供。目の前の成人した男のはずがない。
「シャルアミ？」
足を止めたままのシャルアミに気づいて、オブリッドが振りかえる。
「どうかしたのか？　……ああ、化け物がウロついている場所だからな」
シャルアミが足を止めた理由に思い至って、オブリッドはユテラルドへ先に立つよう合図する。黒鎧の青年は無表情のまま先頭に立って歩き出した。
「待って、一度行ったことのある私が先に立つわ」
「後ろから教えてくれればいい」
青年は足を止めようとしない。
狭い通路から氷や霜が消えて石の肌が見えるようになってすぐに、半ば開いたままになって

いる石の扉があった。扉の向こうをうかがうと両脇の壁に並んでいるがっしりとした棚が目についた。棚の中には金属や陶器の壺や銀色の管など、何に使われるのかよく判らないものがたくさん並べられている。天井や床、壁の一面は、なめらかに磨き上げられた黒灰色の石でできている。かなり広い部屋だ。どこからか、くぐもった虫の羽音のような、かすかな響きが伝わってくる。

「部屋を出て通路を右へ」

シャルアミの声に軽くうなずいて、ユテラルドは鈍い銀色に光る扉から外へ出た。部屋とはちがい、通路の床には若い苔を思わせる薄緑色の敷き石が規則正しく並べられている。右へ進むと下り階段があり、降りた左には扉、右には広い通路、向かいには同じような階段が上へ伸びている。

「扉はダメ。化け物の巣になっているわ。右の道を走り抜けるの。のんびりしていると敵が現れるから急いで。突き当たりに階段があるから、左の階段を登って」

足音を忍ばせてシャルアミが背後に近づく。

「わかった」

階段を降りようとした時、階段わきの壁に見なれた模様を見つけて足が止まった。

目にも花にも見える文様……クレスト。その横には、クレストに似ているが少し形の異なる文様が描かれている。

「バグラゲラの偉業を、ああやって展示してあるのさ。他にも気味の悪い展示品が残ってるぞ。

見学するひまはないだろうがな」

オブリッドが吐き捨てるように言ってユテラルドの背を叩く。

「急いで、化け物が出てくるわ」

弓を構えたシャルアミが、階下に現れた霞の塊へ矢の先を向ける。霞の中にうっすらと長い腕を床にすりつけた小柄な人影が現れる。オブリッドが舌打ちした。

「ボドルムか！　ちょこまかと素早く厄介な相手だ。おまけにドラボルトと同じ雷属性の化け物だ」

人影は金色の金属でできたぶかっこうな人形になると、甲高い鳴き声をあげて飛びかかってこようとする。シャルアミが放った矢が人形の胸に突きささり、後ろへ弾き飛ばす。ユテラルドは戦鎚を手に階段から飛び降りると、起きあがろうとする人形を叩き伏せた。四肢を投げ出した人形の体が、現れた時とよく似た霞に包まれて消える。

同じような霞がいくつも現れたのを見て、三人は通路を突き当たり目指して走り出した。カシャンカシャンと床の上で金属の体を鳴らしながら、人形たちが追いかけてくる。身軽なシャルアミが左上へ向かって伸びる階段に駆けあがって弓を構えた。

矢が風をきり、金属の音が一つ消える。すぐそばまで近づいてきている音へ向かって、ユテラルドはふりむきざま戦鎚をふるった。人形は両腕で身をかばったが、戦鎚を覆っている白い光に弾かれて大きく吹き飛んだ。

階段を駆けあがり、先を行くシャルアミとオブリッドを追う。人形の一体が階段を登ってき

たところを、さっきの一匹と同じように弾き飛ばす。残りの人形は階段の下で固まったまま、登ってくる様子はなかった。

オブリッドとシャルアミは、通路の途中にある戸口から中をのぞき込んでいる。

「その奥か？」

首をふりながらシャルアミが向き直った。

「部屋の奥にあるスイッチを押すと、この先の鉄格子が上がるの。でも時間がたつと、また降りてしまうわ。開いている時間は、ちょうど走って間に合う程度」

「バグラゲラのやつ、何を考えてそんな仕掛けをつくったんだ」

鉄格子がある道は、階段を上り下りして角を曲がった先、片側が低い柵になっていて見渡すことができる場所にある。

「どこかに、開く時間を長くする仕掛けがあるのかも知れないけれど、私はみつけていないわ。……もしくは仕掛けそのものが壊れているのかも」

「じゃあ、俺が……」

「いえ、私が一番足が速いわ、二人は先に行って」

「しかし……」

「わかった」

言いよどむオブリッドを残してユテラルドは先へ向かう。

「さあ、オブリッドも」

「しかし、一人だけ残すわけには……」
「大丈夫。この辺りには敵は出なかったし、出たとしても一人でならかわせるもの。時間を潰しちゃいけないわ。はやく行って」
「……わかったよ。気をつけて」
視線を後ろへ投げかけながらオブリッドも通路の奥へ向かう。シャルアミは、覗き込んでいた部屋へ滑り込んだ。
部屋には大きな書物机と本棚、枯れた木が植えられた鉢がいくつも並んでいる。机の上には、この研究所に働いていた人が記したと思われる日誌が置き去りになっている。そこには、この研究所が廃棄され資材や研究員のほとんどは、突然現れた石の塔の内部に新しく作られた研究室へ移されたことが書かれていた。その後に続いていた文章からすると、この日誌の主は責任者として最後までここに残っていたが、そこに王の軍が進軍してきて、騒動の中、ここへ戻ることができなくなったようだった。
その内容は、以前ここへ来た時に読んで覚えていた。シャルアミは他のものには目もくれず、部屋の奥の壁に小さく出っ張っている丸いボタンを強く押し込んだ。
遠くで何かが回る低い音が響く。シャルアミは脱兎のごとく部屋を飛びだし、通路を駆け抜ける。角を曲がった先、鉄格子の脇でユテラルドとオブリッドがこちらをうかがっている。シャルアミは下り階段を飛び降りて登り階段に足をかけたが、突然、何かに突き飛ばされて床に倒れ込んだ。

「シャルアミ！」二人が叫び声をあげて走り出す。

ペシャ、湿ったものが床を叩く。その音に覚えがあったシャルアミは、立ちあがらずに床を転がって逃げる。彼女がいた場所に黒い霧がたちこめた。

起きあがって敵へ向き直る。いびつにゆがんで所々欠けている壺の下から、黒々とした目と赤い触手が迫り出している奇妙な生き物が、湿った音をたてながらシャルアミへにじり寄る。

シャルアミは弓を構える。とたんにそいつは壺の中へ引っ込んだ。弓のパルミラを引き出そうとして意識を集中してみるが、何かが阻んでいて力を感じることができない。

さっきの攻撃で、この化け物の特別な能力《封魔》で力を封じられてしまったのだ。

パルミラの力が使えないのでは分が悪い。さらに、行く手の登り階段の上からも湿った音が聞こえる。敵を無視して駆け抜けようとした彼女の足首に、背後から伸びた触手がからみついた。

足を引かれてシャルアミはもう一度倒れ込む。

「シャルアミ！」

黒い風がシャルアミのそばを通り過ぎ、摑まれていた足が軽くなる。身を起こすと、すぐ隣にユテラルドの姿があった。剣を振りかざし、火球を化け物に放つ。

「急げ！　閉まるぞ!!」

閉まりつつある鉄格子をどうにか食いとめようと、格子に組みつきながらオブリッドが叫ぶ。

「無理しないで！　もう一度、スイッチを押せば済むことだから！」

湧き出した霞の中から、新しく現れようとする化け物に矢を射かけながらシャルアミは返す。
「だめだ、敵が増えているぞ！」オブリッドは声を荒げる。
通路を見まわしたシャルアミは声を失った。ぞろぞろと赤い触手を振りたてて、壺をかぶった化け物が二人を取り囲もうとしている。さらに、自分たちが通ってきた通路から、金色の人形がたてるカシャンカシャンと言う足音が近づいて来る。
「くぅぅっ！　開けぇ！」
腰の辺りまで下がってしまった格子を、オブリッドが力の限り引き上げようとしているが、無情に下がり続けるばかりだ。
「シャルアミ！」
戦鎚に持ち替えたユテラルドがシャルアミの腕をつかむ。何事かと思う間もなく、彼女は軽がると抱え上げられた。
「な、なにをするの!?」
「暴れるな！　オブリッド、格子はいい、奥へ……手すりのそばに来い！」
ユテラルドは彼女を肩に背負うと、片手の戦鎚で立ちふさがる化け物を吹き飛ばしながら、格子の向こう側の通路の下へ駆け寄った。
「シャルアミ、登れ！」
人二人分の背丈に近い高さの壁の上に低い手すりがあって、そこからオブリッドが手を差し伸べている。ユテラルドに助けてもらって手を伸ばせば登れるだろう。

「でも……、あなたはどうするの!?」
「手はある。早く登れ！」
「シャルアミ、化け物が集まってくる。早く登るんだ！」
一瞬の迷いの後、シャルアミはオブリッドの手をつかんだ。手すりを越えて通路へ転がる。
這うように手すりへすがりつき、下を見下ろした。
十数匹はいるだろう、化け物の只中にユテラルドがいる。オブリッドは彼に声をかけながら手を差し伸べている。シャルアミは弓を構えて、ユテラルドへ近づこうとする化け物に矢を浴びせかけた。
「ユテラルド！」
ユテラルドは二人の声を無視して通路から離れる。
「ユテラルド、戻るつもりか？　無理だ、こんな状態では……」
湧き出す化け物を戦鎚で振り払いながら、通路の中ほどまで進んだユテラルドは、振りかえると、突然、走り出した。通路の下にいた一匹の壺を踏み台にして大きくジャンプする。戦鎚の頭が手すりを捕らえ、オブリッドがそれをしっかりとつかんだ。
ユテラルドの片手が戦鎚を離れて手すりをつかみ、ぐい、と体をひきあげて通路へ転がり込む。
「大丈夫!?」
シャルアミは、荒い息をつく青年の肩に手をかけて顔をのぞきこもうとしたが、帯でクレス

トを隠した手が、やさしく、しかし断固とした態度で、彼女の手を押しのけた。膝をつき、体を起こす。

「この部屋に入ればいいんだな？」

オブリッドが短い通路の突き当たりにある扉を指し示す。シャルアミがうなずくと、用心深く扉を開いて中をのぞきこみ、すぐに片手でついてくるよう合図して中へ入って行く。シャルアミとユテラルドも続いた。

正方形の部屋の中心には、魔術文字が描かれた円陣と台座、そして小さな柱がある。柱を調べていたオブリッドは満足そうにうなずいた。

「まちがいない。大型の転移装置だ」

顔をあげたオブリッドは、近づいてきたシャルアミとユテラルドへ厳しい表情を見せた。

「これを使えば、バグラゲラの居場所へいけると思われる。だが、もしかすると、どこか危険な場所……、《塔》の地下にあるとうわさされている溶岩の流れや、この建物のすぐそばにある海の真ん中に放り出されるかもしれない」

「それよりも、その装置は使えるの？」

「これを柱にはめ込めば動くはずだ」

オブリッドはベルトの小袋から、子供の拳ほどの透き通った薄水色の結晶を取り出す。

「これはビリヤナの木の実から抽出した、高精度の結晶だ。以前、この研究所でビリヤナの実をみつけた時に、精製室で抽出しておいたんだ」

　オブリッドは少し躊躇しながらも、柱の上に作られた台座にはめ込む。柱を伝って周囲の魔術文字へ淡い光が広がっていく。
「使える……みたいね」
「では、一人だけ先行するか？」
「先行しても、戻って来れなかったら意味はないわ。それに他の道はあなたたちが使った城への道か、私が使った神殿への道しかないし……」
「シャルアミが使った道は壊れてしまったよ。俺とユテラルドが使おうとしたが、神殿の扉が動かなかった」
「じゃあ、城へ行くしかないわけね。だったら、みんなで行く方がいいと思う」
　ユテラルドは黙ってうなずく。オブリッドは二人をまねいた。
「では、円陣の上に乗ってくれ。この台座の上の方が安全だろう」
　二人が台座の上に乗り、柱のそばに立ったのを確かめて、オブリッドは結晶をゆっくりまわす。その瞬間、周囲の景色がゆがんで見覚えのない広間に変わった。
　暗闇に沈んだ広々とした部屋の両脇の壁には、中に水が満たされた大きな透明の筒がずらりと並んでおり、虫の羽音のような低い唸りを発している。シャルアミが身をすくませた。
「あの水の中……人が入ってる」
　彼女が指し示した筒の中には、確かに人らしい形をしたものが浮かんでいる。よく見ると、他の筒にも大小さまざまな人影が、時にはどこかが欠けていたり、多すぎたり、ちがう生き物

の形をしていたり、見たことも聞いたことも無いような奇怪な姿で浮いている。オブリッドは顔をしかめた。
「どうやらバグラゲラの研究成果の展示場のようだな」
「ち、ちょっと、危険よ！」
奇怪な影が浮かぶ筒へユテラルドが近づく。シャルアミの止める声を無視して、彼は筒の中を覗き込んだ。なにかをじっと見つめていたが、ふいに隣の筒へ移動して、また同じようにじっと見つめ、また隣へ移る。
「なにかあるの？」
「クレスト……、たぶん、アルクレストだ」
ユテラルドは水に浸かっている人影の足を指さす。がっしりとした太モモの上に、クレストに似ているが少しちがう文様が見える。隣の筒の人影の腕、その隣の肩、すべての人影にアルクレストが刻まれていた。
「——パルミラ複合の実験の結果、跳躍力、樹のパルミラに対する効果、共に増大。凍の属性を持つブレス能力を所有するも、骨格に異変を発生。進行著しく廃棄。——か」
筒の台座に覚え書きを記した羊皮紙が貼りつけてある。読み上げたオブリッドは小さく体を震わせた。
「この国が閉ざされ、外との交流がなくなった後、次々と人々が失踪した。外へは行けないはずなのに、どうしてそんな事が起こるのか人々は恐れていたが……」

「じゃあ、ここにいるのはみんな……？」

オブリッドは答えないが、それが雄弁な答えになっていた。シャルアミは青ざめた顔で、さらし者にされている死者の群れを見まわす。

「どうして……、戦争をする必要はなくなったはずなのに、バグラゲラはどうしてこんなことを続けているの？　どうして、シエナさんやビルホルゴを捕まえるの？」

「……狂っているのだろう」

オブリッドは視線を落とし、目を閉じた。

「なら、誰かが決着をつける必要がある」

「そう……だな。たとえ手遅れだとしても、決着はつけねばならない」

ユテラルドは部屋を出る唯一の扉へ近づいて耳をすませていたが、静かに扉を開けて外をうかがう。何の装飾もない通路が真っ直ぐ伸びていて、すぐに大きな扉のついた壁に行き当たっているが、その手前、両脇の壁にも一つずつ銀色の扉が見える。

「手前の扉から調べてみる」

通路へ滑り出たユテラルドは、幾何学模様が並ぶ磨き上げられた壁ぞいを伝って右の扉に貼りつく。耳を澄ませるが何も聞こえない。扉を薄く開けて中をのぞきこむと、本や羊皮紙の束、蠟板と思われる板が積み重ねられている棚が目に入った。動くものは何もなく戸口も見当たらない。

向かいの戸口へ向き直るとシャルアミが立っていた。ユテラルドが調べ終わって何ごともな

さそうだと見てとると、左の扉を小さく開いた。しばらく中をうかがい、扉を開けて少し踏み込んだが、すぐに扉を閉めて首を振る。

離れて待っていたオブリッドが近づいてくる。三人は突き当たりの扉を見つめた。

ユテラルドは同じように中の様子をうかがうと、ゆっくりと扉を押し開けた。

明るい光に満ちた丸い部屋の中央に、さっきの部屋にあったのと同じような透明の筒が立っている。その中には水はなく、深いこげ茶の髪を後ろで一つに束ねて淡いとび色の上着と山葡萄色（やまぶどういろ）のスカートを身に着けた女性がぐったりと座り込んでいた。

「シエナさん！」

シャルアミが驚きの声をあげてユテラルドの隣に割り込んでくる。女性が閉じ込められている筒の前に、かすかな金色のモヤが現れて激しく渦巻く（うずまく）。

「今助けるわ！」シャルアミは部屋の中に駆け込む。

「シャルアミ!?」オブリッドがシャルアミの後に続く。

あいまいな金色のモヤの中にかろうじてフォーリムの姿が見えた。懸命（けんめい）に首を振っている。

「シャルアミ、行くな！」

ユテラルドは彼女の手をつかもうとしたが届（とど）かない。異変に気づいたオブリッドが肩をつかんだが、乱暴に振り払われてしまう。シャルアミは筒にすがりつくと透明な壁を叩いて呼びかけた。

「シエナさん、しっかりして！　助けにきたのよ、シエナさん！」

駆け寄ろうとしたオブリッドをユテラルドが止める。睨み付けたオブリッドの肩すれすれに鉄格子が落ちた。慌てて飛び退った二人を追いかけるように、もう一枚、鉄格子が落ちてくる。筒をかこむように、二重の丸い鉄格子が二人とシャルアミの間を隔てる。

「シエナ……きゃあっ？」

筒が持ちあがって女性が崩れ落ちた。受け止めたシャルアミの肩を女性の両手ががっしりとつかむ。驚くシャルアミを女性の光る赤い目が見返した。

「あなた……シエナさんじゃない！」

「シャルアミッ！」

ユテラルドは戦鎚を抜き放つと大きく振りかぶった。激しい音と共に白い光が弾けるが、格子はかすかにゆがんだだけで、逆にユテラルドの手から戦鎚が弾き飛ばされた。

「いやっ、放して！　放してっ！」

薄笑いを浮かべた赤い目の女は、暴れるシャルアミを抱きしめて筒の中に引きずり込む。オブリッドは剣を抜くとゆがんだ鉄格子に叩きつけたが、効果がないとわかると剣を柵の間に差し入れて、テコのように使って押し曲げようとする。ユテラルドは戦鎚を拾い上げ、もう一度パルミラの力を鉄格子にぶつけた。

甲高い音をたてて、格子が大きくゆがんで折れそうになったが、まだ折れない。

「シャルアミーッ！」

「ユテラルドッ！」

もがきながら叫ぶシャルアミの上へ透明の筒が覆いかぶさる。

「シャルアミ――ッ!!」

オブリッドは鉄格子につかみかかると弱っていた鉄の棒をはぎ取り、ユテラルドは焦(あせ)る気持ちを抑(おさ)えながら隣の格子へ戦鎚を振り降ろした。そんな二人をあざ笑うように、筒の中にまばゆい光があふれてシャルアミを飲み込んでいく。それが消えた後には何も残っていなかった。

「……やられた」

鉄の棒を取り落としてオブリッドはがっくりとうなだれる。ユテラルドは怒(いか)りを込めて戦鎚を鉄格子に叩きつけた。

『ヒョッヒョッヒョ、おまえたちも捕らえようと思ったが、こざかしい』

部屋の中に老人の声が響き渡る。

「バグラゲラッ!!　どこだ、出て来いっ!」剣を握(にぎ)りしめてオブリッドが叫ぶ。

『ワシはそんなところにはおらんよ。年よりじゃからな。遠出はこたえるわい』

「ふざけるなっ!　シャルアミを返せ!」

『どれほど大事に思っておるのかのぉ?　口先だけでないなら、ワシのところまで来るがいい。道を開けてやろう』

重い振動(しんどう)が部屋を揺(ゆ)るがす。壁の一部が横に動いて暗闇におおわれた通路が現れる。

「何のつもりだ?」

ユテラルドは居場所の知れない声へ問いかける。老人の笑い声が応(こた)えた。

『何のつもりだと思う？　ワナじゃろうな。間違いないぞ。だったら逃げ帰るか？　帰る場所があればよいがな。そうそう、あんまり遅いと、あのお嬢ちゃんがどうなるか責任はもてんぞ、ヒョッヒョッヒョ』

「バグラゲラッ、きさま！」

老人の声が消え去り、辺りには沈黙がおりる。

ユテラルドは闇に包まれている通路へ歩み寄る。その隣にオブリッドが立つ。二人はだまったまま、バグラゲラが用意した道へ踏み込んだ。

第八章　捨てられた道　バグラゲラの実験体

黒くごつごつとした岩だらけの斜面の上を、鼻をつく異臭が混じった熱風が吹きあがってくる。下からの赤い照り返しに染まっている崖を見下ろすと、まばゆい真紅の光を放つ川が広がっていた。ぼこりといくつもの大きな気泡が弾けるたびに白い蒸気が吹きあがるが、熱気に散らされてすぐに見えなくなる。温度の高い部分は黄色く、低いところは暗褐色の帯を描いて、溶岩の川はのろのろとうねりながら流れて行く。

　ユテラルドは顔をあげると周囲を見まわした。

　溶岩の川の間から尖った山がいくつも迫り出していて、所々にトンネルや細い道が刻まれている。道は山と山を繋いで張り渡された岩の橋を通りながら、溶岩の照り返しの中を遠く霞んで消えている。

「ユテラルド、どうだ?」

　汗の粒を肌に張りつかせて、うんざりと顔をしかめたオブリッドが近づいてくる。

「やはり、ここから降りるしかなさそうだ」

　崖のふち、大きくえぐれた場所から下を見下ろすと、砕けて崩れ落ちた岩の山が溶岩の中を横切っている、うっすらと赤味が残った道まで足場を作っている。

「……じゃあ、俺が先に降りよう。おまえより軽いからな」
ため息をついたオブリッドは崖のふちにしゃがみ込むと、ゆっくりと崩れた岩に足を下ろした。溶岩が固まってできた凹凸の多い岩は、力がかかるとガラガラと崩れそうになる。崩れない場所を探し当て、踏み固めるようにしながら用心深く斜面を下ると道へ飛び降りた。
「俺が降りた通りに来い。ずいぶん脆いから用心しろよ。……っつ、ひどい熱だ。じっとしてると靴の裏が焦げる」
瓦礫の山に足を下ろしたユテラルドは、オブリッドがつけた跡をたどって道に降り立った。オブリッドは溶岩から離れた高い道へ移動している。追いついてきたユテラルドに赤く染まった洞窟の奥を指差した。
「塔はあちらの方角だ。あの場所から狭い洞窟に入れるみたいだ。溶岩から離れられるといいが」
「その前に、切りぬけなくてはいけない相手がいるな」
ユテラルドの視線の先、岩壁の間に開いた人間一人分の細い道を塞ぐように、溶岩に似た鮮やかな赤い体の大グモがぞろぞろと這いまわっている。溶岩にまぎれていてよく見えていなかったのだが、注意して辺りを見まわすと、あちこちに同じクモがうろついている。
「また、化け物か。道にそって進んでいては手間取るな……。ユテラルド、道を飛び移りながら、最短距離で奥をめざしたいが大丈夫か？」
「むちゃな道は選ばないでくれ」

「もちろんだ。俺も渡るんだからな」

二人は高い道を選んで進むと、下を通る道へ飛び降りながら奥に見える洞窟の入り口へ向かって走る。赤いクモが近づいてくるたびに、ユテラルドは手にした長槍で追い払う。槍が帯びている冷気を嫌ってか、クモは二人を遠巻きにしたまま襲ってはこない。

溶岩を見下ろす岩壁には所々石組みの壁が張りついており、溶岩の川には傾いた石の柱や砕けた壁、岸にはひしゃげた鉄の箱や車輪のようなものが突き出ている。見下ろしたオブリッドは小さくうなずいた。

「どうやら、ここも研究所の一部だったようだな」

熱と赤い光に満たされている広大な空間を見渡してユテラルドは眉をひそめる。

「そうは見えないが？」

「ずいぶん昔の話だが、パルミラとクレストの関係を研究していた時、大災害が起こって研究施設の一角が溶岩の海に沈んだと聞いた覚えがある。なんでも《赤い疾風》がかかわっていたらしい」

「伝説の傭兵がか？」

「そうだ。パルミラ兵を作り出したバグラゲラは、さらに《クレスト》とパルミラを調べるため、強い力を持つ《赤い疾風》を捕らえた。バグラゲラは、《赤い疾風》を捕まえることにひどく執着していたらしい。捕まえた後は、王の前に引き出すこともなく、研究室に監禁していたそうだが、そのうち《クレスト》の力の扱いに失敗したらしい。当時の研究所の半分が失

われたそうだ」
「《赤い疾風》はどうなったんだ?」
「わからん。《クレスト》の力と共に消し飛んだか、溶岩に呑み込まれたか……。どちらにしても、記録からは姿を消してしまった」
「そうか……」
溶岩の大河が流れる洞窟をながめながら、ユテラルドは左手で右手の甲をさすった。幼かったあの日、シャルアミを消してしまったあの時の背筋が凍りつくような恐怖が蘇ってくる。
「その時にバグラゲラも死んでくれれば助かったんだがな」
オブリッドは、ぼそりとつけ加えると、せまい亀裂を飛び越えた。
溶岩から立ち上る熱波にうんざりしながら、細く足場の悪い石の橋を上りきったところに、ぽっかりと洞窟が暗い口を開いていた。
中をうかがったオブリッドは、ほっと息をついて壁によりかかった。口を開こうとして何かに気づいたのか、視線を再び洞窟へ戻して首をかしげた。
「……奥から、何か聞こえないか?」
「風……か?」
オブリッドは手をかざす。
「奥へ向かって風は吹いているが……」
二人は洞窟の奥へと歩みを進める。空気を震わせる音は徐々に大きくなり、その中にゴウゴ

ウと唸る音が混じり始めた。
洞窟は、細い枝道が左へ大きな本道が右へ折れ曲がっていたが、本道の向かいの壁が赤く照り輝いている。
枝道を覗きこむと、少し行ったところで小さな部屋になっているようだった。その片隅にリューベーン兵らしい甲冑を身につけた遺体が倒れている。
オブリッドは遺体へ近づこうとしたが、踏みとどまると首を振って振りかえった。
「時間が惜しい。先へ進もう」
本道に沿って角を曲がった二人の目に、巨大な火柱が映った。
「これか！」
大きく開けた岩の空間の中ほどを太い溶岩の川が流れ、中央には川幅いっぱいにゴウゴウと猛り狂う炎の柱が吹きあがっていた。ゆらめく炎の手前に橋の土台が、向こうには奥へ向かう大きな通路があった。
「これを越えねばならんのか」
「試してみる」
長槍を構えてユテラルドは炎の柱へ向かって歩き出す。炎の勢いに比べて、近づくユテラルドの肌に当たる熱はさほどではない。恐らくパルミラで作り出された炎だろう。ならば、パルミラの冷気で打ち消すことができるかもしれない。
橋の土台まであと少しへと近づいた時、火柱の中、溶岩の波を突き破って何かが姿を現した。

盛りあがった小山が身をゆすって溶岩を滴らせると、煮えたぎる流れの中から真っ赤に焼けた肌を持つ巨人が現れた。

とっさに後ずさったユテラルドは、冷気をまとった槍を巨人へ向かって振るった。白い霧の塊は、炎の柱から突き出された巨人の手に絡みつくと水蒸気になって弾ける。黒くなった巨人の指がボロボロと砕けて橋の土台に降り注いだ。

「ユテラルド、大丈夫か？」

「ああ。このまま切りつければ……」

次の攻撃のために身構えたユテラルドの前で、巨人は変色して崩れた手を炎の柱の中に引き戻す。とたんに黒かった手は赤く輝きを取り戻し、崩れた部分から溶岩が盛りあがって指の形になると、すっかり元通りになってしまった。

巨人は腕を振りかぶる。ユテラルドは槍を振るって巨大な拳へ氷の塊を突きたてる。

「ユテラルド、退がれ!!」

前のめりになった巨人の口から炎が噴き出して、真っ直ぐユテラルドめがけて迫り寄せる。炎に包まれたユテラルドは火炎の流れに吹き飛ばされて、もんどりうって巨人の前から転げ出た。

鎧の力に守られていたおかげで直接炎にさらされることは免れたが、熱にあぶられた肌が赤くヒリヒリと痛む。

砕いたはずの巨人の拳に傷一つ残っていないのを見て取ったユテラルドは、唇を噛んで引き

下がった。洞窟へ戻ろうとオブリッドの姿を探す。金髪の青年は、洞窟の壁近くに立っている、子供の背丈ほどの高さの石柱に手をかけて眺めまわしている。

「オブリッド⁉」

気づいたようすを見せずに、オブリッドは向かい側へ顔を向ける。そちらにも同じような石柱が立っていたが、その頂上には赤い球がはめ込まれている。

周囲へ目をやったオブリッドは、巨人の前を指差した。

「それだ、その青い石がここの鍵だ！」

パルミラの炎のそば、橋の土台の端に青い光が輝いている。近づこうとしたユテラルドへ、巨人は腕を振り上げる。

ユテラルドは用心深く巨人の前ににじり寄った。熱風を巻き起こして赤く焼けた腕が迫り寄せる。身をそらして巨大な拳をかわすと、パルミラの炎へ向かって槍を突き出した。

白い光が橋の土台にぶつかり、炎の壁を押しのけて氷の壁が生える。ユテラルドは青い球へ飛びついた。

拾い上げて後ろへ飛びのく。唸り声とともに引き戻された巨人の腕が、氷の壁を打ち砕く。溶けかかった氷が水滴と破片を散らして砕けた。

きらめく破片の中、身をよじって床をころがると、起きあがりざまにオブリッドへ向かって球を投げた。

オブリッドは青い光を受け止めて柱へ向き直った。硬い音をたてて球が柱の頂上にはめ込ま

れると、ゴウゴウと唸りをあげていた炎の柱が、みるみるうちに小さく縮んで消えてしまう。ユテラルドは槍を振り上げ、氷の塊を巨人の胸に叩き込む。氷が食い込んだ場所から水蒸気が立ち上り、巨人の肌は黒く変色する。

今度はいくら待っても、巨人の肌は黒くなったままだ。

振り下ろされた腕を待ちうけ、冷気の刃でなぎ払う。黒くなってボロボロと崩れた手首が溶岩の川に落ちた。ひるむ巨人の頭めがけて氷の雨が次々と突き刺さる。黒々と色を変えた頭が、ごろりと向こう岸へ落ちる。巨大な体が溶岩の川に横たわり、じわじわと黒く変わっていった。

ユテラルドは用心深く近づき、倒れた巨人に冷たい霧を浴びせかけたが、巨人は動かず、霧はその体をさらに黒く染め上げただけだった。

「こいつが橋になるとはな……。予想していたのとはだいぶん違っているが、これで向こうへ渡ることができるか」

どこか釈然としない顔でオブリッドは巨人の体に足をかける。黒い体は溶岩の川を横切って、向こう岸まで倒れ込んでいた。

ユテラルドは、まだ赤味を帯びている場所に槍を押し当てて、道を作りながら向こう岸へ降り立った。先へ向かう道は、茶色い土を掘りぬいた上り坂になっている。

「ユテラルド、溶岩があふれてくるぞ！」

オブリッドが肩をつかんで通路へ引っ張る。振りかえると巨人の体でせき止められた溶岩が、じわりと岸辺に盛り上がっている。

二人は通路を駆け上った。

潮が引くように熱気が遠ざかっていく。道は少しずつ平坦になると、二重の鉄格子で守られた巨大な扉へ行きついていた。幅は大人四人が手を広げて並んだぐらい。高さはオブリッドがかかげる明かりが届かないほど、見上げているとあごが反り返る高さだ。

格子の表、目の高さにレバーがある。

「退がっていてくれ」

ユテラルドはオブリッドを退がらせて、レバーに手をかけた。

レバーを下ろすと、扉の周囲の壁から歯車が回る重い音が響き、鉄格子が左右と上へ引きぬかれる。格子が壁に吸い込まれると、扉がゆっくりと左右に開いた。

すえたような異臭が流れ出てくる。

柔らかな光に照らされた広々とした部屋だが、石組みの床や壁は赤茶色のシミでまだらに染まっており、ところどころ石が大きくえぐれている。壁ぎわには使い道のわからない妙な機械や、檻、ずんぐりとした、槍か杭か判断のつかない銀色の棒、大小さまざまな金属の輪が置かれた幅広の机や棚とおぼしいものが、ずらりと並べられている。

そんな部屋の奥に人が磔にされていた。

「死体……か？」

一見して戦士だとわかる、大柄でいかつい体つきの男が、鉄の柱に鉄の輪と太い鎖で縛りつ

けられているが、剝き出しになった肌はどす黒く濁り、刃物だけでなく、焼けて引きつれたり、溶けたような無残な傷跡が無数に走っている。傷は腹部が最もひどく、そのただれた傷の上にクレストが浮かんでいた。

「ちょっと待て、こいつは……」

オブリッドは磔にされた男をまじまじと見つめていたが、磔にされた男のかたわらの床に突き刺さっている双頭の大斧へ目をやって、深くうなずいた。

「こいつは《赤き疾風》だ！」

「こいつが伝説の傭兵？」

「俺が伝え聞いた《赤き疾風》は、浅黒い肌に鍛えぬかれた体つき、腹部にはクレスト。獅子のたてがみを思わせる灰色の髪……こいつだ。この双頭の斧は、数多くのリューベーン兵の血を吸ってきた代物だぞ。まさか、こんなところに閉じ込められていたとはな……。この様子では、ずいぶん痛めつけられたようだが」

「この傷は拷問か？」

「それもあるだろう。だが、バグラゲラのことだ。こいつのクレストを研究するために、実験をしたんだろう。……いろいろとな」

『そう……だよ』

かすかな声に見上げたユテラルドたちの頭上に、金色の光がうずまいていた。

「フォーリム？　大丈夫なのか？」

ゆらめきながらも形を取り戻したフォーリムは、ユテラルドへ向かってうなずいた。
『ボクも……シャルアミも……まだ、大丈夫……。ゴメン……ね、ユテラルド……』
「バグラゲラはシャルアミを捕まえて、何をしようとしているんだ？」
『よくわからない……《サイクル》って言葉が……鍵みたい……だけど』
フォーリムは、ゆっくりと舞い降りると、磔にされた男の顔をのぞきこんだ。
『この人も……バグラゲラにつかまって……こんなことになっちゃったんだ。クレストを持ってたって……こと……だけでね』
「フォーリム、もしかしておまえもか？」
『……ねぇ、ユテラルド……、ユテラルドはクレストを持ってて……幸せ？』
「…………」
『クレストなんて……欲しくないよね？　……クレストのせいで……、大事な人が傷つくなんて……悲しいよね？』
フォーリムの背が小さく丸まる。
『無ければよかったのに……。クレストなんか……、神さまなんか……、いなければよかったのに……！』
力なくぶら下がっていた男の体がビクリと震える。ユテラルドとオブリッドは飛び退った。
男は呻き声をもらすと、血を吐きながら顔をあげる。
「……ちがう……、クレストは……必要なもの……だ。クレストが……、どのような意味をも

っているのか、……おまえは知っているはずだ」

男の腕から肩にかけての筋肉が盛り上がり、分厚い鉄の輪と鎖が音をたてて変形する。

「与えられた使命を……なぜ……果たさん！」

歯を噛みしめギリギリときしらせながら、男は身をよじる。気迫に押されてさがるユテラルドたちの前へ、弾け飛んだ鎖の輪が転がり、縛めを引きちぎった腕が、血のしずくを散らしながら空中のフォーリムへつかみかかった。

「救いの道を……閉ざしたのは誰だ！　おのれではないか！」

形の不ぞろいな指先が、金の光をかすめる。フォーリムは悲鳴をあげて舞い上がった。

『だって……！　滅びるなんて嫌！　幸せな時間を……もう少しだけ……』

「この国を滅ぼしているのは、おのれだ！」

男は野獣の叫びをあげて、手足に絡みつく鉄の縛めをひきちぎると、シミだらけの床に膝をつき、すぐに立ちあがった。

「来い！　そして譲り渡せ！　オレが引導を渡す!!」

磔台の脇に立っていた斧が、意思をもっているかのように跳ねあがると男の手の中に納まる。

男は大きく振りかぶると、フォーリムめがけて投げつける。

ユテラルドの剣がそれを弾き飛ばし、大斧は床を削りながら滑っていった。

『ユテラルド！』

フォーリムは喜びの声をあげて、ユテラルドの背後へもぐりこむ。

『助けて……くれるんだ』
「おまえには借りがある。さっさと消えろ」
『ダメ……。さっき、あいつに絡め取られちゃったんだ……ここから抜け出せない……』
「そいつが……おのれの選んだ救い手か？　そして……愚かしきリューベーンの王族」
赤くギラギラと光る大男の目が、ユテラルドとオブリッドを射る。激しい憎悪の視線に、二人は油断なく身構えたが、我知らず足がじりじりと退がっていく。
男はただ睨みつけただけだ。しかしユテラルドは自分が相手の力に呑まれていることに気づいていた。この男はまちがいなく、幾多の戦場を戦いぬき、目の前に立った者を一人残らず屠ってきている。その血のむせかえる匂いと死者の呻きが立ち込めてくるようだ。
「ユテラルド！　こいつは……」
低く搾り出すようなオブリッドの声に、ユテラルドは小さく返す。
「逃げろ、今すぐ！」
「来い、クレストを持つ者よ！　おのれらの命を奪い、ワシが唯一となる！」
頭を低く下げ大男が突っ込んでくる。横にかわそうとした瞬間、大男の体が思いがけないほど高く舞い上がり、飛んできた斧を構えて垂直に切り下ろしてきた。とっさに受け止めた剣の刃に斧が食い込み、いやな音をたてて折れ曲がる。
突き飛ばされそうになり、片足を軸にして回って受け流しながら抜いた戦鎚を叩きつける。戦鎚は大斧の腹で軽く止められ、逆に下からもう一方の斧の刃が振り上がってくる。間一髪、

回り込んだ肩のそばを風を切って斧が通りすぎた。
　男の顔めがけて一撃(いちげき)で壊(こわ)れてしまった剣を投げつけ、かばった腕を払おうとしたが、素早く退がられてしまう。追うように叩きつけた戦鎚が大男の脇をとらえた堅い衝撃(しょうげき)があったが、男は体をひねって受け流すと平然と立っている。
　ユテラルドも後ろへ飛びすさり、槍に持ち変える。
　男が再び突っ込んでくる。その正面から冷気の霧をあびせかけたが、男はひるむことなく眼前へ迫る。瞬(またた)く間に大きくなる斧の刃を鎧の力で食いとめたが、男は気合と共にパルミラの壁を打ち砕いた。とっさに横へ飛んで床を転がったが、腕と肘(ひじ)に焼けるような痛みが走る。
　斧が真横から襲いかかる。床にはいつくばり、通りすぎると共に跳ね起きて槍を突き出す。横にかわした男を待ちうけて、逆手に抜いたナイフを顔面に叩きつける。
　ガチン！　と予想していなかった硬い衝撃に驚(おどろ)く間もなく、男の太い肘が打ち下ろされる。抜けないナイフを手放し、ユテラルドは体をひねると、軽業師のようにとんぼを切って間合いをあけた。
　振りかえった大男は、歯で咥(くわ)えたナイフを手にすると、ユテラルドめがけて投げつける。ユテラルドは、それを槍の柄(え)で弾いて落ちてくるところを受け止めた。
　ユテラルドを見ている大男の顔に、笑みににたものが浮かぶ。
　身構えた大男が斧を手に宙を舞う。ユテラルドは氷の塊を放つ。男の斧が氷を砕き、そのままユテラルドの上に迫る。かわそうとしたユテラルドの目の前で、斧がまばゆい光と小さな雷(かみなり)

を放った。
光に目がくらみ、雷が全身をしびれさせる。後ろへよろめいたユテラルドへ斧が振り下ろされる。ユテラルドはかすむ視界よりも、自分のカンにしたがって槍をねじ込んだ。
確かな手応え（てごた）があって斧の向きが変わる。真横で床が砕けた音と、斧が離れた場所へ落ちる音が聞こえた。
間合いを開けようとするユテラルドに男はぴったりと食いつき、拳を振るう。光の残像が残っている目をしばたかせつつ、ユテラルドはナイフで迎え撃（むかう）った。
男の岩のような拳にナイフの刃先（はさき）が食い込む。しかし男は表情一つ変えずに拳を突き出し、ユテラルドの手からナイフをもぎ取って、鎧が切り取られ、血に染まった肩へ拳を叩き込んだ。
砕かれるような痛みにユテラルドは呻きをあげたが、それをかみ殺して氷の雨を男の腹に叩き込む。のけぞった大男が片手をかかげた。
『ユテラルド、後ろっ!!』
風を切って迫り寄せるものに気づいたが、かわす間もなく、激しい衝撃が脇腹から背にかけて食い込んだ。
「オレに一対一で立ち向かって、よくぞここまで傷を負わせてくれた。若き戦士よ、楽しかったぞ」
額と頬（ほお）から血を流しながら大男がニヤリと笑う。
ユテラルドの目の端（はし）に、自分の脇腹から生える斧が見えた。

痛みはない。だが、体から力が抜け落ちようとしていた。
右手の甲がチリチリと痛み出す。
「させんぞ！」
ユテラルドへ近づこうとした大男の体が大きくゆらぐ。オブリッドが部屋にあった鉄の槍を、男の背に突き立てている。
「力なき者が……、オレに刃向かうか？」
肩の刺し傷や、肉がえぐれた腹の傷などものともせず、男は自分の体に食い込んだ槍を引きぬくと、オブリッドと共に振り払った。床に投げ出されたオブリッドは、すぐに身を起こすと槍を拾い上げた。
「ユテラルドを殺させはしない」
「……手駒を、失いたくないか」
「そうだ。ユテラルドでなくては、バグラゲラは倒せん！」
「ならば……、心配するな。ここで、全てを終わらせてやろう」
大男が両手を天にかかげた。
「万物の母よ！　見ておられるか？　オレに力を与えよ！　命の最後の一片、お心を伝えるため、憎悪に燃やし尽くそう！」
『ダメッ！　止めてっ!!』
フォーリムとオブリッドが大男に飛びかかったが、突然、男の体が黄金色にかがやき、二人

を弾き飛ばした。
ユテラルドは渾身の力をこめて崩れそうになる体を引き上げると、槍先に冷気の刃をまといつかせ、一気に突きかかった。
黄金の光を切り裂きながら、穂先が男の胸に突き刺さる。
「無駄だ」
槍が二つに折れ、ユテラルドは弾き飛ばされた。抜き取れなかった斧が床にぶつかり、傷口に深く食い込んで激痛が走る。
石の床に爪をたてて斧を探るが、もはや自分の体がどうなっているのか、どうすればいいのか判らなくなっていた。
「ユテラルド！」
オブリッドがそばにいるようだったが、それすらもよく判らない。クレストが手の甲を焼いている気がした。
「万物の母よ！」
大男の全身から黄金色の帯が巻き起こり、部屋をなぶる。黄金の帯が触れたところがサラサラと砕けて消えていく。
『止めて！　消さないで、お願い!!』
フォーリムが狂ったように飛びまわり、ユテラルドの上に舞い降りた。
『ユテラルド……、しっかりして！　あなたしか……あなたしかいないの。このままでは、す

べてが消えてしまう……』

生命のエキスでユテラルドの傷口を癒していたオブリッドが、唇を噛みしめて崩れつつある部屋を見上げた。

「なんてことだ、このままでは、塔もろとも生き埋めだ」

フォーリムはユテラルドの頬に頭をすりつけた。

『ユテラルド……、シャルアミも死んでしまう……。お願い、私たちを置いて行かないで！』

——オイテイカナイデ

荒れ果てたストルタの村。焼け焦げた我が家の前には巨大なくぼ地が広がり、引き裂かれた木や壊れた家畜小屋が転がっていた。村の広場には血にまみれて動かない両親。難を逃れた村人が、こちらを遠巻きに見ている。

泣いている自分。何が起こったのか判らなかった。ただ、シャルアミがどこかへ消えてしまったことだけは、痛いほどよく判っていた。

息が詰まりそうなほど泣きじゃくりながら、人々の冷たい視線を浴びながら、ユテラルドは繰りかえした。

——シャルアミ、僕を置いていかないで！

イタミハ消サネバナリマセン。傷ツケルモノハ排除シナサイ

何かがユテラルドの中で切れた。

ユテラルドを担いで部屋から出ようとしていたオブリッドは、ユテラルドが身動きして起きあがろうとするのに気づいて声をあげた。

「じっとしていろ。ここは……逃げるしかない！」

ふいにユテラルドの重みが消えてつかんでいた腕がすり抜ける。驚いて振りかえったオブリッドの前に、宙に浮かんでいるユテラルドの姿があった。

「な……にっ？」

フォーリムが慌てふためいて、オブリッドの回りを飛びまわった。

『はやく、離れて!!』

「どうしたって言うんだ？　ユテラルドの……あれもパルミラの力か？」

『ちがうよ、あれは……、ああっ！　始まる！』

ユテラルドが猛然と大男めがけて宙を飛ぶ。部屋を砕く金色の帯を裂いて、大男に手刀を突き入れた。指先が食い込んだ部分に漆黒の球体が生まれ、次の瞬間、ボクリと肉が削り取られた。

「おのれも母の声を聞いたか？　ならば、母の望みも判ろう？　時は少ない。消し去るべきは

我ではないぞ！」
　大男は諭すようにユテラルドへ語りかける。ユテラルドは金色に輝く瞳で大男を冷たく見返した。
「……シャルアミを殺させはしない」
「おのれも迷い言を言うか!?」
　大男の顔が険しくゆがみ、拳がユテラルドの顔へ振り上げられる。ユテラルドも拳でそれを受け止めた。
「このまま、この国が朽ち果てれば、再生への道は閉ざされるぞ！」
「……俺には関係ない。俺が戦うのは、おまえが目障りだからだ」
「業深き者めが！」
　大男は怒りに体をふるわせ、ユテラルドへ殴りかかる。ユテラルドも男の懐に飛び込み、手刀をふるう。黄金と黒の光が渦巻き、部屋中を走りまわった。
　黒い雷が黄金の帯を食い破り、黄金の矢が黒い蛇を撃ち貫く。強烈な力のぶつかりあいに、部屋の石組みがゆるんで、次々と崩れ落ちる。
『オブリッド、ここにいちゃダメだよ。洞窟へ戻ろう！』
　部屋の戸口まで下がっているものの、そこから離れようとしないオブリッドの周囲を、フォーリムがじたばたと飛びまわる。この世の物とは思えない壮絶な戦いを食い入るように見ていたオブリッドは、フォーリムへ目をやった。

「あいつらは……なんなんだ？　おまえは知っているのか？」
『えっ？　……そ、それは……』
「あれがクレストの力なのか？」
『！』
　フォーリムがビクッと体を強ばらせる。それが十分答えになっていた。
「……あれが、この国を滅ぼした力なのか……」
『ち、ちがう……、って、えっと、ちがわなくないけど……、ユテラルドはちがうよ。ユテラルドは……きっと、守ってくれるよ。あっ、あぶない！』
　フォーリムに押されて、オブリッドはなだれ落ちてきた石の破片から身をかわす。
　二つの光は容赦なく部屋を破壊し、天井を破ると、地上へ向かって大穴を広げていく。千年の年月にもゆるがないと言われた初代王の建造物も、想像を超えた力の前ではなす術がなかった。
『あ……あ、ユテラルド、ダメだよ、このままじゃ塔が壊れちゃうよ！』
　フォーリムの声が聞こえたのか、ユテラルドは建物を蝕む黄金の帯を無視して、黒い雷をすべて男へ巻きつかせ、全身を覆い隠した。
　野獣の唸りをあげて、男は黒い蛇を振り払おうとする。内側から押されて黒い表面が風船のように膨れ上がるが、ユテラルドが突き出した片手を堅く握りしめると、再び男の体にしっかりと貼りついた。

対抗するように、黄金の帯がユテラルドへまとわりつく。黄金の帯は全身ではなく、ユテラルドの首と両腕だけに幾重にも巻きつき、堅く輪を狭めた。

ユテラルドは黄金の帯には目もくれず、手綱を引き絞るように拳を顔の前へ引き上げる。

大男と力比べをしている拳は小刻みに震えながら、顎の前まで持ちあがる。突然、男の片足が消えた。すぐにもう片方の足も消え、拳が目の高さまで上がると、二本の腕が虚空に呑まれた。

黄金の帯もユテラルドの首と腕をねじ曲げようとしている。開いた手の肩が背へズレ込んでひしゃげる。顎に巻きついた帯が首を折ろうと後ろへ引き寄せる。

苦痛に金色の瞳をギラギラと燃やしながら、ユテラルドは雄叫びと共に拳を頭上高く突き上げた。

黒い人型が空中の一点に吸い込まれ、部屋中にあふれていた黄金色の光が消えうせた。あおりを食らって宙に放り出されたユテラルドは、フラフラと部屋の中ほどまで降りてきたが、力を失って瓦礫だらけの床へ転げ落ちた。

『ユ……、ユテラルドッ!!』

フォーリムは、血を吐き、虫の息のまま倒れている青年の顔を覗きこんで、何度も呼びかける。瓦礫を踏みしめながら、ゆっくりと近づいてきたオブリッドへ振りかえる。

『オブリッド、早く生命のエキスを!』

オブリッドは表情を失った目で、瀕死の青年を見つめたまま、動こうとしない。

『オブリッド……、どうしたの？　早くしないとユテラルドが死んじゃうよ!!』

「これが……クレストの力なのか……、災厄(さいやく)を呼ぶ……呪(のろ)わしい力」

フォーリムは驚きに身をそらせると、オブリッドとユテラルドの間に割り込んだ。

『ユテラルドは味方だよ！　ユテラルドを死なせちゃいけないよ！　だって……、だってユテラルドは……』

フォーリムはユテラルドを振りかえり、翼(つばさ)でそっと髪をなでた。

『ゴメン……、ゴメンね、ユテラルド……』

オブリッドは唇を噛みしめ、倒れた青年から目をそらした。

第九章　シャドウタワー　魂(たましい)の浄化(じょうか)の道

ユテラルドは闇(やみ)の中へまっすぐ続く、赤い階段を登っていた。
物音一つ聞こえず、風もない。
ユテラルドは足を止めて周囲を見まわしたが、上も下も前後左右も、すべてが深く黒々とした闇に包まれている。見えるものは上下に続く階段だけだ。
俺(おれ)は……どうしてここにいるんだ？
ここへ来た理由を思い出そうとしたが、意味のある事柄(ことがら)は何一つ思い出せない。
ただ、上へ行かねばならないことだけはわかっていた。
ユテラルドは真(ま)っ赤(か)な階段を上へ向かって歩きはじめた。
ここはリューベーンなのだろうか？
妙(みょう)に滑(すべ)りやすい階段を、しっかりと踏(ふ)みしめて登って行く。赤い階段はとても滑りやすい。濡(ぬ)れているかのようだ。赤い……血に？
俺は何をしていたんだ？
小さく細くなって闇の中へ吸い込まれて行く階段をにらみつけて、ユテラルドは記憶(きおく)を掘(ほ)り起こそうとするが、濃(こ)い霧(きり)が覆(おお)っているかのように、よく判(わか)らない断片ばかりが脳裏(のうり)をよぎる。

その中に一つだけ、くっきりと浮かび上がってきたことがあった。
シャルアミを助ける。
シャルアミを助けるために、登らなくてはいけない。
ユテラルドは足を速めた。階段の上に四角い石組みが現れる。石組みは、淡い紫の光に照らされた、正方形の床だと判った。
ユテラルドは床の端に立って周囲を見まわした。床の四方は底知れない闇に包まれているが、一辺には黒い柱のアーチと、暗闇の中へまっすぐ伸びる赤い道……虚空に浮かぶ橋のように見える通路があった。
ユテラルドは赤い通路へ近づく。アーチの中に、金色の光が現れた。
『ゴメン……、ゴメンね、ユテラルド……』
「フォーリム？」
金色の鳥がゆったりと羽ばたいている。
「フォーリム、ここはどこだ？」
『クレストなんて欲しくないよね？　クレストのせいで大事な人が傷つくなんて、悲しいよね？』
「フォーリム？」
『ユテラルドは、クレストをどうしたい？』
「おい、俺の言ってることが聞こえていないのか？」

『ボクはクレストなんて大嫌いだよ。こんなもの、なければよかったんだ。クレストを持つ人間なんか、いなくなってしまえばいいんだ』

ユテラルドが近づくと、フォーリムの姿は、水面の影が波紋でかき消されるように、ゆれて空中に溶けてしまう。後には沈黙だけが残る。

「ここは……どこなんだ？」

『ここは《塔》の影』

いつの間にか、橋の上にメリダが立っていた。

『魂の浄化の道』

女神官はユテラルドへ背を向け、橋の上を遠ざかっていく。ユテラルドは後を追った。

「俺は塔にたどりついたのか？　シャルアミはどこなんだ？」

『私はなにも知りません。私はただ、大いなる母の御技をお教えするのみ』

手すりのない橋の上を、メリダは足早に進んでいく。ユテラルドが追いかけようとするほど、メリダはますます先へ行ってしまう。

「待ってくれメリダ！　シャルアミの居場所を教えてくれ！」

『クレストを恐れているあなたに、なにができるのですか？』

「なにっ！」

メリダは闇の中に姿を消す。

「クレストを……恐れている？　俺が？　ちがう、俺はクレストを恐れてなどいない。憎いだ

けだ！」
　ユテラルドの叫びは闇の中に吸い込まれてしまい、こだますら返ってこない。
『塔を上へ……、声を……なさい』
　女神官のかすかな声が届き、痛いほどの静けさが戻ってきた。
　橋はやがて、先刻と同じ、空中に浮かんだ床に行きついていた。ただ、目の前にある新しい正方形の床の中央には、上へ伸びる白い光の階段があって、登り口を重々しい大きな鉄の扉が塞いでいた。
　扉から少し離れたところに、ボロをまとった老人が岩にこしかけて、ぼんやりとしている。
「ナファト王？」
　老人は顔をあげ、ぼさぼさの髪の間からユテラルドを見つめていたが、驚きに目をむいて岩からとびのいた。
『クレスト！　近づくな！　これ以上、わしとわしの国を苦しめるなっ！』
　老人は泡をくって床の端まで後ずさる。ユテラルドは彼を無視して、鉄の扉に手をかけた。王家の紋章が刻まれている扉はびくともしない。
　ユテラルドは重い気持ちで、怯えている老人を振りかえった。
「ナファト王、この扉の鍵を貸してはもらえないか？」
『わしを殺すつもりじゃな！　そうはいかん。リューベーンは誰にも渡しはせんぞ』
「鍵を貸してほしいだけだ。俺に近づきたくないのなら、そこから投げてくれればいい」

『ならん！　その門はわしの城に通じている。国賊を通すわけにはいかん！』
「しかし、俺は上へいかなくてはならないんだ」
『よ、よるなっ！　呪いの烙印めが……う、うわあぁぁぁ……！』
後ずさった老王の足が床をふみはずし、駆けよる間もなく床の端から姿を消した。悲鳴はすぐに聞こえなくなり、ユテラルドが覗き込んだ先には、しずかな闇がたゆたっているだけだ。
後味の悪さに肩をおとして、ユテラルドは扉の前まで引きかえした。手をかけてゆすってみるが、やはり開かない。
他の道がないか、周囲をみまわしていると、扉が押し開かれた。
扉の向こう側にオブリッドがいて、扉に手をかけている。
『バグラゲラを倒さねばならない。行くぞ』
オブリッドは光の階段を登っていく。ユテラルドは慌てて後に続いた。
「オブリッド、シャルアミはどこだ？」
『さあな。俺が追っているのはバグラゲラだ』
「どうしたんだ、シャルアミのことを心配していたんじゃないのか？」
『無駄口を叩くな。おまえはクレストを持っている。パルミラ武具が扱える。だから連れて行くだけだ。黙っていろ』
「……オブリッド！」
ふいに、目の前に広々とした草原が広がった。枯れて黄色や茶色に変色した草が、風もない

のにザワザワと波打っている。
『バグラゲラの手駒が来たぞ。戦え！』
いつの間にか、前に立っていたはずのオブリッドの姿が消えて、背後から声がする。
頭上、はるか高くから小さな人影が落ちてくる。仮面のように無表情な少年が、ユテラルドの目の前でふわふわと揺れると、片手をかかげて光の球を放った。
横へ飛んでかわしたユテラルドは、武器はおろか、鎧も身につけていないことに気がついた。
「オブリッド！　武器はないか!?」
次々と放たれる光をかいくぐりながら、ユテラルドはオブリッドに問いかける。
『クレストの力を使ったらどうだ？　大地をえぐり、人間を消し去ることができるんだろう？見せてみろよ』
ユテラルドの背に悪寒が走る。オブリッドは薄笑いを浮かべながら、目の前の戦いをながめているだけで、腰に下げた剣を抜くそぶりも見せない。
「オブリッド、なぜ……？」
『クレストを持っている人間など、いなくなるべきだ。生きていればいつか、災厄をまねき、多くの人間を死へ導くのだからな。殺しあって消えてくれれば好都合さ』
愕然となったユテラルドの首を、がっしりとした手がしめつける。
つかみかかっているのは少年のはずだ。目を見張るユテラルドの前で、少年の姿が伝説の傭兵……《赤い疾風》に変わった。

『憎悪の炎にて、すべてを滅ぼすのだ』
「だ……めだ」
『なぜだ？　おまえも憎しみに溺れ、多くの者を手にかけてきたではないか』
「く……！」
『おまえはクレストへの憎しみを、多くの命へぶつけてきたのではないか？　憎悪ですべてを破壊しつくそうとしたのではないのか？』
「俺……は……」
　血に染まり、倒れ伏すモレアの民。ビリヤナの森に音をたてて燃え広がる炎。
「俺が……災いを招く存在で……ある……なら、自分の……意思で……災いの地を……死地を……選び……たかっ……た！」
『ならば、ここそが、おのれの死地だ！』
「だめだっ、シャルアミを……」
『まだ言うか！』
　太い指が喉仏にくいこむ。ユテラルドは男の腕の間に拳をねじこみ、組んだ両手で男の手を叩き伏せると、腹を蹴って後ろへ跳んだ。
　荒い息をつくユテラルドを、大男は平然と見下ろしている。
　反撃の糸口を探っていたユテラルドの足に、なにかがからみつき、素早く這いあがってくる。
足元へ視線を落すと、黒い蔦がユテラルドの足に巻きつき、ぎりぎりと締め上げていた。

急に地面が柔らかくなり、ユテラルドの足が蔦に引き寄せられるまま、少しずつ草原の中に沈みこむ。

大男は腕を組み、黙って引き込まれて行くユテラルドを見つめている。オブリッドを振りかえったユテラルドは驚きに声をあげた。

「オブリッド、後ろを見ろ！」

オブリッドの両肩に白く細い腕を回して、皇女が夢見るような表情で微笑んでいる。赤い花びらをまといつかせた腰から下は、黒々とした蔦がうねっている。

『オブリッド、私がこんな姿になったのは、クレストのせいなのよ』

鈴がころがるような可憐な声で、すねたように言うと、皇女はオブリッドの肩へすりよる。

オブリッドは皇女へ優しい目をむけた。

『そうだ。クレストがなければ、アルクレストも造られなかった』

黒い蔦の間から、無数のささやき声があふれ出てくる。

『あいつがクレストなんか持っているから……』

『一粒種だからって……、あんな子供、間引いてしまえばよかったのに』

『近づいちゃいけない。呪われるよ』

『家畜が死んじまう。近づかないでおくれ』

『あの子が疫病を運んできたんだよ』

『さすがは死神だな』

『こいつを敵陣に放り込めば片づくんじゃないのかよ』
『クレストを持つ者に、領土など与えたら、領民があわれだな』
『疫病神を雇う気なんてないね。帰ってくれ』
『人のいい顔して近づいて、あとで皆殺しじゃないのか？』
『私の子に近づかないでっ』
「や……、やめろっ！」
ユテラルドはもがき、這いずりながら、黒い蔦のうねりから逃れようとするが、蔦はますます数を増して腹から胸、顔へと迫り寄せる。ささやきも大きくなり、繰り返しユテラルドに罵声をあびせかける。
「俺は……何もしちゃいない！」
叫び声をあげて蔦をかきむしる。オブリッドと皇女、傭兵は、薄笑いを浮かべて見下ろすだけだ。ユテラルドは絶叫した。
「俺だって、好きでこんなものを持って生まれたんじゃないっ！　消せるものなら消してくれ！」
『ならば、その腕、落してやろう』
双頭の斧を手に傭兵が進み出る。ユテラルドは怒りに燃える目で男を見上げ、右手を差し出した。
「やれ！　そんなにクレストが憎いなら、どこへでも捨ててくるがいい！」

傭兵が斧をふりかぶる。ユテラルドは汚れた刃先をしっかりと見つめた。
もっと早く、こうすればよかった。生まれた時……、物心ついた時……、せめてシャルアミを消してしまう前に、この手を捨ててしまえばよかったのだ。
何かが風を切って傭兵へ襲いかかる。鈍い音をたてて矢が男の目に突き刺さった。くぐもった呻き声をあげてよろめいた傭兵の姿がかき消える。
『きゃあああっ！』
『リスムル？　くあああっ！』
振りかえると、胸と喉元に矢を受けた皇女とオブリッドの姿がかすれていく。矢羽が教えてくれた先を見ると、山道の途中に立っている紅い髪の娘が、弓をおろすところだった。
「シャルアミ……！」
枯草を蹴り散らかして、ユテラルドは山道を駆け上る。シャルアミが弓を構えた。
『来ないで！　また私を消すつもり？』
矢じりの向こうから見据える冷たい眼差しに、ユテラルドは足を止めた。
「シャル……アミ……？」
『よくも、私を殺そうとしたわね。あれだけ、世話をやいてあげたのに』
「……ちがう、そんなつもりじゃなかった」
『間違いだったって言いたいわけ？　間違いで私を殺そうとしたの？』
弓の弦が鳴り、とっさに身をかがめたユテラルドの髪をかすめて矢が通りすぎた。

『どうしてよけるの？　私はよけるひまもなかったわ』
憎々しげに言いはなって、シャルアミは矢をつがえる。
『……そうよね、自分の身がかわいくて、あんなことしでかしたのよね』
ユテラルドは言葉を失い、小さく首を振る。二本目の矢が放たれ、重い音をたてて肩に突き刺さる。ユテラルドは歯をくいしばった。
『どう？　また、私を消したくなった？』
表情を変えずにシャルアミは次の矢を引き絞る。
「シャル……アミ……、俺は……あんなことをするつもりじゃなかったんだ。ただ……どうしようもなく怖かったんだ」
『死ぬのが怖かったの？　私も怖かったわ』
三本目の矢が脇腹に突き刺さる。苦痛の吐息を吐いて、ユテラルドは膝をついた。
『あなたは、自分が死にたくないから、私を死神に差し出したのよ』
「シャルアミ……、ゆるしてくれ……」
ユテラルドはうなだれ、乾いてひび割れた大地に手をつく。冷たい声が投げつけられた。
『どうやって償うつもり？』
「……それは……」
『あの時と同じように、自分を消してごらんなさい』
「……すまない」

『できないの？　だったら、私に殺されなさい』

「…………」

ユテラルドは顔をあげ、よろめきながらも立ちあがった。静かな目でシャルアミをみつめ、胸をはる。

「俺の命は、シャルアミに救われたものだ。……好きにしてくれ」

憎しみに染まったシャルアミの顔をしばらく見つめて、ユテラルドは目を閉じた。

シャルアミになら殺されてもいい。

それだけのことを、俺は仕出かしてしまったのだから。

不思議と心が軽くなる。

熱い雫（しずく）が目頭から頬を伝って流れ落ちた。

涙（なみだ）？

シャルアミが消えたあの日に枯れるほど流してから、一度も流すことがなかった涙があふれ出る。

これでいいんだ。

ユテラルドは静かな思いで最後の一撃（いちげき）を待ちうける。

だれかの声が響（ひび）いた。

——そこにいる《彼女（かのじょ）》が、あなたの知る《彼女》なら、そのようなことを言いますか？

ねぇ、ユテラルド。古い言い伝えでは、クレストは神さまが自分の子供たちを見守るためにつけてくれた、お守りだって言われてたんだって。私はそっちが本当のことだと思うな。もしもね、ユテラルドがクレストのせいで危ない目にあったら、私が助けてあげるね。ほら、そんな顔しないで。……誰よりも、ユテラルドが一番、クレストのせいで傷ついてる。だから、何かあっても、それはユテラルドのせいじゃないよ。クレストを恐(おそ)れさせるようなことをする人たちが悪いんだもの。私は、どんなことがあってもユテラルドを信じてるよ。だから安心して。私を信じて。

　懐(なつ)かしいシャルアミの声。やさしかったシャルアミ。でも、あんな恐ろしい目にあって、彼女もクレストを……俺を憎んでいるだろう。

――あなたを信じている心を信じなさい。

――目を開き、しっかりと真実を見なさい。さあ、早く！

　ユテラルドは目を見開き、矢を放とうとするシャルアミを見すえた。

　ぐにゃりと彼女の姿がゆがみ、その向こうに得体の知れない影が蠢(うごめ)く。ユテラルドは岩陰(いわかげ)へ飛び込んだ。

矢がかすめ飛ぶ。
ユテラルドは脇腹に突き刺さっている矢を引きぬいた。
『どうして逃げるの！』
シャルアミの仮面をかぶった者が怒りの声をあげる。肩に刺さっていた矢をにぎりしめて、ユテラルドは岩の間をシャルアミの偽者へむかって走りよる。四本目の矢がつがえられたのを見て、わざと立ち止まって誘いをかける。放たれた矢をかいくぐり、つかんだ矢を仮面の顔に突きたてた。
仮面にヒビが走り、それがシャルアミの姿を越えて、風景にまで走っていく。
細かく砕け散ったシャルアミの向こうから、バグラゲラが顔をのぞかせ、笑い声をあげた。
『ヒョッヒョヒョ、クレストは世界を滅ぼすのじゃぞ』
「バグラゲラッ、きさま！」
『《サイクル》は、滅ぼされ閉ざされた世界を開放する鍵。かならず、この手に収めてみせるわい』
バグラゲラの姿は闇の中をみるみる遠ざかっていく。
砕けていく風景の中で、曲がりくねった細い山道だけが、かろうじて持ちこたえていた。ユテラルドは山道を駆けあがり、頂上に見える巨大な光の柱をめざす。
再び、あの声が聞こえた。

――すべては、より良き道への苦難なのです。

巨大な光の柱に近づいたユテラルドは、それがまばゆい光を放つ大樹であることに気がついた。白い幹は、これまでに見たどんな樹木よりも太く、枝が無数に天目指して伸びあがり、竜の目を思わせる金色の果実がたわわに実っている。

大樹の下まで登りきったユテラルドは、大樹の幹へ寄り添うように立てかけられている、大振りの剣に気がついた。

黄金の柄と握り手には真紅と深緑の貴石が輝き、幅広の刃の全てがすきとおった乳白色で、おだやかな青い光に満ちている。

月光晶の剣？

剣が宙に浮かび上がった。ゆっくりと刃先を上へ向けて上昇する。

剣が指ししめす先に、一つだけ銀色の実がなっている。

その実が大きく膨らみだし、ユテラルドへ向かって迫りよせる。波打つ表面の向こうに、どこかの部屋らしい風景がうつっている。

ユテラルドの意識が途切れた。

第十章　天衝く柱　ビリヤナの実の芯をなすもの

軽やかな小鳥のさえずりにユテラルドは目を開いた。
白い天井が見える。
全身が柔らかな物に包まれていることに気づいて目をおろすと、白いシーツと濃赤の掛布が体をおおっている。自分が大きなベッドに寝かされているのだと理解したユテラルドは、首を曲げて光と風が来る方へ顔をむけた。
小さな窓にかけられたベージュ色のカーテンが、陽の光に白く染めあげられて風に揺られている。その向こうには貴族が好みそうな金の装飾が施された長椅子と、背もたれに刺繍が施された一人掛けの椅子がならべてあり、少し離れたところには磨き上げられた鏡台があった。
部屋の壁には、薄紅色の壁土が塗られており、凝った装飾のランプが照明に必要な数以上置かれている。
人の気配はなく、聞こえるのは鳥の声と風に揺れるカーテンの衣ずれの音だけ。
ユテラルドは傷を負ったはずの脇腹に触れてみた。包帯が指先にあたる。布越しに探ってみたが傷はふさがっているようだ。身動きすると左肩に痛みが走った。左肩にも包帯が巻きつけてあり、薬草の匂いが鼻をつく。

起きあがろうとしたユテラルドは、ベッドの柔らかさにとまどった。枕もマットレスも掛け布団も、刈り取った羊毛の山のように、ふわふわとユテラルドを呑み込もうとする。
やっとの思いでベッドから降りると、床に敷きつめられたくすぐったいほど毛足の長い絨毯が、足の裏をやわらかく受け止めた。
「どこだ……ここは？」
ユテラルドは窓へ近づいて外を見まわす。
窓は垂直の崖のような所に開けられた穴だった。青い岩肌の絶壁の下には、荒れ果てた岩山と突き出した岬、そして真っ青な海が広がっていた。
海は本当の水平線がある場所よりも、ずっと手前でぼやけた壁のようなものに断ち切られている。ぼやけた壁を上へ追っていくと、緑色の空へ溶け込んでいた。
岩山の端に街並と、見覚えのある石造りの建物……メリダがいた神殿が見える。
ユテラルドは小さな窓から身を乗り出し、肩の痛みに耐えながら上を見上げた。
青い岩肌の崖は、まっすぐ天へ伸び、雲をまといつかせながら緑の空に突き刺さっている。
これは《塔》だ。
辿りついたのだ。しかし、この部屋の正体はわからない。窓から身を戻したユテラルドはドアの開く音に身構えた。
「……起きていたのか。ケガの具合はどうだ？」
半開きになったドアの向こうにオブリッドが立っている。彼はついてくるよう身振りして戸

口から退がる。ユテラルドは続いた。
そこは広々とした居間だった。細密な模様が織りこまれた絨毯の上に、華やかな色合いの長椅子と重厚なテーブル、壁には幅の広い暖炉と飾り棚が造りつけてあり、家具の合間には絵が所狭しとかかげられている。
大きな机の上にはユテラルドの鎧と武器が揃えておいてある。
「この部屋の住人に直してもらってある」
ユテラルドの視線に気づいたオブリッドが教える。
窓際には、背の高い燭台とそろいの形の鳥かごが、暖かな光の中で金色に輝いていた。籠の中の鳥が嘴を大きく開き、美しい旋律を奏でる。その下の陽だまりでは、ぶち模様の猫がだらしなく寝そべっている。
オブリッドは、じゃれついてくるもう一匹の茶色い猫をあしらいつつ、居間を横切って向かいの扉をノックした。
「メディナ、彼が目を覚ましたが、どうする？」
扉の向こうからの声はユテラルドには聞こえない。オブリッドは耳をかたむけたままうなずくと、ユテラルドを振りかえる。うながされるまま、ユテラルドは次の部屋へ踏み込んだ。
さっきの明るい部屋とは対照的に、青白い光に照らされた小部屋は薄暗く、剝き出しの石壁に囲まれた奥に、淡い褐色の円柱に支えられた小さな東屋のような檻が、紫色の燐光を放っている。檻の中央に、灰色のドレスをまとった金髪の女性がたたずんでいた。

「俺たちをかくまってくれた恩人だ。失礼なまねをするんじゃないぞ」

オブリッドに背を押されて進み出たユテラルドへ、檻の中の女性は、おっとりと微笑みかけた。

「このような所でごめんなさい。あと一刻たてば出られるのですけど、早く、あなたとお話ししたかったものだから」

「俺たちを助けてくれたのか？」

「ええ。あなたがユテラルド……、シャルアミが話していた男の子だったから」

「シャルアミを知っているのか？　あんたは何者なんだ？」

「私はメディナ。……バグラゲラの孫です」

「なにっ!?」

「私は……あなたたちに詫びねばなりません。私は、お爺さまがこれ以上、人を苦しめないよう止めてもらいたくて、シャルアミにお爺さまの研究室への道を教えてしまいました……」

メディナと名のった女性は目を伏せた。

「シャルアミは、シエナと言う女性を助けようとしてここまでやってきました。彼女がシエナを助け出せるなら、いっしょにビルホルゴも助けてくれることを願っていたのです」

「バグラゲラは、クレストとアルクレストで何をしようとしている？」

「……お爺さまが、この恐ろしい研究に手を染めたのは……私のせいなのです」

メディナはドレスの袖をたくりあげ、二の腕をさらした。ほっそりとした白い肌の上にアル

クレストが薄紫の光を浴びて輝いている。

「私が今こうやって生きていられるのは、アルクレストとこの装置のおかげなのです」

メディナは自分を取り囲んでいる檻を見まわした。

「これがなければ、私の体はすぐに弱ってしまい、内側から死んでいってしまいます。お爺さまは、ビリヤナの樹の生き物に反応して、周囲の植物を繁らせたり枯らしたりする能力を見つけて、それが《あらゆる生命を操る力》に通じているのだと考えました。そこでビリヤナの樹、そして樹液からできるパルミラを研究するようになり、パルミラをあやつるクレスト、クレストからアルクレストを創り出しました。お爺さまは、私の体を再生させるアルクレストを求めているのです」メディナは小さくため息をついた。

「それが実現したならどんなに嬉しいでしょう。でも、だからと言って、ビルホルゴや彼のお母さまが苦しむなんて……」

「ビルホルゴもクレストを持っていて、それで……」

「いいえ、彼はクレストを持っていません。彼とはしばらくの間、ここで一緒に暮らしていましたから、はっきり言えます。ビルホルゴは、本当にごく普通の元気のいい男の子でした。元気がありあまって、よく私の猫たちを追いかけまわしては、引っかかれていたんですよ」

その情景を思い返したのかメディナは顔をほころばせる。が、すぐに笑みは消えてしまった。

「でも、ひと月もたたないうちに、お爺さまが連れていってしまいました。『クレストを持つ親鳥を誘い出すために必要だ』と言って……」

「止めなかったのか？」
ユテラルドの問いに、メディナは身を縮めると両手で顔を覆いかくした。
「お爺さまに逆らうなんて……私にはできません。この装置を止められたら、私は死んでしまいます。昔のお爺さまなら、そんなことはしないと信じることができたでしょう。でも、今のお爺さまは……私が苦しんでいても、平然と見捨ててしまいそうで……恐ろしいんです」
「……だから、シャルアミに任せたのか」
「ええ。でも、最初は止めたのです。たった一人で行くなんて、あまりにも無茶だと。そうしたら、シャルアミは自分の気持ちを話してくれました。自分の村にも右手にクレストを持つユテラルドという少年がいたこと、クレストのせいでいわれのない罪を負わされて苦しんでいた彼を、守りきることができなかったこと。だから、右手にアルクレストを持つビルホルゴを見ると、ユテラルドを思い出して辛くなる。せめて、彼とシエナだけでも助ける努力がしたいのだと……」メディナは重く息をつぐ。
「私には止められませんでした。だから、何の変化もない日々が過ぎるにつれて、彼女は殺されてしまったのではないか、どうして止めなかったのか、ずっと悔やんでいました」
「悔やむことはない。いくら止めてもシャルアミは行っただろう」
ユテラルドの言葉にメディナはハッと顔をあげる。銀髪の青年はおだやかな目でメディナを見上げていた。
「そういう人だ。彼女は」

「……ありがとう」メディナは表情をやわらげ、目尻を小さくぬぐった。
　ユテラルドは暗い部屋の天井をふりあおぐ。その目はさらに高いところを見すえていた。
「シャルアミたちはどこにいるか判るか?」
「おそらく、最上層にあるお爺さまの研究室か、その近くだと思います。……数多くいたはずの研究員の方々の姿が見えなくなって、この塔のほとんどの場所は無人になっていますから、監視の目が行き届くのはそこだけだと……」
「どうやって行けばいいか、教えてくれ」
「ええ。でも、もうしばらく待っていただけますか?《命の光》を吸収するには、まだ時間がかかってしまいますから」
「ここでは聞けないほど、道のりは複雑なのか?」
「いいえ……。私はシャルアミを見送ったあと、ずっと後悔していました。だから……こんどは一緒にいきます」
　それまで黙って二人の会話を聞いていたオブリッドが、声をあげた。
「君はバグラゲラを恐れているんじゃないのか?」
「ええ……、でも……、研究室のそばまでなら問題ありません。言葉でお教えするよりも、ずっと確実なはずです」
　メディナは真剣な眼差しで二人を見つめた。

居心地がよく温かみのあるメディナの部屋から出ると、外の通路の寒々しさが身にしみる。《塔》の通路や部屋は岩をくりぬいて作られており、外観と同じ青みを帯びた岩でできている。通路をみまわしていたメディナはため息まじりにつぶやいた。

「あの方は戻ってこられないようですね……」

「あの方？　誰かいるのか？」

メディナの言葉にとまどっているユテラルドに気づいたオブリッドは、なぜか視線をそらしたまま言葉をつないだ。

「伝説の傭兵との戦いで倒れたおまえと俺を、助けてくれた男がいる」

「そうだ、あの大男はどうなったんだ？　俺は斧を食らって倒れて……それからどうなったんだ？」

得体の知れない不安に、ユテラルドは身震いした。

「金色の波みたいなものを見たような……気がする。誰かが、止めろと叫んでいて……俺は……、俺は……あの時……何をしたんだ？」

「おまえは赤い疾風との戦いで、瀕死の重傷を負って気を失ったんだ。そこへ、見知らぬ男がきて、あの大男を倒して俺たちを助けてくれた。それだけだ」

とぎれた記憶を探ろうと、眉をひそめて考え込んだユテラルドへ、オブリッドが強い口調で言い放ち、驚いて口をはさもうとするメディナをさえぎって喋りきる。

「むりに思い出そうとするな。もう終わったことだ」

「ああ……」釈然としないまま、ユテラルドはうなずく。
「ただ、あの男を見た時に、なにか気になったことが……、そうだ《魔人》だ！」
顔をあげたユテラルドはメディナへ顔をむけた。
「《魔人》を知っているか？」
「《魔人》？　……聞いたことがあるような……、たしか、クレストの実験に関する覚え書きで読んだような気がします。記録書類が保存されている部屋へ行ってみますか？　シャルアミに教えた道は避けようと思っていましたから、ちょうどよいかも知れません」
そう言うと、メディナは先に立って歩き出した。
通路の脇にはいくつか人が暮らしていた形跡の残っている部屋があったが、どこも厚くほこりをかぶっており、庭がわりになっていたらしい大き目の広間は、枯れた木と草が残るだけだ。
「古い研究所からここへ移ってきたばかりの頃は、お爺さまの手助けをする方々がここで暮らしていました。私も自分の命を支えてくれているパルミラやアルクレストに興味がありましたので、よく、彼らの研究室をおとずれて話を聞いていました。でも、そのうち研究所で行われている実験の内容に気がついて、研究室からは遠ざかり、書物や書類を読むようになりましたが……、それもすぐに止めてしまいました」
通路の脇に、上へいく階段と、下へいく階段があったが、メディナはまよわず下への階段に向かう。階下からはひんやりと冷たい空気が吹いてくる。
「下にはモンスターがいますが、私のそばから離れなければ大丈夫です」

「君を見分けられるのか？　バグラゲラも化け物をうまくし込んだものだな。まぁ、自分で作ったものだったら、それぐらいできるのは当然か」
オブリッドが感心する。メディナは困った顔で彼を見上げた。
「あちこちに出没（しゅつぼつ）していると言われているモンスターは、どこからか現れたもので、お爺さまのせいではありません。原因がわからなくて、お爺さまも研究員の方々も、とても困ってらしたし、実際に被害にあわれた方もいらしたそうです。私がモンスターに襲（おそ）われないのは、この服に呪術（じゅじゅつ）が施されているからなのです」
「だが、理由（わけ）もなく化け物が涌（わ）いて出てくるなど、信じられない話だ。きっとバグラゲラが裏で……」
いいつのったオブリッドは、悲しげなメディナの瞳（ひとみ）に気づいて言葉を呑みこみ、あわててつけくわえた。
「あ……、いや、推測だけで決めつけてすまなかった」
目をそらしたメディナは肩を落して首をふった。
「いいえ、王家の方にとっては、お爺さまも私も、逆賊（ぎゃくぞく）であり憎（にく）い仇（かたき）ですもの。……どうすれば、それを償（つぐな）えるのか、私にはわかりませんが……」
階段を降りた先には扇形（おうぎ）の広場があり、ユテラルドが老王を助けるために戦った化け物にそっくりなやつが、数匹、うろうろと歩き回っている。
「私に……ついてきてください」

声をつまらせながらも、メディナは広間を歩き出す。三人に気づいた化け物が近づいて来るのを見て、ユテラルドとオブリッドは剣を抜く。だが、化け物はふいに立ち止まると、きょろきょろと辺りを見まわして歩き去ってしまった。

扇形をした広間の短い直線の壁に、飾り気のない大きな扉があるが、取っ手がどこにも見当たらない。

「これがスイッチになっていて、樹のパルミラで開きます」

メディナは扉から少し離れた壁にある樹木のレリーフへ歩み寄ると、腕に通していた輪の一つを抜いてレリーフへ軽く打ちつけた。

緑の光が広がってレリーフの木の葉を輝かせる。重い音とともに扉が開いた。扉の向こうには机が整然と並べられており、周囲の壁を書棚が埋め尽くしている。

背後を振り返って、扉が閉まるのを確認したメディナは、書棚の一つに歩み寄った。

「確か、緑月の欠けたる半の日のあたりだったはず……」

書類をはさみこんである板の日付を覗きこんでいたメディナが、一つを手に取って抜くと机の上に広げて手早くめくっていく。

「これじゃありませんか？」

几帳面そうな文字がびっしりとならんでいる紙を一枚引き出してユテラルドへ見せる。顔を近づけたユテラルドは首を振って顔を上げた。

「俺にとって、リューベーンの公用語は古代文字だ。読めない」

代わりに取り上げたオブリッドは顔をしかめた。
「これは貴族間の親書じゃないか。バグラゲラには筒抜けだったと言うことか……。なに？　『……我等が帝国は、存亡の危機をむかえた。研究所の勝手な研究がクレストから魔人を生み出し、我々はここに閉じ込められた。そして、魔人が生み出した魔物によって多くの帝国民が殺されてしまった。帝国再建のために今、我らは戦わねばならない。』ああ……、そう言えば王の元で読んだことがあったな。結局、魔人が何なのか誰も知らず、戯言として片づけられた話だ」
「待って、こちらに補足があります。『魔人――王侯貴族が魔人と呼んでいるものは、クレスト所有者の化身のことと思われる。トレド壊滅の時、クレスト所有者の女の体が変貌、体色は黄金、外見は鳥の形状になったと報告されている。また、他のクレスト所有体への実験中に、同様の体色の変化、体格の強化、体軀の変貌が確認されている。』……まだ補足がありますね……『紫の月入りたる日に補足。バグラゲラ所長により、この変貌をフォーリム化と命名。』」
「フォーリム？　魔人になることを、フォーリム化と言うのか!?」
ユテラルドの叫びに驚いて顔をあげたメディナは、虚空をにらみつけているユテラルドと、そんな彼へ暗い目を向けているオブリッドを見つけてうろたえた。
「あの……、それが何か？」
「フォーリムと名のる黄金の鳥が、俺たちに同行していたんだ」
オブリッドがぼそりと答える。ユテラルドは何かをつかもうとするように、拳を開いては握

りしめる動きを繰り返す。

「俺に『魔人を倒してくれ』と言ったのはフォーリムだ。じゃあ、あいつは自分を殺せと言ったのか？　いや……だったら、他の言いかたがあったはずだ……」

「……魔人、つまりフォーリム化するクレスト所有者は一人とは限らないぞ」オブリッドは眉をひそめてユテラルドを見つめる。

「では、あの伝説の傭兵が《魔人》だったのか？　だが、フォーリムは《魔人》を倒せば自分の本体は自由になれ、俺は外へ戻れると言っていた。……ウソなのか？」

「あの化け物を、どうして信用するんだ？」

「あいつは……何度も俺たちを助けてくれた」

「……利用したいがためかも知れんぞ」

　ユテラルドは暗い表情を見せるオブリッドを見つめた。

「オブリッド……、どうしたんだ、何をそんなにいらだっている？」

厳しい目でにらみつけるオブリッドの顔に、かすかに違う表情がよぎる。ユテラルドは、それの意味を読み取っていた。

「オブリッド……、俺を信用できないのなら、メディナと一緒に残ってくれ」

「なにっ！」

「軍を率いたことがあるのなら、不和がどれほど危険か判るはずだ。バグラゲラを倒し、必ず皇女を元に戻す方法も手に入れてくる。信用できないかもしれないが……な」

侮辱ともとれる言葉にオブリッドは怒りに顔色を変えたが、どうにか怒りを噛み殺すと、ゆっくりと口を開いた。
「……俺一人が残って何になる？　残っているのは腑抜けの王と兵士が一人ずつ。パルミラ武具も使いこなせない俺一人では、化け物が数体、襲ってきたらおしまいだ。おまえが、俺にとって最後の切り札だ。後はない」
「俺を利用するのだな？」
「そうだ」
ユテラルドは表情をやわらげ、大きくうなずいた。「その方がいい。気の合わない相棒よりは、傭兵の方が落ちつく」
突然のことで呆然としているメディナを振りかえって尋ねる。
「フォーリムと言う言葉については、何か知らないか？」
「いいえ、でも、これを調べれば……」
メディナは違う書棚に顔をよせて、一冊の本を取り出してページをめくっていく。しばらく文字を追っていたが、ぱたんと音をたてて閉じた。
「そこに書かれていることと、変わりないことしか書いてありません。クレスト所有者の化身。強大な破壊力を秘めているらしい……としか」
「では、《サイクル》は？」
メディナは再びページをめくりはじめたが、その書物にはみあたらなかったのか、別の一冊

に取りかえて、探しつづけ、一ヶ所で指をとめた。

「『サイクル――万物流転の流れを指す。ビリヤナの実に秘められた力の源は、現時点でもまったくわかってはいない。果実の中に種をもたず、若木や老木の姿が目撃されたことがないにも関わらず数が増えたり、存在していなかったはずの場所にさえ忽然と現れるビリヤナは、サイクルの外にある特別な物と位置づけられている。しかし、ビリヤナにも生成、消滅の法則があるはずだとの意見もある。』……これですか?」

「ビリヤナのことしか書いてないのか? 人については?」

「……ビリヤナについてだけです。どうかしたのですか?」

「バグラゲラが、シャルアミのことを《サイクル》と呼んだことがある」

「シャルアミを? 《サイクル》は法則のことですから、個人を指すような言葉ではないのですが」

「そうか……」

「他にはなにか?」

ユテラルドはオブリッドを振りかえったが、金髪の青年は頭をふった。

部屋を出たメディナは、塔の外周に沿ってなだらかに湾曲する下り階段へ足を向ける。オブリッドは眉をひそめた。

「バグラゲラは上にいるのだろう?」

「ええ。ですから、この下から研究所間で連絡用に使っていたゴンドラに乗ります。それで上

までいけば、あとは階段を数階分、登るだけですみます」
「なるほど。確かにこの高さを地道に登るのは骨がおれるだろうからな」
「普通の階段ですが、歩いていけるのは途中までです。塔の中は、最下層、中層、最上層だけが、建物としてくりぬかれただけで、他の場所はほとんど手つかずなのです」
「最上層？　まさか、バグラゲラがいるのは、この塔の頂上か？」
「はい」
「あきれたものだな。神さまにでもなった気か？」
「……よくは判らないのですが、この塔の頂上は外に最も近く、《サイクル》の……」
サイクルと口にしたメディナは、ハッとなってユテラルドの顔をみつめた。
「この国を捕らえた《サイクル》を解き明かす、一端を得られる場所だという話でした」
「《サイクル》が我が国を捕らえたというのか？」
「そう聞いたおぼえがあるのですが……、自信はありません」
長い下り階段を降りている途中から、下の階にある奇妙な柱が目についた。等間隔に並んだ四本の円柱が、各々、赤、緑、青、白の光を放っている。その奥の壁には、やはり取っ手のない扉がある。
「……変わってなければいいのですが」
メディナは色のついた光を放つ柱の前に立ち、樹のレリーフの前でやったように、腕にかけた輪を取りかえながら、赤の光には火のパルミラ、緑の光には樹のパルミラ、青の光には凍の

パルミラを浴びせた。

　同色の光を浴びると、柱の光はたちまち消えてしまい、三色の光が消えると、白く輝いていた光も消えさる。それを確認してから、メディナは樹のパルミラで緑の光を灯しなおす。白い光が灯っていた柱が緑の光を放つ。

　閉ざされていた扉が開く。ごく小さな部屋があった。

「さあ、乗ってください」

　メディナに言われるまま部屋にふみこむ。部屋の奥の壁には小さなレバーがあり、メディナがそれに触れると、扉が音もなく閉じた。

　軽い衝撃が起こって、体がやわらかく床へ押しつけられる。低い唸りが部屋の周囲をとりかこんだ。

「これが……ゴンドラだったのか」

　毒気を抜かれた顔で部屋を見まわすユテラルドを見て、メディナが小さな笑い声をあげる。

「初めてですか？」

「そう言うわけではないが……。さすがはリューベーンだな。俺の生きている時代には、ここまですごい技術は残っていない」

「時代？」オブリッドとメディナが声をそろえる。

「俺が生まれた時には、すでにリューベーンは消滅してから百年がたっていた。それがどうして、ここにこうしていられるのか……、わけがわからない」

「シャルアミが話してくれたユテラルドは小さな子供でしたし……、時間がずれてしまっているのでしょうか」
考え込んだメディナは「もしや」と言葉を続けた。
「閉ざされたこの国だけが、時の流れからも取り残されているのかも知れませんね」
「ここが閉ざされてから一年が過ぎた。その間に外では百年が過ぎたと言うのか？　では、ここで一日が過ぎるごとに、外では百日が過ぎることになる」
「なんだと？　では、俺の友人は……、飢えに襲われようとしていた街や村は……！」
「まだそうと決まったわけじゃありません、あくまでも推測……きゃっ！」
ゴトンと重い音を響かせてゴンドラが止まり、三人は軽く床から跳ね上げられる。壁によりかかったメディナが、不審そうにゴンドラを見まわした。
「こんな止まりかたは初めて……」
メディナがレバーに触れると扉が開いて、がらんとした薄暗い部屋が見渡せる。
「予定していたよりも、下で止まってしまったようです」
「では、上へはいけないのか？」
「いえ、ここは最上層ですから、階段まで行けば」
ユテラルドはゴンドラを出て、部屋を用心深く見まわした。生き物の気配や物音はせず、塔の外を通る風の音だけが遠く聞こえてくる。出口は一つだけで、扉のないぽっかりと開いたアーチの向こうに、ごたごたと積み上げられた荷物が見える。

「奥へ進めば、階段の上り口があるはずです」

先に立とうとするメディナを、ユテラルドが引きとめた。

「どうも……いやな予感がする。退がっていてくれ」

うっすらとほこりがつもった床を横ぎり、次の部屋をうかがう。

塔の曲線に沿った扇形の部屋には、奇妙な金属の箱や檻、伝説の傭兵がいた部屋にあったのと同じ金属棒や実験道具、鎖などが雑然と並べられている。動くものは何もなく静まりかえっているが、向かいの壁に二つ見える戸口のうち、塔の中心寄りの一つには鉄格子がおろされ、奥から明るい光がさしている。塔の外周寄りの戸口には、やはり扉もなにもなく、がらんと開け放たれている。

奇怪ながらくたの間をぬって、ユテラルドはまず暗い戸口をのぞく。戸口の幅とほとんど変わりがない細い通路が、ゆるやかに弧を描いて伸びているが、目につくようなものは何もない。部屋の中ほどまで近づいてきたオブリッドとメディナへ、そこで止まるよう合図して、明かりが差してくる格子戸へ顔を近づけた。

青白い光を放つ石柱がならぶ部屋の中央には、金の髪に紫の肌をした女戦士が剣を手にして、こちら側に背を向けて立っている。女戦士が向いている側の奥には、研究所で見たのと同じ透明の素材でできた円筒があり、その中に紅い髪の女性が一人、ひざをかかえて座り込んでいた。

声を上げそうになったユテラルドは、戸口から身をひいた。

「ユテラルド、どうした?」

足音をしのばせて近づいてきたオブリッドがささやく。ユテラルドも押し殺した声で答えた。
「シャルアミだ」
「えっ？　彼女一人ですか？」
「そのようだ。妙な筒（つつ）に入れられていて、その手前に戦士が立っている」
オブリッドとメディナが鉄格子へ近づく。
「あれは転送装置もかねた実験用の檻。手前にいるのはフェルグ。お爺さまが創り出した番兵です」
辺りを見まわしていたオブリッドが、壁から突き出ているレバーを指差す。
「メディナ、あれがこの格子のスイッチか？」
「さ、さあ……。この辺りにはあまり来たことがありませんから……、ごめんなさい」
「こちらにもレバーがあるが？」
扉をはさんで逆がわの壁にもレバーが突きでているのをユテラルドが目で示す。
「扉をはさんで対称にあるレバー……、……あの、自信はありませんが、おそらく同時に押して開くものだと思います」
「ならば、たのむ」
ユテラルドは戦鎚（せんつい）を抜いて、格子のそばで身構える。オブリッドはうさんくさそうにレバーをにらむ。
「バグラゲラは、一人でこの二本を下ろせるのか？」

「お爺さまは、ここに来る必要はありません。必要な時には、シャルアミを自分のそばにある檻へ、転送してしまえばいいのですから」

「なるほど」

「シエナも、この近くにいるのでしょうか……？」

「調べてみれば判ることだろうが……」

オブリッドとメディナは、黙ったまま格子の横に張りつくように立っているユテラルドへ目を向けた。

「まずは、シャルアミを助けるのが先決ですね」

「でなくては、こいつは動かんだろう」

二人はレバーへ手をかける。オブリッドが指先でリズムを取ってから、手を振り下ろした。二つのレバーが音をたてて鉄格子がゆっくりあがっていく。部屋へ踏み込もうとしていたユテラルドは、格子の呑気な動きにあせるが、そんな思いをよそに、重々しく持ちあがっていく格子の向こうで、女戦士が振りかえろうとしている。

ユテラルドは身をかがめて格子の下をくぐり抜けると、剣を振りかぶろうとしている女戦士の脇腹へ戦鎚を振りあげた。白い光が弾けて女戦士は横倒しになるが、こたえた様子はなく、のろのろと起きあがろうとする。

立ちあがろうともがく化け物を無視して、ユテラルドはこちらを見ているシャルアミへ駆け寄った。

『ユテラルド！』透明の壁ごしにくぐもった声が聞こえる。シャルアミは拳で懸命に壁を叩いている。ユテラルドは叫んだ。

「後ろへ退がれ！」

ユテラルドが戦鎚を振りかぶるのを見て、シャルアミは後ろの壁へ身を押しつけた。戦鎚が触れた瞬間、白い光が透明の壁全体に走って弾き飛ばした。きらきらと輝く破片が宙を舞う。

鉄格子が落ちる重い音と、メディナの悲鳴が聞こえた。

「ユテラルド、後ろ！」

シャルアミの叫びに振りかえると、鉄格子の向こうで慌てているメディナと、何か叫んでいるオブリッド、起きあがってこちらへ向き直った女戦士の姿が目に入る。そのとたん、ユテラルドの背に、温かくしなやかなものがおおいかぶさった。

「ユテラルド、来ると思った」

シャルアミの冷笑が耳に触れ、細い腕がしっかりと首に食い込んだ。

「ご主人さまに命じられて、ここで待っていたのよ。ご主人さまが、クレストを所望していらっしゃる。さあ、いきましょう」

シャルアミの声でありながら、シャルアミとはまったく違う声が告げる。

「おまえ……、何者……だ？」

「シャルアミよ」

振りほどこうとするユテラルドを、人間ばなれした力で、じりじりと檻の残骸……不思議な

文様(もんよう)が刻み込まれた床の上へ引きずり上げようとする。躊躇(ちゅうちょ)していたユテラルドは、目を閉じると思いきりシャルアミの胴(どう)へ肘(ひじ)を叩き込む。だが、石をなぐったような衝撃があっただけで、動きは止まらない。

　ナイフを探るが、指先が空になった鞘(さや)に触れてようやく、伝説の傭兵との戦いの中で失ってしまったことを思い出した。

「あばれたら、痛い思いをするだけよ。ほら、あの頭の中に一つの命令しか覚えられないヤツがくるわ。あいつは、敵を殺すことしか知らないの。私と一緒にいかないと、このまま細切れにされるわよ」

　剣を構えた女戦士が近づいてくる。戦鎚を振るおうとしたが、細い手が鉄枷(てつかせ)のように捕らえて引き戻す。

「無傷で連れて行きたかったけど、こんなに聞き分けがないんじゃ、大人(おとな)しくなってもらうしかないわね」

　くすくすと笑いながらシャルアミの形をした何者かは、喉(のど)へ食い込ませた腕の力を強める。ユテラルドは彼女を引き連れたまま、横へ逃(のが)れよう、床へ倒れようとしたが、何かに吸いつけられてでもいるように、シャルアミの体は檻の床の上から離れようとしない。

　剣を振り上げようとする女戦士の肩越(ご)しに、格子がのろのろと動き始めるのが見えた。

「仲間がいるんだっけ？　でも、間に合わないわ」

　ユテラルドは唯一(ゆいいつ)自由になる片手で剣の柄(つか)を握りしめた。重い剣を逆手で突きたてても、こ

いつには効きそうにないが、パルミラの力を解放すれば、引き剝がすことができるかもしれない。ただし自分も同じだけの力を食らうことになるが。

女戦士が高々と剣を振り上げ、ユテラルドが武器を抜こうとした時、突然、女戦士は背後から突き飛ばされて床に倒れふした。その背には枝分かれをした不思議な形の大型のナイフが突き立っており、格子の前には黒い鎧の男が立っている。

「えっ？」シャルアミが息をのむ。

ユテラルドは剣を抜き、ゆるんだ腕から身をもぎ離しつつ、剣先をシャルアミの姿をしたものへ突きたてた。パルミラの力を刃に変えて叩きつける。鈍い衝撃と共に敵の体がえぐれて剣先がめりこんでいくのがわかるが、弾かれた力がユテラルドへも跳ねかえり、鎧を削って背を焼いていく。皮をそがれ、身をきざまれる痛みで目の前が白くそまるが、ユテラルドは手をゆるめず、渾身の力を込めて刃を突きとおした。

人間のものとは思えない叫び声をあげてシャルアミが後ずさる。白い腕を振り払い、振りかえりざまに戦鎚を叩きつけると、紅い髪を吹き散らしながら、シャルアミはもんどりうって青白い円柱に激突して崩れ落ちた。

ばさり、と赤い髪が束になって抜け落ち、白い肌がひび割れ、めくれあがって剝げ落ちる。その間から赤茶けた砂が流れ落ちたかと思うと、皮袋がしぼむように高さを失って床へ広がった。白い霧のようなものが、シャルアミの服と砂の山を消し去った。

ユテラルドは痛みに歯を食いしばり、女戦士を倒した黒い鎧の男へ向き直った。

　戦いの中で鍛え上げられたがっしりとした体を覆っている鎧は、わずかな赤い飾りをのぞけばすべてが黒。合間から見える服は深い草色に染められている。髪は頭巾と兜のため見えないが、日に焼けた顔は無骨で岩を思わせ、意思の強さを秘めた灰色の瞳が見返している。

　モレアの《報復者》。

　そして、頬には大きな傷跡が走っている。

　苦い思い出と悪夢の中で繰り返し見た男の姿に、ユテラルドは怒りの声をあげた。

「きさまっ！」

　剣を構えて躍りかかる。男は素早く身をひいて間合いをあけた。二度、三度と切りかかっても、男はかわすばかりで腰の武器に触れようともしない。後ずさって部屋から出る男を追って、ユテラルドも飛び出した。

　ユテラルドのふるう剣を、男は部屋のがらくたを盾にかわし続ける。

「ユテラルド！　なんのつもりだ!?」

　レバーを押さえていたオブリッドが、あわててユテラルドの肩をつかんだ。なおも向かっていこうとする彼を、背後から羽交い締めにする。

　背中の傷の痛みにユテラルドはよろめく。オブリッドは怒鳴った。

「この男が、俺たちをメディナのところまで連れて行ってくれた恩人だ！　彼がいなかったら、おまえは生きてなかったんだぞ！」

「でたらめを言うな！　こいつは、俺の両親を殺した仇だ！」

「仇？」
意外な言葉にひるんだオブリッドを振り払い、ユテラルドはモレアの《報復者》へ剣を突きつけた。
「シャルアミだけでなく……、きさままで生きていたとはな！」
《報復者》はうなずいた。
「ストルタのユテラルド、クレストを持つ者よ。我々がおまえの両親を殺したことは、わびてもわびきれぬことだ。だが、おまえの父が、我らが《母》に刃を向けようとしたことは、許されざることであった」
「ビリヤナか!?　たかが樹が、人の命より大切なのか!?」
「そうだ。ビリヤナか!?　ビリヤナは万物の命の源」
「そんなたわごとは聞き飽きた！」
ユテラルドを見つめる《報復者》の目に、悲しみの色が浮かぶ。
「おまえのためにも、おまえの父には、考えを改めてもらいたかった。だが、我らの言葉は聞きいれられなかった……」
思い描いていた仇の姿とは異なる《報復者》の態度に、荒れ狂っていた怒りの感情が消えてしまうのを感じて、ユテラルドはとまどった。
「なぜ……、どうして、殺した男の息子である俺を助けた？　仇としてつけねらうことぐらい判るはずだ」

「我らが母の敵は、おまえの父一人だった。おまえの母まで手にかけてしまったことは……私の過ちだ」

「あの時、おまえは俺も殺そうとした！」

「……迷いがあった。『クレストを持つ者に刃をむけてはならない』、我々はそう戒められていた。だが、おまえを生かしておくことは、遺恨を残すことでもあった。私はおまえに刃をむけ、……罰を受けた」

「…………」

「私は罪を償わねばならない。あの時、私の前に立ちはだかった少女と、今こうしてここにいるおまえを、守るのが私の償いなのだ」

「シャルアミもか？」

「彼女は私の罪の犠牲者だ。ユテラルド、あの娘の無事が約束されるまで、この命をながらえさせてはくれないか」

「信用しろと言うのか？」

《報復者》はユテラルドへ向かって踏み出すと、身構えた彼が突きつける剣先を、みずから喉もとへあてがった。

「我が名はラルバドラ。私が差し出せるものは、誓いと命しかない。《万物の母》の前に誓おう。私は、ユテラルド、シャルアミを、命つきるまで守りとおすと。ユテラルド、私の命はおまえの手の中だ。望むとおりにしてくれ」

ラルバドラは静かな眼差しでユテラルドを見つめる。堅くこわばったユテラルドの肩から、オブリッドの手が離れる。メディナが非難の声をあげた。
「皇子、止めてくださらないのですか？」
「神聖な誓いに、他者が口をはさめるわけがない」
金髪の青年は一歩後ろへひくと、だまって二人を見守る。メディナは口をおさえ、信じられないと言いたげに首をふった。
「いや……、殺しあいなんて……、ユテラルド、止めて！　シャルアミが……、そう、シャルアミなら止めてって言うはずよ！」
冷たく凍りついていたユテラルドの表情に、とまどいが紛れこむ。顔をゆがませ、歯をくいしばりながら、ユテラルドはゆっくりと剣をおろした。
「ラルバドラ、シャルアミと会うまで、おまえを生かしておいてやる。だが、俺に剣をむけてみろ、容赦なく殺してやる」
「恩恵に感謝する。私は、誓いを忘れはしない」ラルバドラは深くうなずく。
張りつめていた緊張の糸がゆるんだとたん、ぶりかえしてきた傷の痛みに小さく呻き声をあげたユテラルドを、オブリッドが支えた。
「大けがをしたくせに暴れるからだ。こっちで少し休め」
「いや、休んでいる余裕などない。……こんな罠をしかけてあるんだ。バグラゲラに感づかれているはずだ」

「確かに。しかし、そうなると……」オブリッドはメディナをふりかえった。「上への道は複雑なのか?」

「いえ、上への階段さえ見つければ、研究室への転移陣までは、そんなに迷うことはないはずです」

「そうか。では、君はここで引きかえすんだ」

「そんな、まだもう少し……」

「だめだ。今なら脅されていたんだとでも、言いわけがたつだろうが、バグラゲラに見つかってからでは遅い」

メディナは、ユテラルドやラルバドラへも目をやったが、二人の表情からオブリッドと同じ意見だと感じとって目をふせた。

「……わかりました。部屋へ戻ります……」

「ゴンドラまで一緒にいこう」

隣に立ったラルバドラへ、メディナは感謝の笑みをかえす。背を向けて歩き出そうとした彼女は、ふと立ち止まって振りかえった。

「皇子、ユテラルド、……またお会いできますか?」

ユテラルドは眉をひそめたが、オブリッドは明るい口調でうなずいた。

「ぜひとも、そうなることを願っていますよ」

メディナは二人へ優しい微笑みをなげかけると、ラルバドラと共に姿を消した。

彼女の姿が見えなくなったとたん、オブリッドの顔から笑みが消える。金髪の青年は沈んだ表情で、ベルトの革袋から緑の小ビンを取り出して封を切る。

手渡されたユテラルドは中の液体を一気に飲み干した。温かい力が傷の痛みを消してくれる心地よさに、おもわず安堵の吐息をつく。礼を言おうとふりむき、オブリッドがいらだたしげに眉をひそめ、唇をかみしめていることに気づいた。

「……オブリッド、本当に、一体どうしたんだ？」

「ただの自己嫌悪だ」

ガラクタの上に座り込んだオブリッドは、手のひらに拳を叩きつけた。

「どうして、こんなことになる前に、バグラゲラを止められなかったのか……、あいつが怪しいことをしでかしていることは判っていたはずなのに、なにもしないまま放っておいて、結局、何もかも失ってしまい、自分の力ではどうしようもなくなってから大慌てしている。こんなはめに陥った自分がくやしいのさ」

「…………何かがおこる前に、解決できることなんて、ほんの一握りだ」

ユテラルドも床の上へ座り込んだ。すっかり痛んでしまった、右手の皮ベルトをなでさする。

「俺も、シャルアミを失ってから、自分のしでかしたことに気がついた。メディナも、身の回りの人間がいなくなってから、バグラゲラのやっていることに気がついた。……案外、人生なんていうのは、自分や他人の尻拭いをしてまわるだけのものかも知れない」

「尻拭いか……」

ユテラルドの言葉を聞いていたオブリッドが笑い出した。

「やらずに逃げるヤツが多いからな。……まぁ、俺もいろいろ逃げ回った覚えがあるし、今は意地だけで、かろうじてぶらさがってるようなものだ」

ため息をついて、また黙り込んだオブリッドは、視線を落としたまま話しかけた。

「ユテラルド、俺はおまえを利用している。バグラゲラにぶつけるための、最後の矢だと思っている」

「ああ、わかっている。傭兵はそういうものだ。気にすることはない」

「……ちがう、俺が腹立たしいのは、おまえをあてにしておきながら、おまえを……信じきれないことなんだ。俺は……おまえの……クレストの力が恐ろしい」

「よく言われることだ。どんなに人のいいやつでも、俺のクレストを見ると必ずそう言う。疫病神とつきあえる人間など、そういはしない」

「……ユテラルド、俺はウソをついた。伝説の傭兵を倒したのは……おまえだ」

「なにを言うんだ？　俺はあいつにやられて……」

「そうだ、おまえは倒れた」オブリッドは顔をあげて、ユテラルドを正面から見すえた。「だが、その後でおまえは立ちあがると……宙を飛んだ。そして、あいつと戦って勝ったんだ」

「俺……が？」

「ああ。フォーリムは、おまえがそうなることを知っていた。あの、黄金色に輝き、やすやすと大地を砕く伝説の傭兵と、おまえが互角の力を見せることを……。《クレスト》《フォーリ

ム》《魔人》……。人を超えた力だ……俺は怖い。それなのに、俺はおまえの影に隠れて、ここまでついてきた。何故かわかるか？　俺がおまえを使ってバグラゲラを倒した……倒そうとしたんだと言いたいだけなんだ！　……あきれ果てたあさましさだ」
自分が得体の知れない力を使っていた、そしてフォーリムはそれを知っていた。
ユテラルドは言葉を失って、呆然とほこりが踏み荒らされてまだらになった床を見つめた。重苦しい沈黙が頭上からのしかかってくる。
かすれた声でオブリッドがつぶやいた。
「……すまない。やはり言うべきじゃなかったな。おまえがクレストを否定していることは判っていたのにな……」
「いや、知らずにいるよりはいい」ユテラルドは堅くにぎりしめた右手の甲を、怒りの目で見下ろした。「何もわからないまま、これに翻弄されるのは、もうごめんだ」
かすかな足音と共に、部屋の戸口にラルバドラが影のように現れ、静かに二人のそばへ歩み寄る。立ちあがったユテラルドへオブリッドが問いかけた。
「俺を……どうする？」
「……バグラゲラがいると言って、俺をここまで連れてきたのはおまえだ。王族の義務でも名誉欲でもかまわない。バグラゲラと戦うのなら進めばいい。ただし、この先の戦いでは、おまえを守るだけの余裕はないだろう。それに……」
ユテラルドは右手を軽く持ち上げた。「こいつのせいで、とんでもない目にあわせるかもし

れん。決めるのはおまえだ」

黙り込んだオブリッドは、すぐに何かを振り払うように勢いよく立ちあがった。

「もちろん一緒に行かせてくれ。戦いの中では俺のことは忘れてくれていい。自分の身を守るぐらいは、なんとかしてみせる」

三人は外周よりの細い通路を抜け、やはり物置になっている細長い部屋へ出た。奥まった場所の床には、研究所で使ったのと同じ大型の転移装置があったが、パルミラの力は感じられず静まりかえっている。塔の中心側の壁には、岩を磨き上げて美しい模様を刻み込んだ幅広(はばびろ)の階段が、上と下の両方に続いていたが、ユテラルドは下へは目もくれずに登り階段へ足をかけた。階段は小さな踊(おど)り場で向きを変えながら上へ上へと伸びている。途中にはいくつか扉があったが、ユテラルドはそれらも無視して黙々と登って行く。

三人の荒れた息遣(いきづか)いと物音のほかには、階段を吹きぬける風の音だけが響いている。恐れていた化け物の襲撃(しゅうげき)にもあわずに、最後の踊り場まで登りきると、目の前にはアルクレストが刻み込まれた扉がそびえていた。

扉には取っ手もレバーもない。ユテラルドが調べようと軽く触れたとたん、大扉はかすかに軋(きし)りながら左右へ開いた。

武器に手をやって油断なく身構えた三人の前に、緑の空と雲海が広がり、雲からちぎれた白い霞(かすみ)が、風に乗って吹き込んでくる。扉から緑の空へ向かって、塔から突き出たこぶの上に、

石畳の通路が敷かれており、先端で丸い小さな広場になっている。その中央に魔術文字で埋めつくされた大きな円盤が乗っている。
「メディナが言ったとおりなら、あれでバグラゲラの研究室とやらへ行けるわけだな」
オブリッドのつぶやきに、うなずいたユテラルドが足早に広場へ歩み寄ると、円盤に刻まれた魔法文字が光を放ちはじめた。
「ユテラルド、待て。乗るとすぐに飛ばされるぞ」
オブリッドはユテラルドを引きとめ、ラルバドラを振りかえった。
「メディナの話では、この転移装置は研究室のエントランスに通じているらしい。そこから扉一つで円形の調整室、その奥に実験室、実験室の両隣に資料室と書斎があるらしい。実験用の素材は、調整室の脇に小部屋がいくつかあって、そこに入れられているそうだ」
「では、まずは最初に入った部屋の脇にある部屋を調べ、人質となっている者を助けねばならんな」
ラルバドラの落ちついた声とは対照的に、オブリッドははやる気持ちをそのままに、早口で言葉を続けた。
「たぶん護衛の化け物……おそらくあの子供が出てくるだろう。そうなったら、ユテラルド、たのむぞ。俺とラルバドラは、まずシャルアミとシェナを助け出す。調整室で見つからなかった場合は、奥へ突入する。二人を助け出した場合は、どちらかが外へエスコートする。……いいか？」

うなずき交わした三人は円盤へ踏み入った。円盤の外周から吹きあがった薄黄色の柔らかな光の幕が、三人を取り巻き周囲から切り離した。

第十一章　研究室　最端の地、そして天上への扉

かすかに体がもちあがり、空気がゆらぐ。

周りを取り囲んでいた薄黄色の光が弱まり、その向こうに弧を描いている広々とした天井と床、複雑な模様が描かれた壁が透けてみえる。

突然、ユテラルドが二人を押しのけて、転移装置から飛び出した。

ユテラルドの目の前で轟音とともに炎が広がり、赤い波が床や壁をなめる。炎が消え去り火の粉が飛びちるむこうに、あの少年……ビルホルゴが浮かんでおり、さらにその向こう、床から迫り出した黒い台の影にはバグラゲラがいた。

「ヒョヒョヒョヒョッ、来おった、来おった。待ちくたびれたぞい」

「シャルアミを返してもらうぞ！」

「ヒョヒョッ、よほどあの小娘が大事とみえるのぉ？」

バグラゲラが、痩せた片手で部屋の片隅を指し示す。丸い部屋の壁には、いくつか青く透きとおっている場所がある。その一つ、小さな部屋の中にシャルアミが閉じ込められていた。ユテラルドへ顔を向け、なにごとか叫びながら懸命に、両腕で青い壁を叩き続けている。

「じゃが、《サイクル》を解明し、この国を解放するための貴重な実験体じゃ。手放すわけに

はいかん」
シャルアミが自分のむかい側を指さす。その青い壁のむこうには、壁にすがりつくように立っている一人の女性がいた。研究室でシャルアミを捕まえた女にそっくりだ。シャルアミが助けようとしていたシエナだろう。
ユテラルドの背後から左右に、脱兎のごとくオブリッドとラルバドラが飛び出した。ビルホルゴが右、左と視線をさまよわせる。
「おまえの相手は俺だっ！」
ユテラルドが突き出した槍の穂先に冷気の塊が生まれ、無数の氷の槍が少年めがけて飛び出す。とっさに光の壁でくいとめたものの、おおきくよろめいて後ずさったところへ、さらに槍を繰り出す。少年は体勢をくずしたまま、ふらふらとバグラゲラのいる方へ退がっていく。
「ぬぅ、ビルホルゴめ、もう限界じゃというのか？　なぜ、得るための究極のアルクレストが奪うのだ？　サイクルの何を読み間違ったというのじゃ……。ええい、こうるさい雑魚めが！」
バグラゲラは杖を振りかぶり、奥の部屋へ続く扉へ回り込もうとしていたオブリッドめがけて雷光を放つ。オブリッドは床へ身を投げ出して、強烈な一撃をかわした。
「皇子、このようなところまでおこし頂けるとは、光栄ですな」
「なに、囚われの女性二人、そしてリスムルを救うためだ。奥の部屋、行かせてもらうぞ」
「ヒョヒョ、なんとお優しいことですな。しかし、姫君を一人城に置き去りにされて、さぞ心

苦しいことでしょうな？　会わせてさしあげましょうぞ」

「なんだと!?」

バグラゲラが床から迫り出した黒い台の上へ手をやると、青い壁の一つが消えさり、中から黒い蔦をまといつかせた皇女が滑り出てきた。

「オブリッド？」

黒い流れがオブリッドめがけてなだれ寄る。剣を構えたもののどうすることもできずに後ずさるオブリッドを見て、満足そうな笑みを浮かべたバグラゲラへ、黒い影が踊りかかった。

身をすくませたバグラゲラの周りに淡い光の壁がうかびあがり、切りつけてきた人影を弾き飛ばす。だが、黒い鎧を身につけた男は、軽やかに体をひねって体勢を立て直すと、さらに切りかかる。竜の姿が刻み込まれた幅広い大型のナイフの刃が、バグラゲラを守る光を切り裂き、美しい緑の光を放つ。

「おのれ！　まだ、わしの自由にならぬパルミラ兵がおったか？」

バグラゲラは杖を振りまわし、紫色の光球を男めがけて投げつける。ラルバドラは大きく飛びのくと、おだやかに口を開いた。

「私はクレストもアルクレストも持たぬ。おまえの言うパルミラ兵などではない」

「なに？　ではおまえも《サイクル》の恩寵を受けるものか？」

「私の力は《万物の母》より賜りしもの。サイクルなどあずかり知らん。老体よ、その台より退がられたほうが身のためだ」

「ヒョッ、言うてくれるわ！　退がるのはおまえらの方じゃぞ！」
バグラゲラの足元から広がった光の輪が、ラルバドラの足を打つ。バグラゲラは操作台へ指を這わせた。
「ヒョヒョ、よく見よ。シャルアミとか言う娘がどうなっておるか、しっかりと見るんじゃ！」
ビルホルゴを追い詰めようとしていたユテラルドは、呻き声をあげて身を凍らせた。
青い壁の向こうで、シャルアミは頭を抱え、苦しそうに体を折り曲げている。バグラゲラが黒い台の上で指を動かすと、シャルアミの体がはね上がり、床へ崩れ落ちる。
「動くでない！　動けばあの娘がどうなるか……」
「バグラゲラ、きさ……、うぐっ！」
ビルホルゴが放った光球が、ユテラルドの胸を撃って吹き飛ばし、切り払う手を止めたオブリッドを、黒い蔦の波がからめとり、皇女の白い腕が招き寄せる。ラルバドラはじりじりとバグラゲラへにじりよった。
「あの娘を必要としているのは、おまえも同じではないのか？」
「良いところを突くのぉ。じゃが、わしには、あの娘の人格なぞ必要ない。ビルホルゴとは違うサンプルとしたかったが、こうなってはやむをえん」
バグラゲラの指が踊り、シャルアミは激しく床の上でもがく。ラルバドラの顔にはじめて焦りの色が浮かび上がるのを見て、バグラゲラは大きく笑い声をあげた。
「そうじゃ、退がるんじゃよ。三人おればどうにかなると思ったか？　あさはかじゃよな。ほ

れ、これでもまだ刃向かうというなら、あの娘をパルミラに変えてしまわねばならん」
「パルミラに変える!?」ユテラルドの呻きにバグラゲラはうなずいた。
「面白いものじゃ。ビリヤナの果実と人間、どちらもパルミラに変換できる。これにもっと早く気づいておれば、むだに処分せずにすんだのじゃがな」
どこか呑気につぶやいたバグラゲラは、ユテラルドたちへ視線をもどした。
「ヒョヒョヒョヒョ、ビルホルゴ、クレストを捕まえるんじゃ」
小柄な少年がユテラルドの前まで降りてくると両手を突き出した。ユテラルドの両腕が体に押しつけられ、すさまじい力で締めつけられる。
「ヒョッヒョッヒョ、勝負あったの?」
『ダメ！　ビルホルゴ！』
金色の光がユテラルドの前で渦巻き、フォーリムの姿が現れる。黄金の鳥は少年の顔の前まで舞い上がると、首を伸ばして仮面のような顔をのぞきこんだ。
『ビルホルゴ、聞こえる?　わたしよ。お願い、もうやめて』
「なんじゃ?　これは……まさか!?」
フォーリムに気づいたバグラゲラが、シエナを振りかえる。青い壁の向こうで女性は頭をたれ、両手を胸の前に組んだままじっと動かない。
「そうか……、予測のつかぬことが次々と起こると思うたら、おまえだったか！」
バグラゲラの手が、台の上を横切る。壁の中のシエナが身をのけぞらせ、フォーリムが悲鳴

をあげた。

『きゃぁぁ！　ビル……ホル……ゴ！』

鳥の形を失い、光の渦になってしまったフォーリムをみつめていた少年の目が、ゆっくりと見開かれた。

「ま……ま？」

金色の光を抱き寄せた少年は、くるりとバグラゲラに向き直ると、矢のように飛びかかった。

少年の体が、バグラゲラを覆っている光の壁にぶつかり、大きな閃光とともに打ち砕いた。

シエナに目を向けていたバグラゲラは、突然の衝撃に床に投げ出され、おたおたと起きあがろうとする。そこへ幅広の短剣を振りかざしたラルバドラが躍りかかった。

「ビルホルゴ？　なにっ、そんな、ばかなっ!!」

緑色の燐光のすじをひいて、磨き上げられた剣先が、こげ茶いろのローブに食い込む。バグラゲラは身をのけぞらせ、必殺の一撃を下した男へ杖を向けようとしたが、力尽きて床に倒れふした。

血にぬれたローブが黒く染まって行く。苦痛の呻きをあげながら、バグラゲラは血管の浮き上がった痩せた腕を、壁の向こうのシエナへ伸ばす。

「なぜ……じゃ、おまえは……滅ぼすのじゃろう？　滅ぼすだけ……の存在である……おまえたち……魔人に……」

バグラゲラの節くれだった指が、遠いシエナの姿をつかみとろうとする。床にひざまずいて

いたシエナは、バグラゲラの呻きに、悲しみに顔を曇らせて口元を押さえる。
バグラゲラは身を乗り出し、さらにシエナへ向かって手を差し伸べる。
「なぜ……、この……世には……、おまえらの……ような……、魔人が……いる……の……だ？　みな……生き……て……い……た……」
「ごめんなさい……、私にも……どうすることもできなかった……」
シエナは顔を覆ってうなだれる。
「わし……は……、…………メ……ディナ……を……」
かすかな音をたてて、腕が床に落ちる。バグラゲラの全身から力が抜けた。
ぼんやりとその様子を見ていたビルホルゴの体がゆらぎ、糸が切れたように床へ落ちて重い音をたてる。オブリッドの叫び声に目をむけると、波打つ金髪を散らして皇女がぐったりと倒れふし、黒い蔦が力なく床に広がった。
「リスムル？　リスムル、しっかりしろ！」
蔦を振りほどいたオブリッドは、皇女を抱き上げてゆさぶるが、皇女は目を閉じたまま動こうとはしない。
ラルバドラが黒い操作台をのぞきこみ、用心深く指を近づける。一つ、二つと青い壁が消えていく。ユテラルドは、まだ床に倒れたままのシャルアミへ駆けよった。
「シャルアミ！」
小部屋に入ったユテラルドにも、激しい頭痛が襲いかかる。頭の中に杭を打ち込まれている

ような激痛の中、ぐったりとしたシャルアミの体を抱え上げ、外へ飛び出す。血を吐きそうな痛みがウソのように消える。ユテラルドの腕の中で、シャルアミが小さく身動きした。

「ユテ……ラル……ド？」生気を失った瞳が、ユテラルドを見上げて光を取りもどす。

「来て……くれたの？」

「ああ」

「どうして……？」

「……あの日のような思いは、二度としたくない」

「あの日？」

腕の中のシャルアミは華奢で小さい。この体で、この手で、ずっと守ってくれていたのだ。ユテラルドは優しい笑みを浮かべて、自分を見上げている金緑色の瞳をみつめる。

「あの日だ」

シャルアミの手がユテラルドの頬を包み込み、見上げる瞳に涙があふれる。シャルアミはユテラルドの肩に顔をうずめて抱きしめた。

「私が知ってる……あのユテラルドなのね？　……ユテラルド！」

「……もう大丈夫だ」

うなずき、顔をあげたシャルアミは、目を見開くと周囲を見まわした。

「シエナさんは？　それにビルホルゴ……」

「あの子供は、バグラゲラが死んだとたんに倒れた。シエナというのはあの女か？」

ユテラルドはシャルアミを、ラルバドラが助け起こしているシエナの方へ向かせる。シャルアミはユテラルドの腕の中から抜け出すと、よろけながらシエナへ近づく。

「シエナさん、大丈夫!?」

シャルアミの声に顔をあげたシエナは、床に倒れた少年を指差して、かすれた声で訴えかけた。

「ビル……ホルゴを……！」

うなずいたシャルアミは少年に駆け寄ろうとしたが、突然、上空から降りそそいだ光の柱に驚いて飛びすさった。なんの変哲もない石の天井から、柔らかな黄金の光が倒れているビルホルゴへ向かって射しこんでいる。

「ダメッ！　ビルホルゴを助けてっ！」

悲鳴をあげたシエナの体にも、新たに現れた黄金の光の柱が降りそそぐ。彼女に手をさしだしたラルバドラが、光に弾かれてよろめいた。

光の中、ビルホルゴの体が宙に浮かび上がる。少年は不思議そうに自分の右手を見る。そこにあったアルクレストが、光にさらされて消えていく。少年は左手も持ち上げた。小さな白い手の甲に、白い光が吹き出してクレストを形作る。

「ビルホルゴ！　そんな、あの子をこんな運命に……引き込まないで！」

同じように光の中へ吊り上げられていくシエナが、光が射しこむ先を見上げて、悲痛な叫びをあげるが、少年の小さな体は光の中をさらに上へ浮かび上がっていく。

「ビルホルゴ、待って！」

少年に近づこうとしたシャルアミも、金色の光に弾かれて倒れる。駆けよったユテラルドが受け止めた。

金色の光が強くなり、少年の全身が金色に染まって行く。同じように金色の光に染まったシエナの姿の上に、大きな金色の鳥の姿が重なる。

「シャルアミ…、ユテラルド…」

シエナが泣き出しそうな声で二人に語りかける。

「……私のわがままに巻き込んで……ごめんなさい。でも……私は……この世界を壊したくなかった……の……。ビルホルゴ……寂しい……思い……させたく……なかった……」

「シエナ、一体どうしたの？　なにが起こってるの⁉」

黄金の鳥が羽ばたき、どこか遠くから呼びかけてくる不思議な声が、耳ではなく頭の中に響き渡った。

『世界に恐れをもたらし、多くの命を断ち切るものたちよ。今こそ浄化の時。我がしもべたる証を持つものよ、サイクルの輪を閉じるのだ』

「しもべ……？　では、これが《万物の母》のお声なのか⁉」

ラルバドラが驚きの眼差しを、シエナが変じたフォーリム、そして光が降りそそぐ天へ向ける。フォーリムにかき消され、かすかな影でしかなくなったシエナが身をよじる。

「いや……！　私には……そんな……こと……は……、許して……くださ……い！」

「シエナさん！」
　ふたたび飛び出そうとするシャルアミを押しとどめ、ユテラルドは戦鎚を手に、シエナを閉じ込めている光へ殴りかかった。戦鎚がまとう白い光が、黄金の壁に食い込み、光のしぶきをあげる。
「うおおおおっ!!」
　全身全霊をこめて、ユテラルドは黄金の壁を打ち破ろうとする。戦鎚がキシキシと軋みをあげ、白い光が壁に亀裂を生み出す。
「ユテラルド、もう少し！」
　シャルアミがユテラルドの腕に手を重ね、懸命に力をあわせる。
「シャ……ルアミ……、ユテラル……ド……」
　シエナのささやきがくぐもる。黄金の鳥が二人へ首をのばした。
『もう一人……、おまえに託すべきか？』
　戦鎚を握り締めている右手の甲に熱がおこり、おおいかぶさっているもの全てを貫いてクレストが黄金の光を放つ。思いがけない痛みにユテラルドは体をこわばらせ、低い呻きをあげる。
「ユテラルド!?」異変に気づいたシャルアミが叫び声をあげる。
「俺……から……離……れろっ！　早く！」
「えっ？」息をのんだシャルアミは、激しく首を振って、戦鎚にかけた手へさらに力をこめた。
「そんなのいやよ！　ユテラルド一人苦しい思いをさせたくない！」

「……ラルバドラッ！　シャルアミを……たのむっ！」
三本目の黄金の柱がユテラルドの体を貫く。驚きに目を見開いたシャルアミを、黒い風がさらって飛び去った。
黄金の光に呑み込まれたユテラルドも、空中へ浮かんでいく。黄金の鳥が羽ばたいた。
『我が力をもっても、もはや、ここをとどめ置くことはできぬ。すべてが無に帰す前にサイクルを成就させよ』
ただ一人、笑顔で黄金の光の中に浮かんでいたビルホルゴの体が、ゆっくりと黄金の鳥へ変貌していく。
「ビル……ホルゴ……！」
かろうじて人の形を残していたシエナの影が消え去り、代わりに大きな鳥の胸から、黄金のきらめきが滑りでてくる。ぐったりと力を失った大きな鳥を残して、きらめきは上へと浮かびあがっていき、天井を無視して登って行く。きらめきに触れたとたん、がっしりとした石組みが火にあぶられた雪のように溶けてしまい、その向こうに、緑の空と天頂でうずまく雲、そして雲の中にこの《塔》そっくりの岩の塔が、頂上をこちらへ向けて建っているのが見えた。
丸い穴の中央で、きらめきが声を放った。
『見よ。すでにつながりは断たれている。枝より離れるまではあとわずか。浄化されねば無に帰すのみ』
力なくうなだれていた大きな鳥が首を振る。

「私は……ビルホルゴを……消したくなどありません」
　大きな鳥——シエナは、きらめきへ顔をあげて、弱々しい声で訴える。
「どうか、この世界を元通りにしてください。私はこんなことをしたくはなかった！」
『一度はじまったサイクルを、さかのぼらせることはできぬ。押し進め、命をめぐらせることのみ。クレストを持つ者よ、我が願いを成就せよ』
「待てっ、無だとか消すだとか一体なんのことだ！　サイクルとはなんだ？　きさまは何者なんだっ!?」
　ユテラルドの叫びに、きらめきが、かすかにざわめいた。
『我は祖（そ）。サイクルとは、無を退け、生に死を、死の後に生を与えること』
「それがどうして俺たち……クレストを持つ者と関係あるんだ？」
『一つのサイクルを伝えよう』
　きらめきがユテラルドめがけて降りてくる。まばゆい輝（かがや）きにユテラルドは目を閉じたが、光はその中にまで入り込む。
「ユテラルドッ！」
　シャルアミの声が遠い。すべてが白く染め上げられた。

　雪をかぶった山並みが眼下にみえる。青い空から降り注ぐ陽（ひ）の光を浴びて溶けた雪が、小さな小川になって流れていく。ふもとへ向かって流れるにつれて、雪の代わりに苔（こけ）の緑が周囲を

おおう。苔はすぐに草にとってかわられ、草のあいまに背の低い灌木が混じる。灌木の繁みは背の高い樹木の森へ続き、森と草原が広がる。

色や大きさ、形のちがう鳥たちが、さえずりながら木々の間を飛び交い、草原には穏やかな顔をした鹿に似た動物が、群れになって草をはんでいる。緑のそこここには鮮やかな色の花々が咲き乱れ、たわわに実った果実を、小さな生き物たちが無心にほおばっている。

そんな景色の端に、黒いシミが広がっていた。空に吹き上げられる黒い煙。草すら生えず土ぼこりを舞い上げる大地に、石の壁が立ちはだかっている。

壁の内側には、石と鉄で造られた剛健な建物がひしめきあい、見たこともないあでやかな服を身にまとった男女が行き交う町があった。

大きな煙突を突き出した家の中では、食べるため、暖をとるためだけでなく、水を汲み上げるため、布を織るためなどの生活にかかわるすべてのこと、そしてただの娯楽のために、木々が火に投じられ、黒煙に変わっていく。

次々と使い果たされて行く木を手に入れるため、斧やノコギリを手にした人間たちが、森に踏み入り、大小かまわず根こそぎに切り倒して町へ運び込む。

森を追われた生き物は、生きる術を失って倒れるか、人間たちによって狩られる。

森を食いつくした人間たちは、次の森、そのまた次の森へと手を伸ばし、森の後に石や鉄で建物を建てては、さらに切り倒すための森を探す。

後には寂れた町と汚れた水、死に絶えた大地だけが残される。

そんな侵略者たちが、ひときわ大きな森へと矛先を向け、森のそばにあった村の人々が、その前にたちはだかった。村の民は自然にある樹、洞窟などをそのまま住み家とし、体つきは小さく、手にした武器も粗末なものだった。だが、森を切り倒す侵略者へ、勇敢に立ち向かった。

追い払われた者たちに代わって、町から鉄で身を守り、巨大な鉄の武器を手に、鉄の馬にまたがった軍勢が現れた。

強靭な鉄の武具をまとった兵の前に、村人はなすすべもなく次々と打ち倒され、村と森は燃えあがった。灰と火の粉が舞い飛ぶ中、森の奥へ進もうとする鉄の兵士たちの前へ、一人の少女が立ちはだかる。村の仲間は誰一人残っていないにもかかわらず、彼女は強い目で兵士たちを見つめて動かない。

兵士がなにごとか叫び、少女が返す。なんと言っているのか、不思議な抑揚をもった言葉の意味はわからない。だが、槍を抜いた兵士の目的は明らかだった。

少女が重々しい口調で兵士に告げる声の中に《クレスト》の言葉が混じる。兵士はあざけりの笑いをあげて、少女へ槍を投げつけた。

とたん、少女の肩にクレストがまばゆく浮かび上がり、黄金の光が周囲を照らし出す。光の中心で、少女は天へむかってなにごとかを叫び、変貌した。

そこには黄金の狼が立っていた。狼は尾を引く長い遠吠えを響かせると、降り注ぐ槍の雨の中を突きぬけ、狼の全身から流れ出た黄金の光に触れたものは、槍でも兵でも馬でも、すべてがかき消えて、白いチリのようになってしまう。狼は兵士を一人残らず消し去った後、森を飛

びだし、侵略者たちが残した死の大地を、その始まりの土地まで、黄金の光をなびかせて風のように走りぬけた。

狼が引いた黄金の光の筋が、大きく広がり、またたくまに死の大地を覆い尽くす。頭をもたげ、悲しみに染まった遠吠えを残して狼の姿が消える。その瞬間に、黄金の光が覆っていた土地、町、人の全てが消えうせた。

ぽっかりとえぐられた大地の上に、小さな丸い光が浮かんでいる。

大地の上に緑色の幻がゆらぐ。緑の……ビリヤナの森。

大地の傷を埋めようとするかのごとく、ビリヤナの森が削り取られた大地を埋めつくす。気がつくと、小さな丸い光は、ビリヤナの大樹の枝にやどる実になっていた。

白い光が銀色にかわり、ゆっくり青く染まっていく。青から緑、緑から黄色、そしてほのかな赤。ビリヤナの葉がざわめくと、熟した果実が枝から離れて、やわらかな大地へ落ちる。

果実が大地に触れたとたん、それは大地に根を張った若木に変わり、次の瞬間にはしっかりとした幹を天へ伸ばす大木へ姿を変えていた。

ビリヤナの幻がゆらぎながら消えていく。ぽっかり開いた大地の穴の真ん中に立つ、新しく生まれたビリヤナの大木は、青々と繁った葉の間に、かぞえきれない数の白い花を開かせた。

燐光をまとった白い花は、かすかな風に乗って次々と舞いあがり、えぐれた大地に降り注ぐ。

白い花びらは雪のように大地へ溶けてしまうが、その場所から大地が盛りあがり、草が芽生え、小さな木々が細い体を起こす。

　風にのったままの花びらのいくつかが、小さな虫に姿を変え、開いたばかりの花に舞い降りる。残った花びらは天高く舞いあがり、離れた森や村まで飛んでいくと、生き物や人のなかに溶けて、次の命の種に姿を変えた。

『これがサイクル』

　あの声が聞こえる。

『世界に命を満たすため、魂（たましい）の花を咲かせるのが我。そして命に害を与えるものを見極め、取り除くのが汝（なんじ）ら』

　目の前にビリヤナの大樹が現れた。風がこずえをゆらすたびに、光をまとった白い花がゆらゆらと飛び交う中、無数の枝のあちこちに、さまざまな色の果実が実っている。

　その中に、一つだけ灰色にただれて、腐（くさ）り落ちようとしている果実があった。

　シワがより、灰色に変色した皮の所々に、まだ緑色の場所がある。うすく銀を帯びた緑の皮の向こうに、閉ざされたリューベーンの城や町が見える。

　体が実の中へ吸い寄せられる。緑の空のただ中へ放（ほう）り出され、塔の頂上から下の様子を見下ろす。三本の黄金の柱には、一本の中にぐったりとしたユテラルドがいるだけで、残りの二本には何もいない。ユテラルドへ近づこうとするシャルアミを抑（おさ）えているラルバドラ、皇女を抱きかかえているオブリッドの姿が見えた。

『死の後に生を。しかし、この地のサイクルは途切（とぎ）れた。取り除かれた害は浄化されねばなら

ぬ。だが、それは拒まれた』
「腐り落ちようとしているのが……このリューベーン？」
啞然とした声と共にシエナ――大きな黄金の鳥が現れる。小さく羽ばたきながら、力なくうなだれた頭を左右に振る。
「これが……、私のしでかしてしまったこと？」
あのまま、落ちてしまうとどうなる？
『再生はない。永遠の死、無となる』
「しんじゃうの？　だったらボクがやるよ」
少年の声と共に、小さな黄金の鳥が現れ、天を仰ぎ見て言葉を続けた。
「ボクがかわりにやるから、ママをこまらせないで」
『ならば……』
「だめっ！　ビルホルゴに……そんなことをさせないで！」
シエナはビルホルゴを翼で抱きかかえ、彼をおおい隠そうとする。シエナは頭をのけぞらせて、天へむかって叫んだ。
「私がしでかしたこと……だから……、私がやります！」
黄金の翼を大きく打ち振って、シエナはリューベーンの国の端、緑の壁めがけて舞い降りた。全身から金色の光をあふれさせ、まばゆい光の粉を大地へ散らす。光に触れたものはサラサラと溶けて消え去る。

「ママ！」小さな鳥がその後を追う。

二羽の黄金の鳥がリューベーン国を一巡りすると、大地が小さくなって淡い緑の壁が迫り寄る。海が姿を消した。

最初にユテラルドが意識を取り戻した場所、そして粗末な墓がならぶ広場にも黄金の光が舞い落ちる。広場のかたすみで瓦礫に腰をおろして、遠くにかすむ城を見ていた老王が顔をあげる。うつろな目で上空を飛んで行く二羽の鳥を見送り、ゆっくりと舞い落ちてきた金色の光に手をさし伸ばし……そして消えた。

大地がさらに小さくなる。城下町の上を通りすぎたシェナの翼が、神殿の前で力を失う。神殿の大扉の前に、立っていた黒衣の女神官が、見えないはずの目を、上空へ向けて微笑んだ。

「シェナ、やっときてくれましたね？」

「メリダ……」

シェナのそばを飛んでいる小さな鳥へ顔をむけて、メリダはさらに笑みを大きくする。

「探していた息子に会えたようですね？　よかった。……さぁ、私たちを《母》の御許へ連れて行ってください」

「メリダ……、私……」

黄金の鳥の羽ばたきが弱まる。メリダは表情をかたくした。

「シェナ、時間がありません。私を前にして悩んでいてはいけません。そんなことで、このあとに来るものへ、どうやって立ち向かうのですか？」

シエナがハッと顔をあげる。
「シエナ、私たちを……ここに閉じ込められたすべての者を救ってください」
黄金の鳥は大きく翼を広げて神殿へ向かって打ち下ろした。金色の光の波が神殿と、神殿が建っていた丘を消し去る。
「……メリダ」
鳥の目からあふれた白い光が、しずくになってえぐれた大地へこぼれおちる。
「う……、うわあああっ！」
えぐれた丘の向こうを、リューベーンの兵士が一人、走りおりる。男は上を追い抜いた黄金の鳥を見て、恐怖のあまり大地に倒れふすと、悲鳴に似た叫びをあげた。
「ゆ、ゆるしてくれ、俺……俺が報告しなければよかったんだ……。トレドにクレストがいるなんて……、あ、ああ、ゆるしてくれ……ゆるしてくれっ！」
頭をかかえてうずくまる兵士の上に、やさしく黄金の光が舞い降りて悲鳴を消した。
わずかに残っていたリューベーンの国土は、黄金の光にのみこまれ、青みを帯びた緑の壁がその場所にとって代わる。すべての大地を消し去った二羽の黄金の鳥は、塔を見上げた。
翼の一振りで、塔の土台が金色の光に包まれて消える。二羽は螺旋を描きながら塔の頂きへ向かって舞いあがる。ふと、小さな鳥が動きを止めた。塔の壁に開けられた小さな窓をのぞきこむ。
ソファーに腰を下ろしてぼんやりと、落ち着きのない猫をあやしていたメディナは、鳥かご

の小鳥が突然あばれ出した物音に驚いて、窓辺へ目をやった。
「メディナ?」
窓辺に浮かんでいる金色の鳥が、メディナへ向かって首をのばしている。聞き覚えのある声に、メディナはとまどいながらも声をかけた。
「ビル……ホルゴ?」
「うん」
「……その姿、どうしたの?」
「ママといっしょなんだ」
ビルホルゴの背後に見えている景色が、いままで見てきた景色とは違うと気づいたメディナは、ソファーから立ちあがり、おそるおそる窓辺へ近づいて外をうかがった。
のっぺりとした壁が塔のすぐ外に立ちはだかっている。見下ろすと同じ壁がすぐ下の階まで呑みこんでいる。
思いもよらない出来事に慌(あわ)てふためいたメディナへ、新たな声が語りかけた。
「あなたは?」
見上げると、ずっと大きな黄金の鳥がゆったりと翼を羽ばたかせている。
「メディナ。ボクがここにつれてこられたとき、やさしくしてくれたんだよ」
声が出ないメディナに代わって、小さな鳥が答えると、大きな鳥はゆっくりとメディナのそばまで舞い降りた。

「そうでしたか……、ありがとう」
鳥はじっとメディナをみつめていたが、やがて小さな鳥を振り向いた。
「ビルホルゴ……、先に行ってなさい」
「どうして?」
「……この人と、大事なお話があるから」
小さな鳥はしばらくぐずっていたが、「メディナ、またあとでね」と元気よく声をかけて、塔の上へと飛んで行った。
「……あの……、私に話ですか?」
息をのんでメディナは黄金の鳥へ話しかける。鳥は小さくうなずいた。
「ビルホルゴのこと、本当にありがとう」
「い、いえ……、結局、私はあの子を守ってあげられませんでしたから……」
「それでも、ビルホルゴはあなたに救われていた……、私にはわかります。できれば、このまずっとあの子の友だちでいて欲しかったのですけれど、もう……」
黄金の鳥は大きく翼を振り上げた。
「……ごめんなさい」
やさしい風と共に、メディナの全身を黄金の光が包み込む。シエナは顔をそむけて、その場から舞いあがると、塔の頂上目指して羽ばたいた。
シエナの後を追うように緑の壁が、塔の頂上にあるこぶ状の周囲までおしよせて、わずかに

塔の頂上の一部だけが残っている。丸く開いた穴の上に、ビルホルゴと、《母》の意思を伝えるきらめきが漂っている。

シエナは塔の中を覗きこんだ。黄金の柱に囚われたままのユテラルドのそばで、シャルアミが唇をかみしめて空をにらみつけている。隣には黒い鎧の男、部屋の端には皇子オブリッドが、うごかない皇女と共にいる。シエナはきらめきへ近づき、頭をひくくした。

「……シャルアミとユテラルドは外から来た人です。どうか、元いたところへ帰してあげてください」

『その前に、おまえがやらねばならぬことがあるはずだ』

「…………」

『判っているはずだ。おまえの決意を見せよ』

シエナはゆっくりとビルホルゴへ向き直った。小さな鳥はシエナの前まで飛んでくると、周囲をくるくると飛びまわる。

「ねぇ、ママ。これからどうするの?」

「ビルホルゴ、……ママの前でじっとしなさい」

動きを止めたビルホルゴは、首をかしげながらシエナの前に浮かぶ。シエナは大きく翼を振りかぶり…………、

…………力なくおろした。

『浄化するのだ』

「……だめ……、できない！」
『時はない』
「わかっています！　でも……」
『無としたいか？』
シエナは激しく首を振った。「嫌です！　……この手で、私の手でこの子を消すなんて……、できません！」
「ママ！」
母鳥にすりよった子鳥は、きらめきへ首を向けた。
「どうすればいいの？　ボクがかわりにやるよ！」
『母を浄化せよ。そして、この空間を閉じるのだ』
「……ママを？」
だめだ！　やめろ！　やめろ！　やめろっ！
「やめろーっ!!」
黄金の柱の中で、ユテラルドが叫んだ。
「そんなバカなことを、させるなっ!!」
閉じていた目を見開き、カッと上空を睨みすえる。
『では、どうする？』
ユテラルドを覆っている柱が光を強め、ユテラルドを黄金色に染め上げる。ユテラルドはク

レストが輝く右の拳を、天へ向かって突き上げた。
「俺がやる！　そう言わせたかったんだろう。おまえはっ！」
黄金の柱が砕け散り、光に染まったユテラルドが飛び出す。
『ならば、これを受け取るがいい』
天頂から白い光が雷のように落ちてくる。受け止めたユテラルドの手の中に、白く淡い刃を持つ幅広の剣が輝いている。ユテラルドは、きらめきへ怒りに満ちた目をむけた。
「……その前に、シャルアミたちを外へ出せ！　できるんだろ！」
『その剣は、時と空間を渡り存在する。剣の心に問えばよい』
ユテラルドは剣を顔の前にかかげて、パルミラの力を引き出す時と同じように剣へ意識を向ける。その意識が大きく拡散した。
わずかに残った塔の上部、国を埋めつくした壁が形作る実の形、それを支えている枝、そしてビリヤナの大樹、そして森。それら全てが感じ取れる。
ユテラルドはシャルアミとラルバドラの前へ降り立った。
二人の周りに空間のゆがみが見える。ユテラルドはゆっくり口を開いた。
「……シャルアミ、ラルバドラ、外へは連れ出せそうだ。……しかし、時間まではさかのぼれそうにない」
「待って、ユテラルドはどうなるの？　ユテラルドを置いていけない！」
ユテラルドはラルバドラへ目をやる。黒い鎧の男がシャルアミの腕をとって、飛び出そうと

するのを抑える。ユテラルドは剣を振り上げた。

「ユテラルドッ！　いやよ、一緒に！」

月の光を秘めた剣がシャルアミたちの目の前に突き出され、剣先から広がった白銀の輝きが空間に波紋を広げる。波紋にのみこまれた二人の姿がゆらぐ。

「ユテラルド、ユテラルドッ！　お願い、必ずまた……戻っ……てっ！」

白い光に変じた二つの人影は、光のすじを引いて渦巻きながら、剣が切り開いた空間の先へ吸い込まれていく。

「ユテラルドォーッ！」

シャルアミの声が細く途切れた。

ユテラルドは床を蹴って、羽根のように軽くオブリッドの前に降り立つ。ねじくれた黒い蔦の海の中で、力なく肩へもたれかかる女性の、長い金髪を指で梳いていた青年が穏やかな目をあげる。ユテラルドは静かに剣先で、青年のための空間をさぐる。

『待ちなさい』

「待て！」

二つの声がその手をとどめる。ユテラルドの問いかけるようなまなざしに、オブリッドは言葉をつなぐ。

「俺はシャルアミやおまえとは違う。俺はこの国の王家の者だ。……この国と共に滅びるのが……責任ってものだろう」

唇の端をあげて冗談めかした笑みを浮かべると、かたわらに抱きよせた女性の、動くことのない、人形のように端整で蒼白な顔に優しい目をむけて、金の髪へ頬をよせた。
「リスムルを置いて行く気もないしな」
「……オブリッド」
「皇子……」
やわらかな光とともに、黄金の鳥がオブリッドのそばへ舞い降りる。鳥はゆっくりと、シエナの姿をとりもどすと、オブリッドの前に頽れた。
「ごめんなさい、……私が……こんな……」
「いや、バグラゲラがクレストに執着したのが原因だ。そしてその理由を与えたのは俺たちだ。因果が巡っただけにすぎない。あまりにも……多くの犠牲を払いながら……な」
「ママ？」
小さな鳥がシエナの周囲を飛びまわる。シエナが両腕で抱きとめると、鳥は少年の姿に戻り、しっかりと母親へしがみついた。
「ママ、どうしてないてるの？」
「それはね……、ビルホルゴが戻ってきてくれて嬉しいからよ」
少年は顔をほころばせると明るい笑い声をあげて、濡れた母親の頬に顔をすりよせる。シエナは涙があふれる瞳をユテラルドへ向けた。
「ユテラルド、私が《魔人》です。あなたをここへ呼び寄せてしまった張本人。どうか……私

を……救ってください」
　シエナはビルホルゴを固くだきしめて目を伏せる。
「ユテラルド、おまえには世話になり通しだな。……来世とやらがあるなら、その時には借りをかえす」
　かすれてはいるが、陽気な笑い声をあげたオブリッドの顔が、すっと引き締まった。
「すまん、……やってくれ」
　ユテラルドは歯をくいしばった。痛いほどの沈黙の中、クレストの力が徐々にユテラルドの全身、そして握り締めた剣の青白い刃を黄金の色に変えていき、やがて幅広の剣身が燃え立つような黄金の輝きをあふれさせる。
　ユテラルドは大剣をふりあげた。
「来世での約束、忘れるなっ！」
雄叫びと共に振り下ろされた剣が床を貫き、剣身から突き刺すような光がふくれあがる。光の球は周囲のものを呑み込み、すべてを黄金色に染め上げて部屋中にあふれ、わずかに残っていた塔、そして空を埋めつくす。
　シエナも、彼女に抱きしめられているビルホルゴも。
　オブリッドと、そのかたわらの皇女リスムルも。
　黄金の光の中で、ゆっくりとその形を失って行く。
　黄金の光は太陽の輝きへ、輝きは白い閃光へ変わり、そこにあったすべてのものを溶かしさ

った。

第十二章　ビリヤナ　生と死と、再生と

真っ赤な炎が、緑の葉を焼き、銀色に輝く幹をなめる。

何かを命じている怒号、悲鳴に似た叫び、ゴウゴウと風が巻き上げられる響きと、炎に包まれた木々が弾ける鋭い音、そして苦しげに身をよじる呻き。

いくつかの木は全身にまといつかせた炎の花から、火の粉を舞い上げ、下生えの草や、仲間の木々へ炎を広げている。

炎の間を鎧を身につけた男や、長衣の老人、うら若い女や子供たちが、大小の壺や桶、大きな布を振り回して、けんめいに炎を消そうと右往左往している。

だが、草色や黒い鎧を身につけた数人の男たちは、炎には目もくれずに剣や棍棒、斧や槍を手に、一ヶ所へ押し寄せている。

「ちっ、冗談になってねぇぜ！」

二本の曲刀が白々とした光をきらめかせて、突き出された槍を払い、持ち手の腕へ切りつける。照りかえしに染まったフェルクの顔には、びっしり吹き出した汗と、細かな灰が貼りついている。口の中に飛び込んできた灰を吐き捨てながら、背後に立って同じように人垣へ剣を突きつけている男へ声をかける。

「リヤナッ、本気で逃げねぇとおだぶつだぞ！」
「わかってる！　でも……ユテラルドが」
手斧と棍棒をふりかざした二人の男が走りよる。リヤナは体を横に沈ませて斧の軌跡から身をかわすと、剣で棍棒を受け止めてひねりつつ弾く。斧の持ち手が返しざまに、横に切り払ってきたのを、ぎりぎり剣の端で受け止めた。
両手の剣を頭上にかかげたフェルクは、にじりよってくる敵の中に踏み込むと、曲刀を手の中で踊らせながら、舞うように周囲を切り払う。鋭い刃を腕や顔に受けた男たちは、呻き声をあげて後ずさる。しかし、傷つき血を流して武器を引きずりながらも、男たちは二人へ立ち向かってくる。
「消えた野郎の心配なんかしてる場合じゃねぇよ！　くそっ、けっこう痛めつけてやってるのに、こいつら逃げようとしねぇ」
「神聖なビリヤナに火を放った犯人を、何がなんでも殺そうと思ってるんだろ……っつ！」
黒い鎧の男が飛び出してくる。突き込まれた幅広の短剣を剣で受け止めたとたん、逆の手ににぎりしめた細身のナイフが顔を狙って振り上げられる。リヤナは素早くその場にしゃがみこみ、相手のむこうずねを思いきり剣でなぎ払った。
男は弾みをくらってあお向けに倒れ込んだが、体をひねって体勢をたてなおすと、足を引きずりながらも、向かってこようとする。
何かが視野のはしを顔めがけて飛んできたのに気づいて、リヤナは体をひねってかわしたが、

飛んできたものは急に速度を落として、リヤナの肩を滑って腕に落ちた。木の繊維を幾重にも編み上げて作られた、モレア独特の灰色のロープ。

とっさに剣の刃を滑り込ませようとしたが及ばず、ロープの輪がリヤナの両腕と胸当て鎧を締め上げる。

「フェルク、投げ縄だっ！」

リヤナの叫びに目を走らせたフェルクは、自分に向かってきたロープを払い落とすと、ロープに引かれて倒れたリヤナの上へ立ちはだかった。

曲刀の一振りで切り払おうとしたが、堅いロープは鋭い一撃を受けても半分以上が残ったまま、ぎりぎりとリヤナを締め上げる。

フェルクへも輪になったロープが投げかけられる。大振りの曲刀ではじきながら、もう一方の刀で、ささくれだったロープを叩き切る。ロープの輪を振りほどいたリヤナは、立ちあがろうとした体勢のまま、動きを止めた。

「…………あれ……は？」

「おいっ、なにやってんだよ」

「フェルク、戻ろう！」

「な？　お、おいっ!?」

跳ね起きたリヤナは、荒々しい剣さばきでロープをつかんでいた男の首をなぎはらい、よろめいた体へ足をかけて頭上を飛び越えると、そのまま、炎がもっとも激しく燃え広がっている、

ビリヤナの森の中央へと走り出した。
「なに、やってやがんだよっ、あああ、つきあってらんねぇっ！」
たった一人、敵のただ中に取り残されたフェルクへ向かって、一斉に敵が攻めよってくる。黒髪の青年は曲刀を一閃させて敵をひるませると、短い棍棒をもつ男めがけて体当たりをかけた。迎え撃とうと繰り出された棍棒を、弧を描いた刃が一刀のもとに腕ごと切り落とす。
「せっかく、この人数ですんでたってのによ、バカやろうどもがっ！」
敵の輪から飛び出したフェルクは、悪態をつきながらリヤナを追って、火の粉が舞いちる森の中を走りぬけた。
後ろから追ってくる者以外は、みんな火を消すことにやっきになっていて、リヤナやフェルクへ向かってくる者はいない。
リヤナはまっすぐ、化け物のように巨大なビリヤナの大樹めがけて走っていく。その先に、モレアの村人とは違う、赤い軽鎧をまとった赤毛の女性が立っていた。
女性は周囲を見まわしていたが燃えている下草に駆けよると、懸命に踏み消そうとする。リヤナは息を切らせながら、彼女の隣へかけより回り込んで顔をのぞきこむ。リヤナの目が驚きに見開かれた。
「やっぱり……、シャルアミ？」
呼ばれた赤毛の女性は、ハッと顔をあげた。
「私の名前を知ってるの？　あなたは誰？　……ああ、それよりも、この火を消さないと！」

　赤毛の女性は木を包む火に向き直ると、土をすくいあげて炎へむかって投げかける。リヤナは眉をひそめると彼女の肩に手をかけた。
「ストルタのシャルアミだよね？　どうして火を消そうとするんだい？」
「ストルタにとってモレアとビリヤナは不倶戴天の敵だろ？」
　ようやく追いついてきたフェルクが息をきらせながら口をはさむ。
　シャルアミは振りかえりもせずに、いらだたしげに叫んだ。
「そんなの、私には関係ないわ。ビリヤナが焼けちゃったらユテラルドが帰ってこれなくなる！」
「えっ!?」リヤナとフェルクは狐につままれたような顔で互いに目をやる。
「シャルアミ！」
　低い声にふりかえったシャルアミへ、濡れた布が放り投げられる。
「ありがとう、ラルバドラ！」
　頬に大きな傷跡がはしっている、黒い鎧をまとったモレアの《報復者》が同じような布を木を覆う炎へ押しつけて消している。シャルアミの声に小さくうなずいて、男は大樹へ向かって走り出した。
　リヤナたちの前に立ちはだかった老人をはじめ、多くの村人たちが大樹へ燃え移ろうとする炎と戦っている。黒鎧の男はそんな人々へ何かを命じている。
「どうして……こんなことになってるの!?」

シャルアミは炎へ向かって、重い布を叩きつけては少しずつ炎を消していく。だが、その周りで、炎はさらに燃え広がる。
リヤナはシャルアミの腕をとった。
「むりだ、逃げた方がいい」
「邪魔しないで！　ユテラルドが戻ってくるまで、ビリヤナを守らないと」
乱暴に振り払われた手を、リヤナは憮然とさする。フェルクがぼそりとつぶやいた。
「火ぃつけたのは、ユテラルドだけどな……」
息をのんだシャルアミが、厳しい目で振りかえる。
「そんな！」
「本当だよ。シャルアミだったら俺がわかるはずだ。俺はセクルエのリヤナ」
食い入るようにリヤナを見つめたシャルアミの表情がゆっくりとやわらいでいく。
「……リヤナ？　屋根から降りられなくなってベソかいてたリヤナ？」
フェルクが吹き出す。なさけない思いでリヤナはうなずいた。
「そう、そのリヤナだよ。俺たちはビリヤナを焼くためにここへ来たんだ」
足音に気づいたフェルクが、二人を追ってきたモレアの剣士たちへ向かって飛び出していく。
リヤナはシャルアミへ手を差し出した。
「ここにいちゃ危険だ。一緒に脱出しよう」
シャルアミは、差し出されたリヤナの手を見つめていたが、目をそらすと炎へ向かって布を

振り上げた。
「私はユテラルドを待つわ」
「シャルアミ！」
「あなたの仲間を放っておいていいの？　早くいって！」
リヤナは、背をむけたシャルアミと、背後から聞こえてくる争いの音の間でとまどう。唇を噛み、シャルアミへ背を向けたリヤナの目を、白い光がつらぬいた。
炎と火の粉にあおられるビリヤナの大樹が大きくざわめき、枝の一つからまばゆい光があふれでて、丸くふくれあがる。周囲にいた人々が驚きの声をあげてこずえを見上げる。シャルアミが弾かれたように立ちあがった。
「ユテラルド！」
「えっ？」
あっけにとられたリヤナを置き去りにして、シャルアミはゆっくりと降りてくる光の球へ向かって駆けだす。
光は徐々に白から金色へ色を変え、降りてくるにしたがって人の背丈ほどまで大きくなる。ふわりと大地に触れたとたんに光は消え去り、黒い鎧を身にまとった銀髪の青年が、青白い光が凍ってできたような凄烈な刃と、金の柄も美しい大振りの剣にすがりながら立っていた。
「ユテラルド！」シャルアミが喜びに顔を輝かせる。
大樹を見守っていたモレアの村人が驚きにざわめいた。

「森に火を放った男だ！」
「一体なにが……？」
「また、災いをもたらしに来たか！」
何人かは武器を抜いて突然現れた青年へにじり寄る。シャルアミはユテラルドの前へ飛び出すと、両手を広げてモレアの人々へ向き直った。
「お願い、止めて！」
シャルアミの登場に一瞬足を止めた村人たちは、しかし、さらに険悪な表情で近づいて来る。
「ストルタ!?」
「復讐に来たか！」
リヤナは舌打ちして、シャルアミへ向かって走りよる。だが、それよりも早く、《報復者》の一人がシャルアミをかばって立ちはだかった。
「ラルバドラ？」
村人たちが驚きの声をあげる。とまどいの表情で後ずさる人々の間から、深い緑のローブに若草色の帯を締めた老人が、ゆっくりと歩み出てきた。
「ラルバドラ……おまえなのか？」
頬に傷を持つ男は軽く頭を下げる。老人は眉をひそめた。
「なぜ、我らを止める？」

「私はこの二人とともに、《母》の意を授かり戻りました」
老人が驚きに目を見開く。リヤナとフェルクは、シャルアミとユテラルドのそばへ駆けより、武器を身構えてモレアの人々へ向き直った。
「急に消えたと思ったら、なんだ、派手な鎧と剣で登場だな」
フェルクがあきれた様子でユテラルドへ呼びかける。
「ユテラルド、走れるか？　一気に抜けるぞ」
「待て、……武器を納めてくれ」
ユテラルドの言葉にフェルクとリヤナはユテラルドを振りかえる。シャルアミに支えられたユテラルドは、目を閉じたまま、大剣を空へむけて掲げゆっくり口を開いた。
「俺は……見てきた。ビリヤナは失ってはならないものだ」
ユテラルドの右手の甲に、白くクレストが浮かび上がると、大剣からあふれでた淡い光が剣を中心にうずまく。光のうずは高く伸びあがって白さを増して行く。ユテラルドは叫び声と共に剣を頭上へ突き上げる。人々が見守る前で不思議な竜巻は、疾風とともに四方へ弾けてビリヤナの森に広がった。
白い光と風に触れた炎は、うそのように静まり、荒れ狂う炎が消えた後には黒々とした燃え跡が無残な姿をさらす。風の広がりにあわせて炎は次々と追い払われていき、やがてすべて姿を消した。
ゆっくりと周囲を見まわしたユテラルドは、大剣の刃を大地へ向かって突きたてると、柄に

手をかけたまま頭をたれる。彼が身につけている鎧が、淡い赤色の光を浮かび上がらせ、その光が大剣を通じて、今度は大地へと流れ込んで行く。

焼けただれた大地に突き刺さった剣の周囲から、小さな草の芽が顔をのぞかせると、緑の葉を広げる。その周りからも新しい芽が姿をあらわし、黒い炭や灰に覆われた大地の上を新緑の色に染め上げる。

火にあぶられて焼け焦げた木の皮が乾いた音をたててはがれ落ち、その下からみずみずしい新しい皮がもりあがり、焼け死んだ枝の代わりに新しい芽が細い枝を差しのべ、つややかな若葉を開く。

空気を裂く激しい音をたてて、ユテラルドの鎧にヒビが走り、覆っていた光が消えうせた。青年は苦しげに眉を寄せて大剣をにぎりなおす。きつく閉じられた目のはたを、額から吹き出た汗が流れ落ちた。

彼のかたわらに立っていたシャルアミが、腰に下げた小袋からパルミラ片を取り出して、それを剣の柄にそえた。

「ユテラルド、使って」

パルミラ片が弾けてささやかな光が剣を滑り降りて大地に消える。剣の脇に生えてきた草は、大きく葉を広げて、ちいさなつぼみをふくらませている。

突然、草の広がり、木々の芽生えの速度が勢いを失った。

ゆっくりと光が薄れようとしている大剣を握りしめるユテラルドの手に力がこもり、苦悶に

ゆがんだ顔が両腕の間に沈み込む。荒く息をつぎながら、ユテラルドは体をおこすと、自分自身に言い聞かせるように怒鳴った。

「まだだっ！」

シャルアミは小袋の中を探るが、役に立ちそうなものを見つけられずに唇を噛む。ラルバドラが竜の姿が刻み込まれたナイフを差し出した。

「《母》の恩寵を受けた剣だ」

問いかけるように見上げるシャルアミへ、ラルバドラは静かにうなずきかける。緑のローブをまとった老人が引きとめようとする手から離れて、シャルアミとユテラルドの隣に立った。

「森の再生のためならば、わしも祈ろう」老人は手にした杖を剣に添わせる。

シャルアミも、渡されたナイフの刃を剣の柄に乗せ、片手をユテラルドのかたくにぎりしめられた手へ重ねて同じように目を閉じた。

杖とナイフから、鮮やかな緑の光が大剣へと流れ込む。森がふたたび、ざわめきながら枝を伸ばして緑の葉を広げはじめた。蘇った草花が小さな花をいっぱいに開く。炎がなめた大地や木々だけでなく、その外まで命の息吹きが広がり満ちる。

杖とナイフが音を立てて割れ、シャルアミと老人は後ろにさがった。

ユテラルドが顔をあげ、こわばった両手をゆっくりと剣から離す。大剣はひとりでに大地から浮かび上がると、くるりと切っ先を上へ向けて大樹のこずえへと登っていった。人々が見守る中、剣は急速に色を失なうと景色の中に溶けてしまった。

剣が消えた先に、赤味を帯びたビリヤナの果実があった。他の枝の果実よりずっと小さいが、つややかな光を放っている。と、その果実が枝を離れ、おいしげる草の中へ落ちた。

ユテラルドとシャルアミは、木の実が落ちた場所へ駆けよると、一瞬ごとに大きくなる若木を見守った。

細い若木は懸命に枝を広げると青い空へ向かって新緑の色の葉をいっぱいに開く。

高く太く姿を変えていた銀色の幹がゆっくりと落ちつきを持った鈍い色へかわり、若葉も深い緑になる。葉の間に白い花がポツリポツリと星のようにまたたいたかと思うと、たちまち葉を埋め尽くさんばかりに小さな花びらがあふれる。

ビリヤナの大樹がざわめき、風が森の中を吹き渡る。若木を埋めつくした白い花が、鳥の群れが飛び立つように、いっせいに風に乗って舞いあがった。

大樹の枝と葉の間をくぐり抜け、澄み渡った青空の中へと飛び出して行くと、陽の光に白さをきわだたせながら、遠いかなたへと飛びさっていった。

朝もやが太陽の光に消えるように、飛び交う白い花びらと若木は忽然と消えうせ、あとには草と大樹だけが残っている。

「夢……じゃねぇよな?」目をこすりながら呆然とフェルクがつぶやく。

ユテラルドは空に目を向けたまま口をひらく。

「リューベーンだ」

「えっ?」リヤナが困惑して問いなおす。

ユテラルドはゆっくりと振り向いて、かたわらのシャルアミ、とまどいの表情を浮かべているリヤナとフェルク、すべてを理解した目で見返すラルバドラと老人、そして言葉もなく取り巻いているモレアの人々へ目をやった。
「リューベーンがあった土地にビリヤナが生えた。これで……」
言葉を切ったユテラルドは、悠然（ゆうぜん）とそびえるビリヤナの大樹をあおぎみた。
「大地の力が戻ってくるだろう。荒れた土地もまもなく緑に還（かえ）る」
「ちょ……、ちょっと待てよ。いきなりそんなことを言われて、信じろってのかっ⁉　いったい、なにをどうしちまったんだよ、ユテラルド？」
我に返ったフェルクがまくしたてるが、ユテラルドは穏（おだ）やかな目で友人を見つめる。
「俺は、ビリヤナの《サイクル》を見た。この世界を支える法則を知ったんだ。モレアの言うことは正しかった。ビリヤナは世界を支えている」
あっけにとられたフェルクは助けを求めるようにリヤナへ目を向ける。リヤナは堅い表情でユテラルドとシャルアミをみつめたまま黙（だま）っていたが、重く言葉をしぼり出した。
「どうやってそれを証明するんだい？」
「リューベーンのビリヤナが、緑と命を呼び戻す」
「それじゃダメだ。勝手に生えただけだと言われるだけだね」
「だが、それが真実だ。俺は真実を語る」
緑のローブの老人が進み出た。

「我らの言葉を、外の者たちは聞き入れようとはせん。それでも、我々は語り伝え、ビリヤナ様を守る。いつか、良き道がみつかるまでは……」

「おい、ユテラルド、おまえ、議会の……フォントレールの意思に逆らう気か?」

「ビリヤナを滅ぼすと言うならそうなる。だが、その前に俺が見たすべてのことを議員たちに話したい。……一度はこのビリヤナの森に火を放った俺の話を」

「聞き入れられると思うか?」

「やらねば、なにも始まらない」

紅い髪がユテラルドの肩にふれ、細い指ががっしりとした手をさぐる。ユテラルドはシャルアミの手を包み込みしっかりとにぎりしめた。

「なら、やってみればいい。……もっとも、俺たちを帰してくれるのならって前提があるわけだけど」

肩をすくめたリヤナは、いつしか輪を縮めて自分たちを取り囲んでいるモレアの人々を見まわす。

「道を開けよ」

ローブの老人の声に、人垣はとまどいつつも一筋の道を開く。ユテラルドは老人へ向き直った。

「俺を信じてくれるのか?」

「おまえは過ちを正した。《万物の母》の力をもって。疑う必要はない。それに……」

老人は視線を下ろして、シャルアミの手をにぎりしめているユテラルドの右手を見つめる。

「古き言い伝えでは《クレスト》は《母の愛し児》の証。数多くの忌まわしい噂に消されてしまった話だが、まだ信じる者も残っておる」

目を細めた老人は、ラルバドラにうなずきかける。黒鎧の剣士はユテラルドに続こうとしたが、銀髪の青年はそれを押しとどめた。

「今は、俺たちだけにまかせてほしい」

「それが良いと言うのなら、そうするがいい。だが、私の手助けが必要であれば、いつでも駆けつけよう」

ラルバドラの言葉に、ユテラルドとシャルアミは微笑みを浮かべる。

リヤナとフェルクの後につづいて、ユテラルドとシャルアミは人の輪を抜け、ビリヤナの森から、普通の木々の森へ踏み入った。振りかえると、大樹の葉の間を舞い飛ぶ白い光が、木々の向こうに見え隠れする。

「ユテラルド……、みんな、わかってくれるわよね？」

肩を並べて歩くシャルアミが、憂いをふくんだ瞳を上げる。ユテラルドは右手を上げ、ぼろぼろになった革ベルトの間からのぞくクレストを見つめた。

「偏見は根強い……。なにもかもが、すぐに変わるとは思えない。だが、いつかは伝わるだろう」

ユテラルドは右手を覆い隠していたベルトを引きちぎると投げ捨てた。

「これも、サイクルも、消えはしないのだから」
あらわになったクレストをユテラルドは厳しい目でみつめる。その手にシャルアミのきゃしゃな手が重なる。
二人はみつめあい、微笑みをかわした。

終章　ビリヤナの森　やがてくる時

フォントレールの会議場は怒号に満ち、とうてい議論とは呼べない一方的な言葉ばかりが、豪奢な建物に響き渡った。議会が始まって以来の大騒ぎは兵士たちが呼ばれて、議論の渦中の人物であった四剣主の一人ユテラルドと、シャルアミと名のる女が町から逃走するまで続いた。

フォントレール議会の議員たちは、英雄として名のある四剣主の一人が裏切った事実を表ざたにすることができず、すべてを隠した上で、四剣主のうち、ただ二人残っているリヤナとフェルクへ追撃を命じた。だが、リヤナは議会の一方的な攻撃に異議をとなえて動かず、フェルクは探索の旅に出たものの、表ざたにできない議会の裏をかいて、のらりくらりと報告をごまかすばかりで、結局のところ、事態はうやむやのまま放り出されてしまった。

それと時をほぼ同じくして、かつてリューベーンと呼ばれた一大帝国があった土地に、一組の男女が住みついた。

帝国が消え去って以来、百年近く草どころか苔すら生えなかった荒地に、こつぜんと一本のビリヤナの木が現れてから、荒地には細々と草花が生えるようになり、男女がやってきた頃にはひょろひょろした若木の林と小さな草原が、オアシスのように赤茶色の大地の中央に生まれ

ていた。
二人は粗末なテントを張って寝泊まりしながら、遠い川から水を引き、緑が広がる手助けを続けた。立ち寄る者がいれば温かく迎えて、聞く者がいれば消滅したリューベーン帝国や、ビリヤナについての話を語り聞かせていたが、フォントレールの意にしたがってビリヤナを傷つけようとしようものなら、たちまち取り押さえて荒野へ放り出した。
二人の努力に応えてか、森と草原は魔術でもかけられているように、日に日に大きく広がり、一年を待たずして荒地のほとんどは緑に覆いつくされ、ビリヤナの木も自分よりも大きな木々に囲まれるようになった。
二人はビリヤナを囲む森の端に、モレアの村そっくりの家をつくって住むようになっていたが、二人の人柄に惹かれた人々がよく訪れるようになり、自然と家の数が増えていった。最初に住みついた男の右手には、災厄の印と呼ばれるクレストがあったが、男はそれを隠すわけでもなくごく自然にふるまっており、なにより続いて住みついた人々は、そんなものを気にしない者たちばかりだった。
だが、ある日そんな小さな集落へ、フォントレールの兵団が攻め寄せてきた。男はクレストが刻まれた手に剣をとり、連れそう紅い髪の女は弓を手にして、四十人近い兵の前に立った。
四十に対して二。勝敗は明らかだと見えた。だが、勝利を確信した兵たちの前に、十数名のモレアの剣士たちが割り込み、対立した。

そして、兵団の指揮官が突撃を命じた時、兵団と共に進軍してきた四剣主の一人、リヤナが離反して配下の兵と共にその場へとどまったため、半減した兵だけが森を守る男女とモレアの剣士へ向かっていった。

モレアの剣士の勇猛果敢はもちろん、赤毛の女の放つ矢は生き物のごとく的確に兵を襲い、クレストを持つ男の剣技もただものではなかった。彼一人に兵が三人四人とまとめて打ち倒されていくのを見た一人の兵が、彼の正体に気づいてその名を口にした。

「銀髪にクレスト……、こいつは四剣主のユテラルドだ！」

名前はさざ波となって兵の間に広まり、とたんに兵団は総崩れとなった。

敗走した責任を問われたリヤナはこう応えた。

「リューベーン跡の荒地は緑に変わり、村々を苦しめていた異常な作物の不作もなくなっています。だのになぜ今、ビリヤナを切り倒さねばならないのでしょうか？」

リヤナは懲罰のため幽閉され、兵士たちには緘口令がしかれたが時すでに遅く、現行の議会に反発する勢力によって、ユテラルドがモレアについたこと、リヤナが議会の決定に逆らって幽閉されたとの情報がフォントレール中に広まっていた。

対抗勢力の突き上げを抑え込むため、議会は功名心にあふれた者たちを集め、地位のある者には兵を率いさせ、それ以下の者たちは遊撃隊としてとりまとめると、リューベーン跡の森へ、

反逆者討伐のために出兵させた。
普通の村ならたあいなく、小さな町も楽に制圧できる人数が、フォントレールを出て帝国の跡地へとむかったが、結局、辿りつくことはできなかった。
進路にあった谷で待ち伏せにあい、なだれ落ちてくる岩や土砂の前に退却するしかなかったのだ。
待ち伏せていたのは、銀髪のユテラルドとモレアの《報復者》たちだったが、兵の何人かは、四剣主の一人、フェルクを見たと証言していた。
内密の出兵であったのに待ち伏せされたことから、どこかに内通者がいるのではないかとの声があがり、フェルクも名指しされた。だが調査がはじめられるよりも早く、議会内で最も力を振るっていた議員が暗殺され、その取り巻きも事態の責任を追及されて失脚。
豊作のおかげで飢えから解放された人々の心からは、ビリヤナへの敵対心は薄れてしまい、無駄な出兵への反感だけがつのっていたことも後押しして、ビリヤナの木伐採の話は立ち消えた。
新しい議員たちは四剣主たちの罪を問わず、彼らの名声と人望を望んで復帰を願い、リヤナとフェルクはフォントレールの守護者としての地位に戻った。
ユテラルドの元へも使者が訪れてくりかえし帰郷を願ったが、クレストを持つ若者は首を縦に振らなかった。

「故郷の大事であれば戻ろう。だが、今の俺にはこの森を守ることの方が大切だ」

短いが激しかった争いが終わると、リューベーン跡の森へ多数の人々が移り住んできた。ほとんどはモレア村の人々だったが、シャルアミの生還を聞いてストルタから訪ねてきた者や、ユテラルドの抵抗を知り共感してフォントレールからやってきた者もいた。

集落は村となり、ユテラルドとシャルアミは村に改めて「リューベーン」の名をつけた。

ユテラルドは村を森の外へ広げ、モレアのように森にひそむ生活ではなく、外との交流を盛んに行うよう勧めた。

そして一年。

豊かな森と草原の村リューベーン。そこがかつて草一本生えない不毛の大地だったことを、人々は忘れつつあった。

星が光を失い、東の地平が白さを帯びて天が濃紺の色に変わる夜明けの少し前。ユテラルドは厚手のシャツとズボンに革鎧と籠手と言う姿で、土間にテーブルと椅子だけという、質素な我が家の居間に立っていた。マントに手を伸ばして、ふと思いなおすと隣の部屋をのぞきこんだ。

せまい部屋の中には、わずかな家具と寝台があり、寝台の掛布は人一人分のふくらみを覆っ

ている。ユテラルドは物音を立てないように気をつけながら寝台へ近づいた。
シャルアミが穏やかな寝息をたてている。ユテラルドは紅い髪にふちどられた顔を優しい眼差しで見つめていたが、短く「ごめん」とささやきかけると、そっと彼女から離れた。
居間へ戻ってマントを身につけると、旅の荷物を詰め込んだ小さな背負い袋を肩に、質素な我が家の戸口をくぐった。
昼になると、子供たちや仕事をする人々でにぎやかな村の中も、まだ明けきらないこの時間は静まりかえっている。ユテラルドの家とほとんど変わりのない、木の枝や巨大な羊歯の葉でふいた屋根と藁と土の壁でできた、粗末な家々が薄暗がりの中に点在しており、その合間には家畜の囲いや、土の窯などがある。村の外周には畑が広がり、さまざまな形の茎や葉がシルエットになっていた。
最初、シャルアミとともに、ここへやってきた時には、砂のような土地は鍬をいれても土ぼこりが舞い飛ぶだけだった。今は木々の葉が柔らかな土地に変えてくれ、弱い作物でも十分育つだけの良い土になっている。
ユテラルドは、ここでの苦労を思い出すたびに、この地の昔の姿が忘れ去られるように、ビリヤナへの誤解とクレストへの敵意が消えてくれることを願っていた。
それはうまく行っているように見える。だが、それはこの村があまりに居心地いいために、錯覚しているだけのような気もする。
静かな村の中を見まわして何も異変がないことを見て取ったユテラルドは、村の奥、森の暗

闇の中へ足を踏み入れた。
うっそうと繁った木々で、空の弱い光はさえぎられてしまい、ほとんど視界がきかないが、通いなれた道だけあってユテラルドは危なげなく奥へ奥へと進む。やがて行く手から淡い光が差しこんできた。
闇の中に、白い燐光に包まれたビリヤナの木が浮かび上がっている。近づいたユテラルドの全身を、ビリヤナの光が白く照らし出した。
モレアで最初に見た時から、ビリヤナの大きさは変わらない。大樹には比べるべくもないが、モレアにあった普通のビリヤナよりもずいぶんと小さく、この周囲にしげる木々と同じぐらいだ。そんな痩せた体でも懸命に周囲へ命を与えている。
ビリヤナが大地の命を奪うという誤解は、クレストが再び、どこかの土地と人々を《浄化》することがない限りよみがえってくる心配はない。問題は《クレスト》への偏見だ。クレストは《万物の母》の《目》にすぎない。クレストを持つ者に激しい絶望を抱かせたとき、《母》は《浄化》の力をクレストを持つ者に与える。
悲しみを消すために。
救いのための《浄化》。しかし、突然の死をもたらすクレストを人々は《死の運び手》《災厄の印》と見て取った。そして不吉なもの、呪わしいものとして迫害した。いや、迫害しているのだ。今も、どこかで同じようにクレストを持つものが、人々の冷たい視線に苦しめられているかもしれない。そして、その視線が絶望を呼び《浄化》の引き金になり、浄化は人々に根強

い恐怖を植えつけるだろう。
「俺はクレストを持つ者を探そうと思う」
光の粒が無数に散りばめられたビリヤナへ語りかける。
「クレストを持つ者を理解してくれる人々が必要だ。だから、行ってくる」
さらさらと梢が風にゆらいで光が暗い空へと吸い寄せられるのを見送ったユテラルドは、白い光に背をむけて、再び森の闇へと戻り、寝静まった村を横切る。
村の外周をとりかこむ、しっかりと組み上げられた石垣の先には大きな木の扉があり、その隣に石垣の上へ登るゆがんだ階段と小さな見張り台がへばりついている。ユテラルドが近づくと、見張り台から若い男が顔を出した。
「おはようございますっ！……って村長、旅にでも出ちまうんですか？」
ユテラルドの旅姿をまじまじとみつめて、困惑した声で問いかける。
「後のことはヴォドスにまかせてある」
ユテラルドはかんぬきを外して大扉を押し開いた。小さな草原と林が、なだらかな丘の上を覆っている。どこからか、鳥たちの朝のさえずりが聞こえてきた。
「村長がいなくなったら、またフォントレールが仕掛けてきちまいますよ」
「その心配はない。もしも何かあったとしても、シャルアミなら大丈夫だ」
「えっ？　シャルアミさんは……」
「残る。ここのことはよろしくたのむぞ」

大扉をはさんで、先ほどとは裏にあたる小窓から顔をのぞかせた見張りの青年は、なにか腑に落ちない顔つきでしきりに首をひねっていたが、歩き出したユテラルドの背へ、あわてて声をかけた。

「旅のご無事を。必ず戻ってくださいよ！」

軽く片手をあげて挨拶をかえしたユテラルドは、白々と明けてきた朝の光の中を、踏み固められた道を街道へ向かう。芽吹いてから、たった二年しかたっていない物とは思えない、五年、十年の大きさの木々が小道の上に緑のアーチを差し伸べていて、そこを小さな鳥の影がいくつも横切る。林の奥へ目をやれば、ほっそりとした鹿の影がちらちらと見え隠れしており、小さな群れが草をかきわけて移動する物音が耳に届いた。その音につられてか、下生えの間を小さな生き物が走りまわって、草の葉についた朝露を跳ね散らかす。

動物たちの数も種類も増えつづけている。動物たちは人を恐れることなく、村の周囲や街道を自由に駆けまわっていた。

だから、ユテラルドは道沿いの木の影にたたずんでいるものも、鹿かなにかだろうと思い込んでいた。

「遅い」

木の影から歩み出てきた者は、道の真ん中に立ちはだかって腰に手をあてると、口をとがらせて真っ直ぐユテラルドをにらみつけた。紅い髪の下で瞳が怒りに燃えている。

「置いて行ったくせに、遅れて来るってどういうこと？」

「……シャルアミ？　どうして」
「判らないと思ったの？　ここしばらく、ぼんやりしてることが多かったでしょ？　その上、こっそり旅支度ははじめてるし、用心してたらこれだもの」
　目の前の女性はしっかりと赤い革鎧を着込み、肩には弓、足元にはユテラルドが持っているものと、ほとんど変わらない旅の荷物が置いてある。
「シャルアミ、まさか？」
「どこへ行くのか知らないけれど、一緒に行くわ」
　あっけにとられていたユテラルドは、表情を堅くして首をふった。
「あてどのない旅だ。どんな場所へ行くことになるか、いつ戻れるかわからないんだ。村に残ってくれ」
「そんな旅ならなおのこと、一人で行かせるわけにはいかない」
　厳しく見上げていたシャルアミの瞳が優しくゆるむ。
「ユテラルド、とっても強くなったから、守ってあげるなんておこがましいけど、手助けなら私でもできるでしょ？　約束は守りたいの」
「フォントレールとの戦いで、十分助けてもらった。もう、約束にとらわれる必要はない」
「私は一生の誓いとして約束したのよ」
「しかし……」
「じゃあ置いて行ってくれていいわ。勝手についていくから」

口を開いたユテラルドは、しかし返す言葉がみつからないまま、大きくため息をついた。
「まいった……、どうしていつも……」
「いつも、こうやり込められちゃうんだろう、でしょ？」
荷物を拾い上げ、ユテラルドの隣に立ったシャルアミが、いたずらっぽい笑顔で見上げる。
「どうしてだと思う？」
「口がうまいからか？」ユテラルドは憮然と返す。
「ユテラルドが優しいってことを私がよく知ってるから。それになによりも……」
言葉を切ったシャルアミへ、ユテラルドが顔をむけると満面の笑みが迎える。
「私はずっと、ユテラルドのそばにいたいと思うから」
ユテラルドの胸の奥にやさしい温もりが灯り、ゆっくりと広がっていく。
自分を支えてきてくれた存在への思いが、幾千もの言葉になってこみあげてくる。だがやっとのことでつむいだ言葉は短く、味気ないものだった。
「感謝している」
それでも、シャルアミは頬をそめて、照れくさそうに視線を行く手へそらした。
「で、どこへ行くの？」
「フォントレールの辺境にある小村だ。そこにクレストを持つ者がいないか探す」
「クレストの本当の意味を伝えるのね？」
「そのまま、フォントレール中をめぐり、必要なら隣国へも行く。遠く長い旅だ」

「でも、やらなきゃ。ね？」

ユテラルドは大きくうなずく。

二人の前には朝日に照らされて輝く、豊かで広大な大地が広がっていた。

――終――

あとがき

大多数のみなさま、どうもはじめまして。

そして、その他のみなさま、不肖、下村家恵子は帰ってまいりました。

久方ぶりの小説が、フロム・ソフトウェアの作品「エヴァーグレイス」のノベライズとは、「キングスフィールド」からの追っかけをやってた身としては、感無量。身にあまる光栄です。

ゲームの雰囲気から逸脱しないように、そしてキャラクターや舞台の設定を出せるように気をつけてノベライズしたつもりでしたが、終わってみれば書き足りないところ、どう見ても言葉が足りない部分、もしかしたら勘違いしてたかも知れない場所などがあって、心苦しいばかりです。特に《ストルタ四剣主》については、あくまでも導入のエピソードと割りきって、あっさりと流してしまったのですが、「フェルク」との確執、「リヤナ」との心の機微など、本当なら書いておくべき物がありました。……って言うか、フェルクの漫才はもっと書きたかったんですよね、あのキャラはおちょくると面白い人ですから。

かわりに本編で暴走してくれたのは「オブリッド」でした。

まさか、ここまでユテラルドの向こうを張るとは思ってもみなかったのですが、蓋を開けてびっくり。ゲームをプレイしている時から、妙に気に入ってたのは確かなんですが、やっぱり

要になったのは皇女リスムルとの設定でしょうか。それが固まったとたんに、熱血モード全開で動き出してしまいました。逆に、タイミングがつかみにくくて書ききれなかったのが「シャルアミ」です。まぁ、それが口惜しくて最終章を書いたわけなんですが。

えっ、最終章のユテラルドとシャルアミの関係？

さぁ、どうなんでしょうねぇ……（遠い目）。

そうそう、口絵の下に書かれている文章ですが（……ごまかした）、あれは「グレゴリアンチャント」の一曲から抜粋したもので、ラテン語です。意味は、

『我が悩みを苦しみを見たまえ、我が罪をゆるしたまえ、我が神よ』

です。暗いですねぇ、私が選んだんですが。

この小説がこうやって本になるまでには、たくさんの方々のお力添えがありました。

細々とした質問に答えてくださった「エヴァーグレイス」のプロデューサー、竹内様。

美しい表紙絵と口絵を仕上げてくださった、イラストレーターの菅原様。

そのイラストのための、製作環境を提供してくださったデジタルスタジオの佐野様。

ボケてた私に、小説を書かせる英断を下して、担当までやってくれた中津さん。

そして、〝あなた〟がこの本を手にとって読んでくださったことで、この本は無事に完結したわけです。みなさん、本当にありがとうございました。

この本が「エヴァーグレイス」をより一層楽しむための手助けになれば幸いです。

２０００年　６月　下村　家恵子

Kadokawa Haruki Corporation

下村 家恵子

エヴァーグレイス

*

2000年8月8日第一刷発行

発行者 角川春樹
発行所 株式会社 角川春樹事務所
〒101-0051 東京都千代田区神田神保町3-27 二葉第1ビル
電話03-3263-5881(営業) 03-3263-5247(編集)
印刷・製本 中央精版印刷株式会社

定価はカバーおよび帯に表示してあります
落丁・乱丁はお取り替えいたします
ISBN4-89456-196-4 C0093